
化物語（双）

Brandon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化物語（双）

【Nコード】

N0327H

【作者名】

Brandon

【あらすじ】

これは兄貴と戦場ヶ原ひたぎさんの出会いの話から始まる。60%吸血鬼で、「合わせ鏡」の兄弟の片割れの俺と主で、恋人のキスシヨットは今日もまた、トラブルコーラーである兄貴が持ち運ぶ様々な「怪異」に巻き込まれる。そんなどこか歪で、優しい物語だ。（傷物語（双）の続編です）

じよみミラー001（前書き）

この物語は傷物語（双）の続編です。先にそちらをお読みください。

「合わせ鏡」の兄弟の片割れ、スーパー阿良々木ブラザーズの実戦担当、俺こと、阿良々木奏は約二週間の春休みの真っ最中であるが、全校集会のために学校に登校した。登校と言っても、正確には兄である阿良々木暦の視界から、全校集会の風景を眺めていただけだ。

自分の体というか、存在は少々変わっている。兄貴と俺は二人で一人なのだ。二重人格に近いが、お互いは個として独立しており、性格も異なる。母が「合わせ鏡」の怪異に妊娠中に遭遇したため、このような形でこの世に生を受けた。

初めの頃は、兄貴も俺も自分たちの運命を呪い、辛い経験が多かったが、最近ではお互いの在り方を認め、共存共栄している。勉強や日常生活において、お互いの長所を活かし、日々をやり繰りしている。

そんな俺に数日前に大きすぎる転機があった。初恋をして、その女性と恋人関係になった。その女性は種族的には吸血鬼であり、年の差は500年ほどあるが、俺にとってそんな些細な事情はどうでもよかった。俺は心底、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードに惚れている。それで十分だった。

キスショットと心を通わす過程で、俺は60%吸血鬼という奇妙な存在になってしまい、兄貴に救われた。この恩は必ず返す。その時に忍野メメという不思議なアロハシャツの中年男性に出会ったの

だが、彼は「怪異」と呼ばれる現象の専門家であり、「合わせ鏡」について詳しく教えてくれた。詳細は理解できなかったが、世界に存在すべき位置、つまり、「存在位置」を共有している状況にあるらしい。完全な独立は無理だが、かなり改善はできるそうだ。

忍野さんは「存在位置」を共有していると言ったが、俺は肉体的な要素も大きいと思う。俺は現在、60%吸血鬼で兄貴は普通の人間だが、どちらかが食事をすれば餓えることはない。昔から、そうだった。睡眠や排泄行為も片方が行えば問題なかった。これは肉体的な要素ではないだろうか。

肉体を共有という表現が不適切なら、魂を共有していると言えばいい。俺は兄貴と別人でありながらも、根源は同じであり、お互いを生かすために、無意識の内に協力してきたのだ。ただ、魂は目に見えないし、存在するかも不明であり、同性と魂を共有しているというのはあまり声に出して言うことではないので、肉体を共有しているということにしよう。その方が落ち着く。間違っているが、この兄貴の内部というか、この奇妙な空間は落ち着くのだ。

さて、本日の全校集会の理由だが、その責任は兄貴と忍野さんと羽川翼さんという女子の同級生が原因である。細かい情報は省くが、兄貴が俺を助けるために、羽川さんの下着を使って忍野さんを脅迫した。自分の下着、それも上下セットで脅迫の材料として使われた羽川さんは憤慨した。それは女性なら当然の心理だと思われる。

「忍野のライターで自分の下着を汚されたってブツブツ言いながら燃やしてた」

と直接的な原因を生み出した変態兄貴は証言している。そして、羽川さんから逃れようと、忍野さんと兄貴は窓を突き破って校内に

逃れようとしたが、失敗したらしい。その後のことは不明。最終的には兄貴が勝ったようだ。

羽川さんによると、本日の全校集会はこの器物破損が理由であり、情報提供を学校側が求めていることを正式に発表するためと一部の生徒の進路相談のためらしい。兄貴に自首するつもりはなく、羽川さんは通報しないそうだ。俺はその寛容すぎる心に感動し、土下座して兄貴の悪行を謝罪した。結果、苦笑いされた。

「え？」

俺が思考に没頭していると、兄貴の驚いた声が聞こえ、思考の海から現実にも目を向けた。校舎内の階段の踊り場で、女子生徒が足を滑らせたらしく、上から落ちてきた。それを兄貴は反射的に受け止めていた。お姫様抱っこと呼ばれる格好で兄貴はうまく、その女子生徒をキャッチした。

「あ」

カランと音を立てて兄貴のポケットから鏡が落ちた。忍野さんから貰った「怪異」を写し出す、不思議な「鏡」。俺と兄貴の呪と絆である証拠の「鏡」は床に落ち、その蓋が開いていた。幸い割れていないようだった。

「……」

兄貴は一瞬戸惑ったようだったが、そつとその女子生徒を床に下ろした。その時になってその女性生徒が誰かようやくわかった。戦場ヶ原ひたぎ。それが彼女の名前だった。

「深窓の令嬢」なんてあだ名が付けられている女子生徒であり、異常なほどに病弱なことでも有名だった。体育の授業や全校集会は健康上の理由で参加せず、誰とも会話をしない。漫画から学習書まで幅広い範囲の本を常と呼んでいる。例外的に教師に指名された時は「わかりません」と小さく答える。ただし、学力は高く、トップクラスの成績を誇る。そんな生徒だ。

「おい、大丈夫か？」

兄貴が心配そうに尋ねるが彼女は何も答えなかった。ただ、ある一点を静かに見ていた。床に落ちたあの「鏡」を、そこに写っている光景を見ていた。

「兄貴、「鏡」だ！」

現在、兄貴が「表」に出ているため、俺の声は兄貴にしか聞こえない。すぐに兄貴は振り返り、「鏡」を拾い上げた。その間に戦場ヶ原さんはその場を去っていた。

「奏」

「うん、見えた」

兄貴がああ「鏡」を拾い上げる直前に俺と兄貴は確かに見た。

異常なほどに大きな「蟹」が鏡に写っているのを。

その不気味な「蟹」は戦場ヶ原さんに張り付くように、彼女の腹部に鎮座していた。

「体重が無かった。つか、軽過ぎた」

一旦、その場所を離れると兄貴は俺に話した。

「ダイエット中？」

「10kg無かった」

仮にそれが本当だとしたら、それはもはや人間では無い。あの「蟹」が怪しいが、実は戦場ヶ原さんが人外だという可能性もある。

「忍野さんかキスショットに聞いてみる？」

「そうだな」

特にこれ以上用事も無いので、キスショットが待つ廃墟に向かうことにした。他の下校中の生徒に混ざり、昇降口を抜け、人気の無い田舎の道を歩いている途中で後ろから声をかけられた。

「阿良々木くん」

羽川さんだった。まだ、春休み中なので、多忙な彼女も学校の仕事さがさほど無いのだろう。

「よお」

それに軽く手を上げて兄貴は答えた。

「帰る途中？」

「まあ、そうだな」

追いついた羽川さんは横に並んで歩きだした。ちょうどいい時に来てくれた。兄貴もそう思ったらしく、羽川さんに戦場ヶ原さんのことを尋ねた。彼女のことをまったく知らないで、情報が欲しかった。同じ中学の出身だったそうで、友人関係は無いが、お互い面識はあるらしい。昔は陸上部のスターのような存在で記録をいくつか残した。高校に入ってから、病気になる、現在のような状況であるとのこと。今日の全校集会には参加せず、進路相談のために訪れていたそうだ。

「なんでも知ってるな」

「何でもは知らないわよ。知ってることだけ」

情報量の豊富さを褒めた兄貴に対し、羽川さんはどこかの賢者のような返答をした。

「阿良々木くんの家ってこっち方面だっけ？」

「いや、奏がキスショットとイチヤイチャしたいとさ」

そんなことは言っていない。キスショットには会いたいけど。

「お兄さんは大変だね」

「生殺しだ」

嘘をつけ。それなら深層意識に潜っていればいいのに、視界を共有しているじゃないか。絶対にキスショットの胸を見る。キスショットが好きな腕枕をすると必然的にそういう体勢になる。兄貴は俺が気付いていないとでも思っているのだろうか。今度語るか。拳で。

「あ、そうそう、今日の件は大丈夫だったよ」

兄貴の悪行はどうやら隠蔽されたらしい。

「助かった。ありがとな」

兄貴もさすがに反省したのか、頭を下げた。そういえば、あの下着は弁償しなくて良いのだろうか。燃やしたのは本人らしいが。

「私も後で行っていい？」

「奏。いいか？」

「まあ、断る理由はないけど。会う理由は知りたい」

羽川さんには感謝しているがどうも苦手意識があるのだ。なんかこう底が見えないのが怖いのだ。

「キスショットさんはこれからあそこで暮すんだよね？」

俺がこの町にいる限り、あの廃墟に滞在する予定であり、俺もキスショットから離れるつもりはないから必然的にそうなるのだろう。

兄貴に代弁して肯定してもらった。

「生活用品とかどうするの？ 女のヒトだよ」

「あ！？」

完全に失念していた。自分の恋人の生活環境も考えられないようでは人間失格だ。

「すぐに確認した方がいいぞ」

「そうする」

深刻な自己嫌悪に悩まされつつ、俺はキスショットの生活をどうすれば快適にできるか考えた。以前はどのように生活していたのか。何が好きなのか。思ってみれば、ほとんど俺は何も知らない。まだ付き合い始めて数日であることは言い訳にならない。

「家具のカタログとか本でも持って行こうかなと思って」

「悪いな」

「うっん。私がキスショットさんと話したいだけだから」

人間を超越した存在に羽川さんは魅かれている。理由は知らないが、彼女には彼女の事情があるのだろう。途中で羽川さんと別れたすぐ後に、聞き慣れない声が聞こえた。

「羽川さんと何を話していたの？」

兄貴が振り返った瞬間に左の口腔内に限界まで伸ばしたカッターナイフの刃が差し込まれた。犯人は戦場ヶ原ひたぎ。学校にいる時とは別人のような冷たすぎる表情だった。

「動かないで」

恐ろしく淡々と命令してきた。本気だと言うことは明らかだったが、命のやり取りは初めてではないので、兄貴も俺も落ち着いていた。

「どうする？ 俺が「表」に出ようか」

「ヤバくなったら頼む」

兄弟間にしか聞こえない会話で行動方針を決めた。

「あの「鏡」は何かしら？」

「あの「蟹」は何だよ？」

相互に質問が交差した。兄貴がこの程度で怯えると思っているのなら、それは大きな間違えだ。この人の精神的な強さはもはや超人の領域に達している。いろんな意味で。

「好奇心というのは全くゴキブリみたいね。人の触れられたくない秘密ばかりに、こぞって寄ってくる。鬱陶しくてたまらないわ。神経に触れるのよ、つまらない虫けらごときが」

吐き捨てる様に告げ、戦場ヶ原さんはホッチキスを兄貴の右の口腔内に差し込んだ。挟み込むような形で。まるで蟹の鉗のように。

「奏」

「あいよ」

瞬時に俺と兄貴が入れ替わった。60%吸血鬼のため、直射日光は苦手だが、いきなり蒸発するわけではない。日中は能力が低下するだけだ。それでも、今の目的には十分だ。

「え？」

戦場ヶ原さんが思わず驚きの声を漏らした。それはそうだろう。俺にだって実際に見ればおどろくだろう。

ニンゲンがカッターナイフとホッチキスを噛み砕けば。

吸血鬼特有の鋭利な犬歯と顎の力で一瞬で凶器を破壊した。案外脆かった。不味かったのですぐに吐き出したが。

「あなた誰？　いいえ、何？　阿良々木くんじゃないわね」

初対面で俺と兄貴が別人だと分かる人は少ない。すぐに看破した点から相当勘が良いことが分かった。

「俺も阿良々木ですよ」

ただし、曆じゃなくて、奏だけど。さて、この物騒な相手をどうすればいいだろうか。話しが通じるなら嬉しいのだが、この雰囲気では無理だろう。対応を考えていると、某ネコ型ロボットの四次元ポケットでも装備しているのかと言いたくなるほどの量の文房具が現れた。カッターナイフ、ボンド、ノリ、ハサミ、鉛筆、シャーペン、絵の具、文鎮、定規、ペン。マーカー、修正液、ペーパーナイフ、三角定規と明らかにいろんな科学法則を無視した量だった。

「DORAEMON?」

驚愕で発音が変になってしまった。どうやって、持ち歩いているのだろう。

「敵対行為により、私の敵と認識します」

まるで文房具が手足の延長だと言わんばかりに戦場ヶ原ひたぎは臨戦態勢に入った。まるで、サイボーグを相手にしている感覚だった。隙が無いというか、無駄が一切ないのだ。かなりの場数を踏んでいる。

「戦争をしましょう」

そう言っつて、両手に戦場ヶ原さんは文房具を構えた。不思議と迫力がある。ただ、二人で戦争はできないと思うというツツコミを口に出さなかった俺はきつとまともだ。

「待て。話し合おう」

いきなり兄貴に強制的に主導権を奪われた。

「やりすぎだ」

「他にどうしろと？」

まさか、噛み砕くと兄貴は思っていなかったらしい。あの状況でそれ以外選択肢が無かったので許して欲しい。不死身でも痛覚はあるのだ。アレはさすがに痛そうだった。

「阿良々木くん？ あなた一体……」

「秘密を探られるのは嫌なんだろ？ 僕も嫌だ」

落ち着いた調子で兄貴は話しかけた。こういう駆け引きで兄貴の右に出る者はいない。数々のセクハラ行為と修羅場をこの口車で阿良々木暦は正当化してきたのだ。というのは半分冗談で、ただ単に兄貴が重度のお人好しなだけで、相手を落ち着かせて暴力行為から離れさせようとしているだけだ。実際に、俺が戦えば彼女を制圧することは容易いだろう。

「そう、でも、私くらいになれば、あなたのような薄っぺらい存在のことなんて、全て完璧に、お見通しなのよ」

「何様だよ！？」

ここまで自分に自信が持てるのはある意味凄いのではないか。その根拠はどこにあるのだろうか。

「それで、あの「鏡」は何かしら？」

「前言完全無視！？」

会話が成立していない。同じ言語を話している様に到底思えない。

「普通は人のことの聞く前に自分のことを話すのが礼儀だろ？」

「そうね。でも、それは人間間のルールで会って、ゴミに適用する法則ではないわ」

「OK。わかった。僕は帰る」

スーパー阿良々木ブラザーズは逃げだした。だが、回り込まれた。誰だよ。この人を病弱だなんて言ったのは。明らかに運動神経いいだろうが。

「こんな美少女から逃げようなんて、いい度胸ね」

「高校生は少女に入らない」

「美」の部分を否定しないほどに兄貴は成長したらしい。弟しては嬉しい限りだ。凄い進歩だ。

「今からこの「鏡」をくれた奴のどこ行くけど、どうする？」

「行くわ」

無理矢理会話を成立させたようだ。さすが兄貴と言いたい。

「やあ、阿良々木くん。何かいいことでもあったのかい？」

「いや、お前がどうした！？」

と廢墟の近くに辿り着いた途端に兄貴が絶叫したのは無理も無い。忍野さんがいた。それは別に不自然ではない。この人はここに寝泊まりしているのだ。ただ、その忍野さんは今、さらし首のように地面から頭だけを覗かせていた。つまり、首から下が地面に埋まっているのである。首だけのおっさん。不気味だ。

「いやー、ハートアンダーブレードにやられてね」

キスショットに何かしていたら、殺す。恩人でも。

「昨日恋愛相談に乗っただけなのに、初々しいね」

「何をした？」

「最近の男の子はメイド服を着た女の子が好きなんだよって言ったんだ」

メイド服のキスショットはなんかイメージが崩壊するから、嫌だ。

「そしたら、なんで僕が従者の服を着なければならんと怒った」

「で、埋められた？」

「うん、鳥葬らしい」

ちなみに、鳥葬とは鳥に屍の処理を任せる方法である。この辺りにはカラスが多いから、有効だろう。

「生ゴミを近くに置くといいわよ」

さらりと戦場ヶ原さんがアドバイスした。怖い。初対面のおっさんを殺す気だ。

「怖いお嬢ちゃんだねえ」

その恰好でにこやかに笑う忍野さんは大物だと思う。気持悪いけど。

「取り込み中みたいだから、キスショットに聞きに行く」

さつさと兄貴は歩きだした。戦場ヶ原さんもそれに続いた。

「あははは、掘り出してくれない？」

「許可なく掘り出したら、僕が殺されそうだ」

「おいおい、仮にも君の弟の恋人だぜ。将来の義理の兄は殺さないと思うよ」

キスショットにこの人が何を吹きこんだのか確認する必要がある。切実に。今すぐに。

「中学生の妹が二人と聞いていたけど？」

なぜか戦場ヶ原さんはうちの家族構成を知っていた。事前調査でもされたのだろうか。

「さっき会ったぞ。カッターとホチッキス喰った奴」

食べてない。砕いただけだ。悪食のように思われるから、嫌だ。

「どういうこと？」

不審そうに戦場ヶ原さんに聞かれた。

「生まれつきこんな体なんだよ。僕も弟も」

それ以上は、兄貴は何も言わなかった。あまり軽々しく口にする
ことではない。戦場ヶ原さんからどんな毒舌が飛んで来るのかと思
ったが、彼女はただ、無表情にでも、真っ直ぐ兄貴を見ていた。

「あの中にいる」

「もしも、阿良々木くんが、あの廃墟で下劣な本性を剥き出しにし
て私を強姦したら、私はどんな手段を行使してでも、あなたにボー
イズラブな仕返しをしてみせるわ」

「後」

すぐに調子を取り戻した戦場ヶ原さんの毒舌を無視して、兄貴は
廃墟の入口を指差した。それにつられて戦場ヶ原さんは振り向いた。
兄貴の声よりも、超越者の気配を感じたのかもしれない。外の声が
聞こえたのか、日影にキスショットが立っていた。うん、絵になる。
水色のドレスも、一房にまとめた髪も。うん、俺の恋人最高。なん
か、後方でカラスが！とか叫んでる人がいるけど、キスショットの
美を前にしたら些細な出来事だ。

「奏ではなく、うぬか。その小娘はなんじゃ？」

これが戦場ヶ原ひたぎとキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードのファーストコンタクトだった。

じよみミラー001（後書き）

傷物語（双）を先にお読みください。

寝起きだったらしく、キスショットは眠ただった。ショボショボとした目元がとても愛らしい。もし、今、俺が「表」に出ていたなら、そのまま抱きついていただろう。だが、非常に残念なことに、「表」に出ているのは兄貴だった。悔しいので、この珍しい光景を永遠に記憶に留めるべく、恋人の姿を鑑賞することに集中することにした。

「入っていいか？」

「好きにするがいい」

兄貴には慣れたらしく、キスショットは勝手にしろと言わんばかりに先に奥に入って行った。まだ、日差しが強いのでキスショットは廃墟の影から出ることができないのだ。永遠と不死身の対価に支払ったのは太陽の光を浴びる権利だった。数日前、聞いた話だが、キスショットは元々人間だったらしい。あの水色のドレスはその時の名残だと言っていた。もう本人はほとんど覚えていないらしいが、ふと偶然に思い出したらしい。その時思ったのだ。キスショットは寂しがり屋なのだと、それを他人に決して見せないだけで。

「来ないのか？」

その場を動かない戦場ヶ原さんに兄貴が呼びかけた。少し、逡巡した後、戦場ヶ原さんは黙ってついてきた。埋まったままの忍野さ

んは運がよければ、後から来る予定の羽川さんが掘り出してくれるだろう。その前にカラスに喰われなければの話だが、あの人なら大丈夫だろう。すぐ後ろに、いつの間にか、カラスで構成された黒い山ができていて、つい先ほどまで聞こえていた悲鳴が止んだが、それはたぶん気のせいだ。

「で、儂に何か用か、阿良々木暦」

元学習塾の廃墟の二階。現、キスショットの住居に辿り着くと尋ねた。

「あ、僕の名前知ってたんだ」

俺も驚いた。キスショットが兄貴の名前を呼ぶのを初めて聞いた。なんかちよつと感動。

「うぬにも貸しがあるからのう。話が終わるまでくらいは奏との逢瀬を我慢してやろう」

物凄く嫌そうにキスショットは言った。実際に、キスショットを助けようと最初に言い出したのは俺ではなく、兄貴なのだ。その点はキスショットも知っている。恩を仇で返すような性格ではない。それに、キスショットは兄貴を一種の人外として認識している。「合わせ鏡」でも狂わなかった怪物並の精神力、それはキスショットから見ても異常だということを俺は本人の口から聞いた。もし、兄貴が吸血鬼化していたら、きっと、恐ろしい怪物が生まれていただろう。今の俺とキスショットの二人でも太刀打ちできないような最悪の悪夢が。

「ちよつと待ってる。呪と絆」

この感覚は慣れない。深い海底から水面まで強制的に引き上げられる感覚と奇妙な喪失感。魔法の言葉は「呪と絆」これが俺達兄弟の関係であり、分離するためのキーワード。この前の事件で発覚したばかりだ。つい前日、家族全員で初めて夕食を食べた。俺は少しだけ泣いてしまい、妹達に爆笑された。まだ、分離できる時間は少ないが、いつか家族で旅行にでも行ければいいと思う。

「おはよう、キスショット」

「うむ」

分離が終わるとすぐにキスショットの元へと向かい抱きしめた。呆れ顔の兄貴と、どこか呆然とした戦場ヶ原さんには申し訳ないが、こればかりは譲れない。大事な恋人との決まりごとなのだ。俺がしばらく抱きしめているとキスショットが首に唇を寄せてきた。味見をするようにペロリと俺の首筋を舐めた。背筋がゾクゾクする。その後、カプリという音と、鋭い痛み、そして、自分の血液が失われる感触が体を支配する。割と気持ちがいい。たぶん、相手がキスショットだからだろう。血を吸われる間、俺はキスショットの髪を撫でる。これが楽しみの一つだ。

「ふむ、うまかった」

満足したらしく、キスショットは唇を満遍なく舐めると、貧血状態の俺を猫でも抱える様に軽々と脇に抱きかかえた。

「あー、クラクラする」

回復にはかなり時間がかかりそうだ。愛されているのは嬉しいの

だが、もう少し加減して欲しい。干乾びてもおかしくなかった。

「ほれ」

膝枕された。今、死んでも悔いなし。

「おい、そのバカップル。もういいか？」

兄貴がピンク色の空間を破壊した。すまん。完全に忘れていた。

「えーと、阿良々木くん。アレは何かしら？」

「弟と弟の彼女」

即座に兄貴が返答した。教科書通りの見事な切り返しだった。

「誰ではなく、何よ。あなたにその程度概念すら理解できるとは到底思えないけど、努力ぐらいはしなさい」

本当に思っただが、どれだけ自尊心が高いのだろうか。なんというか、絶対王政時代の人のようだ。

「儂の食料ではないのか？」

少し残念そうにキスショットは言った。おいおい恋人よ。まさか兄貴が誰かを生贄にするとでも思ったのか。この人は基本的に誰でも助けるぞ。そういう性格だと言おうと思ったのだが、キスショットの次のセリフで場が凍った。

「神の類の血は嫌いではないのじゃが」

さすがは本物の吸血鬼。俺のような中途半端な存在とは違う。肉眼で怪異を視認できるらしい。

「見えてるのか？」

兄貴が聞いた。

「見えておるぞ、儂とて簡単には触れぬが」

「神？」

今度は戦場ヶ原さんが尋ねた。キスショットの目がスーと細くなり、戦場ヶ原さんを下から上まで観察した。医者が患者を診るような目付きでは無く、ただのつまらない道楽でも眺めているような、でも、隙の無い眼差し。

「この類の「神」は邪な願望を持つ人間に憑く。何を願ったか知らんが、よほど好かれているようじゃ。わざわざ、「蟹」の形を取るなど珍しい」

どうやら、キリスト教や仏教などの神様とは違う概念の存在らしい。どちらかと言えば、「合わせ鏡」や「吸血鬼」に近いのかもしれない。

「キスショット。何か知ってるのか？」

恋人の膝枕を堪能しながら俺から質問することにした。その方が円滑に物事が進むからだ。

「昔、「神」にならんかと誘われたことがあったのう。むろん断つたが」

俺の髪に手を伸ばすとキスショットは弄り始めた。くすぐりたい。

「永劫に対価と引き換えに願いを叶えるなんて、くだらん」

つまり、戦場ヶ原さんの対価は体重だったということになる。だが、彼女の願いは分からない。少なくとも俺には。

「聞き忘れてたけど、戦場ヶ原はどうしたいんだ？ リクエスト通り、僕の秘密は見せたぞ」

失念していが、戦場ヶ原さんの目的、もとい願いを聞いていなかった。彼女が同類かもしれないと思ったから、ここまで立ち入ることを許したのだが、どうやら想像と違ったらしい。

「元の体に戻りたい。それだけよ」

淡々と戦場ヶ原さんは言った。

「キスショットさんでいいのかしら？ 失礼ですが、あなたは何ですか？」

ただの毒舌というわけではなく、礼儀も兼ね備えているらしい。

「鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼と本来なら名乗るがのう」

クククと壮絶な笑みをキスショットは浮かべた。俺でも背筋が寒くなるような微笑み。それでいて、心を奪われる氷の美。それが俺

の恋人の特徴の一つ。

「この男の恋人。今はそれで十分じゃ」

嬉しかったので、体が超回復した。そのままキスショットに抱きついたら、言った本人も恥ずかしかったらしく、貫き手で腹を貫かれた。痛い。でも、愛があれば許せる。あ、内臓飛び出た。

「バカップル」

「獣ね」

「アイツは四肢の無い吸血鬼に一目惚れした鬼畜で、シスコンで、ネクロフィリアなんだ」

「そう、兄弟揃って変態なのね」

なんだがとんでもない誤解が生じてしまったようだ。そもそも本当の変態は兄貴であり、生きているからネクロフィリアではない。ただ、シスコンは否定できない。それに、この状況で動揺しない戦場ヶ原さんの神経も十分異常だと思う。先ほどから、俺の臓器が飛び出ているのだが。

「中学時代のニックネームが「百人斬りの童貞野郎」の兄貴に言われたくない」

「百人斬りの童貞野郎」とか「鈍感のタラシ」とか「天然の女殺し」とか色々あったな。

「あなたは生涯童貞ね」

「今の文脈からどうしてそうなる！？」

兄貴が叫んだ。ナイスだ、戦場ヶ原さんと思わず呟いてしまった。

「ネクロフィリアは黙ってなさい」

「吸血鬼差別だ！」

差別反対。人種差別は良くないと思う。吸血鬼が人種かは別として。

「黙れ」

キスショットの圧力が籠った声で全員黙った。室内の重力が数倍になったかのように体が重くなった。これがキスショットの殺気が肌を刺すようだ。

「阿良々木暦。僕はうぬのことをそれなりに評価しておる。うぬの精神力は化物の僕から見ても異常の領域に入っている。貸しもある。それに対しては素直に敬意を払おう。じゃが、無駄な戯れまでは許さん」

「悪かった」

吸血鬼としての力を取り戻したキスショットに勝てる可能性がある人物がいるとすれば、忍野さんぐらいだろう。戦場ヶ原さんの毒舌ですら止めてしまうこの妖気には圧巻という表現が相応しかった。

「その小娘に憑いている「蟹」を倒すことぐらい容易じゃ。じゃ

が、それでうぬと儂の間にはもう、何の貸し借りも存在しない。その覚悟があるか？ 阿良々木暦

どこまでも冷たくキスショットの声は響いた。

「儂が奏の自由のためにうぬを殺すとしたら、その時にうぬを救う取引材料はもう無い」

ズボツという音がしてキスショットの脇腹から日本刀が引き抜かれた。妖刀「心渡り」キスショットの昔の恋人の忘れ形見。その切っ先を兄貴に向けた。蜃気楼のように殺気が刀身を上り、周囲の空気を歪めた。

「その対価を払えるか？ 阿良々木暦」

「全然普通に」

物凄くあっさりと兄貴は答えた。明日の天気の話題でもしているかのように。これには戦場ヶ原さんも驚いたようだ。相変わらず無表情のままだが、わずかに瞳が揺れている。

「それで戦場ヶ原の問題が解決するなら」

「ほう、うぬの女だったか？」

「いや、今日たぶん初めて話した」

それは本当だ。名前は知っていても会話は無かった。

「けどな、「怪異」の苦しみはよくわかっている。僕も奏も」

「同病憐れむか？」

同情なら戦場ヶ原さんは受け入れないだろう。むしろ、反発し、攻撃してくるだろう。

「違う。大事な約束を守るためと自己満足」

その台詞でどうして兄貴がここまで戦場ヶ原さんに対し、優しくったのか分かった。昔の俺達と似ているのだ。自分たちがどういう状況に陥ったのかわからない絶望に堕ちたあの頃の俺達に。そして救ってくれた両親の温かみは嬉しかったから。また、見たいと自分もそうなりたいたいとの日、俺が阿良々木奏という名を兄貴から貰ったその日に約束したのだ。

「まあ、いざとなったら、奏の貞操を売ればいいし」

今までのシリアスが大無しだ。なんてこと言いやる。てか、売るつもりだったのか。俺の貞操。腹黒い。なんて野郎だ。

「む、その手があったか！？」

キスショットまでなんてことを。欲しければいつでも貰ってくれ。俺の貞操はお前の物だ。いつでも好きにしてくれよ。大歓迎だ。

「勝手に人の貞操を売るな！」

ここで怒鳴った俺は正常だ。絶対にこの中で俺が一番まともだ。

「で、いくらで買っ？」

完全に無視された。勝手に取引が進行している。なんだこの異常事態は。

「外に埋まっている小僧と引き換えじゃ」

「いらん」

俺の貞操は忍野さんと同じぐらいの価値なのか。泣くぞ。投身自殺するぞ。キスショットにとって俺の貞操の価値はその程度なのか。それより、兄貴。あんたスゲー酷いこと言ってるぞ。しかも、即答。忍野さんが可哀想だ。

「誰か来たわ」

戦場ヶ原さんが会話に割り込んだ。誰かが階段を上って来る音がある。忍野さんだろうか。関係者以外と招かれた者以外は結界で入ることができないはずなのだが。

「阿良々木くん！ 忍野さんがなんか外で気絶してた！」

羽川さんだった。手が土で汚れていることから頑張っ掘り出してくれたらしい。その後ろにはしきりに首をかしげている忍野さんがいた。髪が一部、奇妙に捻じれている。カラスの嘴で突かれたのだろう。

「うーん、なーんか、記憶が飛んでるなあ」

都合がいいことに忍野さんの記憶は一部欠落しているらしかった。精神の防衛反応だろうか。これで見捨てたことを忘れてくれていれ

ば最高だ。恨まれたくはない。ご都合主義万歳だ。

「戦場ヶ原さん？　なんでここに？」

戦場ヶ原さんは無言だ。今となつてはもう遅いといしか言いようがないが、羽川さんはまだこの人の本性を知らないのだ。無口で病弱な優等生という認識を持っているはずだ。その認識を崩すべきか迷っているのだろう。

「阿良々木くんがなにか、いやらしいことをしたの！？」

「どうして、そうなる！？」

兄貴がショックを受けている。傷付いた表情をしても無駄だ。あなたが羽川さんに強要したセクハラの数々を忘れたわけでもあるまい。

「うん」

「つて、戦場ヶ原！」

うわ、便乗したよ。戦場ヶ原さん怖い。絶対に敵に回したくないタイプだ。粘着質というか、容赦が無い。

「大丈夫。一緒に警察に行つてあげるから」

羽川さんは本気で信じてしまった。忍野さんもどう思ったのか、値踏みするような眼差しを兄貴に送っている。どうやら、兄貴＝変態という図式は共通認識らしい。

その後、俺とキスショットの証言で羽川さんの誤解を解くのに約三十分掛かった。

こよみミラー 002(後書き)

感想をお待ちしております。 お願いします。 まだ一つもないので、
執筆意欲が低下中なので、ご協力ください。

どうやら、俺の恋人は万能らしい。

羽川さんが持ってきた家具のカatalogをしばらく眺めた後、何も無い空間からキングサイズのベッドを引っ張り出してきた。

「ふむ、これなら奏を少々縛っても壊れん」

俺はベッドに縛られること確定か。そんなことを思っていると、次々と家具を生み出していくキスショット。吸血鬼の能力の一つ。物質創造能力。妖刀「心渡り」を造り出したもはや反則としか思えないような能力。さすがに羽川さんと戦場ヶ原さんもこれには驚いていた。いや、もうなんでもありだ。なんか吸血鬼というより、魔法使いに近い様な気がする。

「縛るなら、柱とか太くした方がいいぞ」

「そうじゃのう」

兄貴。あんた人の恋人に何を教えている。キスショットはピュアなんだ。兄貴の色に染めるな。縛るのだってきつと照れ隠しだ。なんて、アホな会話が行われたのは一時間ほど前で、今はまた兄貴の中に戻って視界を共有している。現在、兄貴が何をしているかという、戦場ヶ原さんと近くの公園で桜の花びらを集めている。複数のゴミ袋に大量に。キスショットに命令されたのだ。春休みの最

中であるため、桃色の桜の花びらが公園に散っている。まるで、雪のようで、兄貴は、その視界を共有している俺はただその光景に見惚れていた。

「この生産性の無い行為になんの意味があるのかしら？」

少々苛立ったように戦場ヶ原さんは言った。それでも、花びらを集める手を休めない。案外、根はまじめなのかもしれない。ちなみに、羽川さんはいない。先ほど、キスショットからの命令でテレビのカタログを取りに帰ってくれている。忍野さんは何やらキスショットと準備をしていた。

「さあ、キスショットを信じるしかないだろう」

それを戦場ヶ原さんは鼻で笑った。さもなくだらないというように。

「私を助けると言った人間は過去に何人かいた、そのうち五人は詐欺師だったわ」

詐欺師に騙されても、彼女は救われたかったのだろうか。

「20人」

淡々と兄貴は言った。

「12人が医者、3人が自称霊能者、4人が心理学者、一人は幼馴染」

どうでもいいことのように。

「僕を助けるといい。最後に病気が、狂人と罵った。生まれてから、この間まで」

兄貴は、阿良々木暦は、ただ事実を告げた。

「戦場ヶ原の昔のことなんて知らないけど、全員、お前と同じ境遇でも人外でもなかっただろ？」

さて、どんな毒舌か飛んでくることがやらと兄貴は身構えたが、戦場ヶ原さんは聞かれてもいないことを話し始めた。

「母が悪徳宗教に嵌ってしまってたね。昔はそれなりに経済的に恵まれた家だったのに、母が全財産を貢いで、多額の借金まで背負った。去年の離婚協定の結果、父と狭い部屋で二人暮らしよ」

無表情。でも、俺と兄貴には分かる。この絶望が。同じ経験をした立場として分かるのだ。誰かに聞いて欲しいという気持ちだが、無意識のうちに湧き出ることを。誰かを頼ればいいなんて、酷い言葉だ。

自分自身がそんな存在だなんて。おかしいのが自分だなんて。そんなこと、言えるわけがないのに。そういうことを軽々口に出す連中は理解不能だ。だから、兄貴は何も言わない。ただ、立っているだけだ。

「阿良々木くんのような下等生物に何を言っているのかしら、理解なんてできるはずが無いのに」

「だろうな」

他人の気持ちなんて想像しかできない。

「そもそも、誰がいつ、呼び捨てで私を呼ぶ権限を与えたのかしら？」

「別に呼ぶなとは言われていないぞ」

確かに。

「戦場ヶ原様と呼びなさい」

「嫌だ」

兄貴の顔面目掛けて鉛筆がダーツの如く飛んできた。

「奏シールド！」

このクソ兄貴。俺を無理やり「表」に出して盾にしゃがった。反射的に伏せなかったら、ヤバかった。鉛筆は木の杭だから、心臓に命中したら、致命傷だ。吸血鬼の弱点の一つ。そう考えると文房具怖い。俺の天敵みたいな女だ。

「殺す気か！？ この暴言作成機！」

あんたが俺を。人を盾にしておいて何を言うか。ほら、戦場ヶ原さんが舌打ちしているぞ。危険人物指定したい。テロリストにでもなるのではないだろうか。

「失礼ね。私の暴言は銅四十グラム、亜鉛二十五グラム、ニッケル十五グラム、照れ隠し五グラムに悪意九十七キロで錬成されているわ。ちゃんと照れ隠しがあるわよ」

「ほとんど悪意じゃねえかよ！」

言葉に金属を含むことができるなんて初めて知った。悪意はキ口単位で測定できるのか。初耳だ。

「ちなみに照れ隠しというのは嘘よ」

「それぐらい分かるわ！」

照れる戦場ヶ原さんとかありえないだろ。そんな感情があるのか疑問だ。

「失礼ね。私のようなキャラのことはツンデレって言うのでしょう？」

「謝れ！全国のツンデレの皆様には謝れ！」

デレが無い。それは断じてツンデレではない。ただのツンツンだ。キスショットを見る。あの見事なツンデレを。時にはデレデレで、時には平気で人の腸をぶちまける。この前、その髪型綺麗だって言ったら、喉を潰された。頬摺りした時に気まぐれで眼球を抉られた。ブレイとか言って両手足を斬られた。でも、最後に上目づかいで謝られたら全て許さざるを得ない。見よ。これこそ本当のツンデレだ。兄貴に言ったら、ただ遊ばれているだけだと言われたが……

「私がツンデレではないと言っても言うの！？」

「お前は自覚が無いのか！？」

おいおい、本当に自覚が無かったのか。ある意味驚愕だ。それ以降も罵り合いは続いたのであるが、羽川さんがやって来たので、戦場ヶ原さんは無口モードに戻った。ただし、兄貴の背中には余計な事を話したら、殺すという意味表示らしく、カッターの刃を押し付けている。

「うわぁ、綺麗」

そう思わず羽川さんが呟いていたが、俺はあまりのショックで何も言えなかった。ゴルゴン三姉妹に睨まれ、全身が石になってしまったかのように、俺の体は一ミリも動かなかった。分離した兄貴が隣にいるが、同じように石になっている。戦場ヶ原さんは無表情だが、動かない。忍野さんだけが、ヘラヘラとしていた。

「惚れ直したか？」

唇を吊り上げ、犬歯を剥きだしにし、俺の最愛の人は男前に笑った。清々しい笑顔。纏っている着物によく似合っていた。そう、キスシヨットが着物を着ているのだ。無地の真っ白な着物。髪は簡単にポニーテールにまとめ、金細工の髪飾りを付けている。口には紅を。香水をつけたのか甘い匂いがした。この名画にタイトルを付けるとしたら、「白と金の夜明け」。

「俺の恋人は世界最高だ」

自分の誤謬の無さを呪いたい。これしか言えない自分の馬鹿さを。全てを。世界は彼女と比べれば、あまりにも醜すぎる。

「我が従者に命ずる」

俺は膝をついて、頭を垂れた。体が自然にそう動いていた。

「儂の舞いを飾れ」

簡潔で、情報に欠ける命令。普通なら、意味がわからない。だが、俺にとつては十分すぎる内容だった。自分の脇腹に手をつ突っ込んで掻きまわし、目的のモノを手にし、引いた。ズルズルと俺の体内から現れたのは、鎖鎌。

「三日月」

これが俺の新しい武器の名前だった。昨日キスショットが俺に渡してくれたのだ。もし、また戦うことがあったら、キスショットを守るように。壊れた愛用の鎖の代わりの武器。主から授けられた武器。

鎖鎌「三日月」。鎖の長さは8メートル。片方には漆黒の鎌が、もう片方には錘が付いている。

「我が主のお望みのままに」

鎖鎌を振るった。風を切り裂き、摩擦で空気が焦げ、兄貴達が集めた桜の花びらが詰まったごみ袋が裂けた。パツと花びらが空中に散った。ヒラヒラと俺の振う鎖鎌が生み出す風が、桜の花びらをキスショットの方へと飛ばした。桃色の吹雪に囲まれ、キスショットは舞った。右手に妖刀「心渡り」を握っている。剣舞い。

キスショットが桜吹雪の中で舞っていた。

日本刀を片手に。

逸らされた背筋はギリシャの石像のようで。

着物の間から覗く白い肌は扇情的で。

流れる金髪は流星のようで。

細められた瞳は妖艶に輝いていて。

足音は軽快なリズムを奏で。

白いはずの着物はいつの間にか、桜で彩られ。

犬歯が光を反射して光り。

薄らと浮かんだ玉のような汗はダイヤのごとく。

「炎」

キスショットのその一言で桜の花びらが燃え始めた。

一瞬で炎に包まれ。

一瞬で灰になった。

まるで、蛍のように。

桜の花びらと火の粉の海の中でキスショットは舞った。

そして、「心渡り」の剣先が戦場ヶ原さんに向けられた。鋭利な切っ先。それに釣られるように。戦場ヶ原さんはキスショットに向かって歩み始めた。まるで壊れかけのマリオネットのように。電灯に魅かれる蛾のように。キスショットから数メートルの地点で戦場ヶ原さんは立ち止まった。キスショットはまだ舞っている。切っ先を戦場ヶ原さんに向けたまま。

「見事な神降ろしだね。まさか、ハートアンダーブレードにこんな技があるなんてね」

忍野さんの独り言でようやく俺は理解した。今のキスショットは巫女なのだ。神を呼び出す巫女。

「お母さんが悪徳宗教に嵌ってしまった」

戦場ヶ原さんの口から声が漏れていた。ただ、それは本人の意思に反して音を発しているようだった。

「それで、お母さんは私を……」

ガクガクと戦場ヶ原さんの膝が震えだした。駆け寄ろうとした兄貴と羽川さんを俺が止めた。鎌の刃で威嚇した邪魔するなど。

「幹部の人が浄化と言って私を……」

カタカタとあの戦場ヶ原さんが震えている。

「私を犯そうとした。それをお母さんは黙って見ていた。助けてくれなかった」

それが戦場ヶ原ひたぎの悪夢。現在進行形の悪夢。

「私は手元にあったスパイクで殴って、逃げて、ソレをお母さんは詰った」

その結果、彼女の家庭は崩壊した。

「私が我慢していたら、抵抗していなかったら……」

「愚か者め」

キスショットの空いている方の腕が戦場ヶ原さんの首を掴み、宙づりにした。呼吸困難に陥ってもがいている。

「やめろ！」

兄貴が走り出した。だが、俺が投げた鎖が足に絡み、動きを束縛した。

「愛しくも無い男に抱かれた方がマシだったとでも？」

戦場ヶ原さんをキスショットは殺す気だ。本気でキスショットは怒っていた。キスショットが刀を振り抜いた。回避不可能な速度の斬撃が戦場ヶ原さんを襲った。

「あ、ああ!？」

痛みよりも驚きが増したらしい。俺も肌で感じられた。見えないがナニかいた。そこに確かにナニかがいた。

「戦場ヶ原さん！？」

戦場ヶ原さんがナニかに弾き飛ばされるのを見て、羽川さんが叫んだ。だが、心配はいらない。戦場ヶ原さんが地面に叩きつけられるよりも俺の「三日月」の方が早い。ジャラリと音を立てて、鎖は戦場ヶ原さんに取り付いたナニかに絡みついた。戦場ヶ原さんは兄貴がダイビングキャッチで地面に落ちる前に受け止められた。美味しいと取りだ。

「その体で俺の音楽を奏でろ」

決め台詞と共にそのナニかを縛りあげた。かなり凶暴に暴れていくらしく、鎖が軋んだ。思い。なんて重さだ。吸血鬼の怪力でも辛い。

「このまま潰す」

頑張れば、このままミンチにできそうだった。

「はい。ストップ」

忍野さんに止められた。

「コレは「重し蟹」。正確には「思いし蟹」。もう分かってるだろうけど、君の思いだ。どんな重かろうと、それはきみが背負わなくてはならないものだ。他人任せにしちゃあ、いけないね。これだけ助けてもらってるんだから」

さも当然と言うように忍野さんは言った。

「はい」

戦場ヶ原さんは兄貴の腕から立ち上がった。そして、土下座した。

「すいませんでした。そして、ありがとうございました」

深々と頭を下げた相手は誰だったのか。

「もう大丈夫です。だから、どうか、お願いします。お母さんを私に返してください」

抑えていた重みが突然消えて、俺はバランスを崩し、キスショットの胸に倒れ込んだ。ふかふかで温かった。ポンと首を掴まれた。ちよっぴり怒ったキスショットが俺を覗きこんでいた。あ、ヤバい。

「お主なら、許す」

キスショットはさっき戦場ヶ原さんに対し、怒った。愛しくも無い男に抱かれた方がマシだったかもしれないなど、キスショットが許すはずが無かった。だから、珍しく本気で怒った。恋する乙女であるが故に。

「あのさ」

「ん？」

わんわんと慟哭している戦場ヶ原さんに羽川さんがハンカチを差

し出し、兄貴は黙ってそれを見ていた。忍野さんはたばこを啜っていた。なるほど、ツンデレだ。

「キスショット以上の女はいない。絶対に」

確信している。これは絶対の事実だと。

「ふん。辺り前じゃ」

ガブリと首筋を噛まれた。赤くなった頬を隠したかったのだと、俺は知っている。

「ありがとう、阿良々木くん。私は、あなたにとっても感謝しているわ。今までのこと、全部謝ります。図々しいかもしれないけれど、これからも仲良くしてくれたら、私、とても嬉しいわ」

なんかこんなセリフが聞こえた。

血を吸われ、薄れる意識の中で最後に思ったこと。それは……

本当に、あの時、キスショットに噛まれたのが俺でよかった。

そう、心の底から思った。

トラウマ。

かつて、俺にとってこの言葉「中学時代の「第一次阿良々木暦争奪戦争」だった。もはや、これはただのママゴトにしか見えない。なぜなら、ソレを遥かに上回る「第二次阿良々木暦争奪戦争」が生じたからだ。その後も、何度か「阿良々木暦争奪戦争」はあったが、一番怖かったのは第二次だ。

アレから、何年過ぎててもたまに思い出す、夢に見る。俺の恋人であるキスショットですら、本気で怯えたことから、それがどれほどの恐怖体験だったか想像できるだろう。

さて、「戦争」の内容の前に、話は大分変わるが、俺が初めて「表」に出た時の話を簡単にしよう。それがこれからのできごとに密接に関係しているからだ。

簡潔に言うと、兄貴が中学生になったばかりの頃、上の方の妹が集団リンチに遭った。人質を取られ、暴走族に襲われたのだ。

兄貴が助けに行き、警察を呼んだが、警察の到着の前に妹が殺さ

れてしまう可能性があった。

「俺なら助けられる。俺を解放してくれ」

「ホントだな？嘘だったら、自殺して道連れにしてやる」

この会話を俺は忘れることはないだろう。初めて、俺と兄貴が完全に協力できたことだったからだ。俺は約束通り、助けた。付近の工事現場に堕ちていた鎖で暴走族20人相手に警察が到着するまで戦った。妹は怪我をしていたが、一度も弱音を吐かず、泣きもしなかった。ただ、俺が兄貴とは違うということは看過したらしい。

「なあ、お前。そういえば、名前なんて言うんだ？」

「無い。俺には何もない」

あの頃の腐っていた俺。兄貴の影、精々たまに話して、テストでズルして、雑談を交わす程度の仲だった。後は異物的な感覚だったのだろう。双方にとって。

「カナデ」

「はい？」

「阿良々木奏で、よくね？」

なんか、あの鎖の音が歌みたいに聞こえてさ、と兄貴は呟いた。なんとなく凄く嬉しかった。そして、それが俺が阿良々木奏になった瞬間だった。

その後は割と順調だった。俺が国語関連の科目を、兄貴が数学関連の科目を担当し、俺が実戦を、兄貴が参謀を担当することになった。家族とは時間をかけて和解した。兄貴の貢献が大きかったことは言うまでも無い。そんな中の中学時代も波瀾万丈だった。

暴漢に襲われていた女の子を兄貴が助けた（戦ったのは俺）ら、その子がストーキングを始めた。幸い、しばらくしたら、治まった。

セクハラをしていた教師の行動を兄貴が写真に収め、警察に通報したら、兄貴からネガを奪おうと家に直接やってきた（当然、俺が撃退した）。その結果、被害者の複数の女子に兄貴は感謝された。

屋上から飛び降り自殺をしようとしていた女の子をその場にいた兄貴が説得した。ただ、最後に足を滑らせ、落ちたが、無事だった。（落下中に俺がバンジーで救出した）

何度か飼育していたウサギを絞殺していた異常者の犯行現場を兄貴が偶然目撃し、捕獲した（俺が）。その後は飼育委員の女子からしばらく弁当が届いた。

とまあ、上記はほんの一例に過ぎないが、兄貴がトラブルコーラーで、俺がトラブルシューターだったことは自然と理解できると思う。もちろん全部女性が関わっている。

こんなできごとが何度もあれば、モテる。

で、修羅場突入。引き分け、勝者なしという結果に至った。ただ、恐るべき朴念仁である兄貴はこの修羅場の存在をほとんど意識していなかった。だから、「100人斬りの童貞野郎」という身内としては非常に不名誉な呼び名が付いた。そして、この一連のできごとは「第一次阿良々木暦争奪戦争」と呼ばれた。

女性不審になった男子生徒が数名。胃潰瘍が数名。過敏性の病気が数名。修羅場の空気で禿げた教師が数名等々、俺にとっても恐怖体験だった。ひよっとしたら、俺が人間ではなく、吸血鬼を愛するようになったのも、この事件が原因ではないだろうかと後になって思っただった。

ただし、兄貴と誰も結ばれなかった本当の理由は誰も兄貴の精神的な強さについて行けなかったことが大きいのだと俺は思っている。忍野さんですら、化け物級と認めた兄貴の精神力は継続的に愛することは難しいのだろ。俺ですら、たまに兄貴が未恐ろしいと思う。

友達で、それ以上は進まない。

それが中学時代の兄貴と異性の関係だった。だが、それは高校三年生となってから、大きな転機を迎えることとなる。それが「第二次阿良々木暦争奪戦」。俺に恋人ができ、戦場ヶ原さんが「蟹」から解放された春休みが無事に終わり、高校三年生となり、羽川さん、戦場ヶ原さんと兄貴は同じクラスになった。したがって、必然的に俺はその場にいることになった。

ただ、戦場ヶ原さんは病院での検査のため、しばらく学校を休んでいた。その間に、兄貴は羽川さんの推薦により、クラスの副委員長に任命された。周囲の反感を一掃した羽川さんの手腕はまさに圧巻の一言に尽きる。もちろん、委員長は羽川さん。まあ、当然のことだが、二人は一緒にいる時間が多くなった。

新学期が始まってから、数日後、戦場ヶ原さんが復帰した。身体に異常はなかったらしい。

そして、その日から戦争は始まっていたのだと、今なら嫌というほど理解できる。

雑談だが、鮫は知能が高く、一度嗅いだ血の匂いを忘れないと言われている。また、鮫はその迅速性と残忍性から海のハンターと呼ばれる。

前書きが長くなってしまつて大変申し訳ない。

要するに、これは俺の兄である阿良々木暦が、戦場ヶ原ひたぎという一匹の鮫に捕食されるまでの過程だ。

ただ、それだけのくだらない物語だ。

波瀾万丈の春休みが終わった数日後、戦場ヶ原さんが学校に復帰した日の放課後、母校の生徒会室では、何とも、奇妙な光景が展開されていた。室内には二人の学生、兄貴と羽川さん。ここで生徒会の仕事があるので、別に不思議ではない。

「あーん」

先程から、兄貴が赤みを帯びたクッキーを嫌がる羽川さんの口元に差し出し、「あーん」を繰り返していた。

「いや」

「あーん」

「いや」

「瞬間ダイエット」

「い、いや」

「あーん」

眉をひそめながらも羽川さんは完全には逃れられない。なぜなら、彼女にとって、非常に魅力的な提案でもあるからだ。兄貴が手にし

ているこのクッキーには体調をベストコンディションに回復させる効果がある。副作用は無い。隠し味は俺の血液、つまり、吸血鬼の血液である。

そもそも、なぜ、こんな物を作ったのかと言うとキスショット用のおやつである。普通のお菓子でも食べれるのだが、折角だから実験してみようと試しに、俺の血をクッキーに混ぜてみた。実に好評だった。嬉しそうにバリバリと食べていた。気にいったようなので、大量生産し、ブラッドクッキーと名付けてみた。そのまんまだ。

我が家は両親が共働きのため、子供達は自炊できる。昔から、妹の弁当とかは兄貴と俺が作ってきたため、双方の料理の腕はそれなりのものだ。

さて、なぜ、このブラッドクッキーを兄貴が羽川さんにしきりに勧めているのかというと、数分前の会話が原因である。

「なあ、羽川？」

「何？」

「なんで僕なんか選んだんだ？」

「だって、阿良々木くんを更生させるのが、私の仕事だもん」

それと生徒会の仕事にどういう関連性があるか俺には理解できないが、兄貴の変態的な性癖が更生されるなら、それはいいことだろう。

「まあ、いろいろ悪かったよ」

羽川さんの下着の件とか、色々あったな。

「友達だから、許してあげる」

さも当然というように羽川さんは言った。だから、兄貴は素直に頭を下げた。

「酷いこととしてごめんなさい。僕の友達になってください」

深々と頭を下げ、謝罪した。純粹な優しさと好意が嬉しかったのだろう。

「こちらこそ、よろしくね」

微笑ましい光景だったが、長く続くはずが無い。何しろ、相手は兄貴だ、あの究極の変態阿良々木暦だ。シリアスは一瞬がモットー。

「友達に成れたついでに、僕の特技を教えておこつ」

「え、何かあるの？」

興味津々という調子の羽川さんだが、俺はこの時点で物凄く嫌な予感がしていた。

「0・5cm」

淡々と兄貴は羽川さんの腹部を指差し言った。何のことか分からない羽川さんはキョトンとしている。俺はわかってしまった。できれば、知りたくなかったがわかってしまった。兄貴の特殊能力が発

動したのだ。

「羽川の腰回りが春休みと比較して、0・5cm増える」

阿良々木暦は腰の形で女性を識別できるのだ。それもミリ単位で。

「嘘！？　なんでわかるの！？」

羽川さんは軽くパニック状態だった。自分の腰回りをミリ単位で把握している羽川さんも凄いが、これを見破った兄貴はもはや怪物だ。

「健全な男子は腰の形で女性を識別できるんだぞ。僕の場合ミリ単位で」

堂々と言い放った大馬鹿野郎。　いません。　そんな人類あんただけだ。　吸血鬼よりも人外な我が兄。

「いないよ！　そんな人いないから！」

羽川さんが絶叫。　うん、普通の反応だ。

「ここにいる」

だから、威張るな。

「女子への冒瀆みたいな特技だよ！」

自分の体を抱きしめる様にして、羽川さんは変態兄貴から距離を置いた。

「さて、悩める乙女の羽川にプレゼントだ」

そう言って兄貴はブラッドクッキーを取り出し、内容を説明した。

そして、冒頭に至る。

兄貴としてはどうしても羽川さんに「あーん」がしたいらしい。上目の羽川さんがみたいとかアホの塊のような発言をしていた。尊敬するのを止めるべきか現在考慮中。腰の形で人類を識別する化け物を誰か粛清してくれないだろうか。

「友達同士のスキンシップだ」

「コレは交際中の男女のスキンシップだと思うよ」

と口では断っているものの、羽川さんも女の子である以上、瞬間的に痩せるならという思いはゼロではないのだろう。

「あーん」

諦めたのか渋々と羽川さんは口を少し開けた。兄貴の毒牙の餌食になるかと思っていると、どこからか飛来した鉛筆がブラッドクッキーを砕いた。

「あーん」

新しいブラッドクッキーで再度挑戦、今度はコンパスが飛んできた。

「あーん」

新しいブラッドクッキーで再度挑戦、今度は兄貴の全身に向けて大量の文房具という名の凶器が飛んできた。当然、兄貴がとる行動は一つ。

「奏シールド！」

予め予想していたため、俺は瞬時に全ての凶器を叩き落とした。最近、盾にされる頻度が多い気がする。

「どうやってこんなにたくさん一度に投げるんだろう？」

吸血鬼の俺にも不明だ。文房具という時点で犯人が誰かバレバレだ。ドアを開けてみたが、そこには誰もいなかった。相変わらず勘のいい人だ。

「うちの馬鹿兄がすいません」

「大丈夫……」

と物凄い遠い眼をした羽川さんは言った。

「慣れたから」

ごめんなさい。ホント。俺がもう少し躡けるべきだった。

「僕のささやかな野望が……」

黙れ。過去の女性歴を羽川さんに教えるぞ。

「僕に死ねと？」

イエス。

「なんか恨みでもあるのか？」

その蛆が沸いた脳で考えてくれ。

「キスシヨットに普段のシスコン振りを話すぞ」

すいません。俺が悪かったです。妹専用のアルバムとか作っていることを知られたら、俺たぶん生きていけません。たぶん、殺されるだろうな。両方に。

「夜、好きに行動していいから、今は戻ってくれ」

今夜キスシヨットと真夜中に待ち合わせしているため、逆らえず、俺は兄貴と代わった。

「よし、明日再チャレンジだ」

「もうしなくていいから」

どこか疲れたように羽川さんは言った。たぶん、兄貴とかかわったことを少なからず、後悔しているのではないだろうか。その後は

特に大きなイベントもなく、兄貴にしてはまともな会話を交わし、帰宅路の途中で羽川さんと別れた。そして、十一時過ぎまで、兄貴と共に勉強し、俺はキスショットに会うために主導権を貰った。今日は季節外れだが、二人で廃墟の屋上で月見の予定だ。

「遅い」

「まだ十分前だぞ」

約束の時間よりも数分早く着いたのだが、キスショットの顔は不機嫌そうだった。

「うぬの兄の都合などどうでもよい。俺と同棲するがいい」

「将来的にはそうしよう」

約束しつつ、ご機嫌斜めのお姫様に首を差し出した。ガブリといつもよりも強めに噛まれた。俺の恋人は寂しがり屋なのだ。半月がやけに輝き、周囲に光の輪が見える晩だった。最高のデート日和だ。貧血で動けない俺の体をキスショットは優しく膝枕してくれた。そのまま二人で月を眺めた。

「そういえばのう。夕刻に「蟹」の小娘が来た」

「戦場ヶ原さんが？ 何しに？」

「俺に礼を述べて、書物を数冊置いて行った。後、うぬの兄に関して聞いていた」

戦場ヶ原さんを助けたのは確かにキスショットなので、別に不自

然なことではない。

「なんて言った？」

「化け物級の精神力の持ち主でどうしようもないお人好しだと」

分かりやすい説明だ。的確に兄責を表している。それと、キスシヨットが普通に俺と兄貴以外と会話していることに驚いた。

「書物がちょうど俺が必要な内容でな」

「具体的に言っと？」

現代のファッションだろうか。

「男の飼い方」

あとで全部処分しておこう。

「キスシヨットは俺をどうしたいんだ？」

どんな内容であっても、受け入れるつもりだけど。

「俺のモノであれ、永劫に」

それは絶対の命令。俺にとっての鎖で喜び。

「喜んで、我が主」

二日ぶりのキスをした。長く、深く。

「儂無しではうぬはもう、発情できんしのう」

悪戯っぽくキスショットは笑った。まだ、そこまでは進んでいないので意味がわからなかった。

「儂の体以外では反応せんようにした」

「？」

キスショット以外別に意中の相手などいないのだが。

「儂以外には下半身が反応しないように暗示をかけた」

その言葉の意味を吟味し、俺は自分の下半身を確認した。異常なし。そんなはずないと脳内で声が聞こえた。

「俺不能？」

「儂以外には」

あっさりと断言された。

「もっこりしないと」

「儂以外には」

俺の人権とか、身体的自由はどうなっているのだろうか。

「浮気できぬじゃろう」

確かに。ただ、浮気の前に俺が鬱で死にそうだ。

「愛しておるぞ、奏」

普段だったら、泣いて喜ぶような言葉でも今は耳に響かなかった。なんか胸にポツカリ穴が空いたような気がする。キスショット以外の相手などいない。それは絶対に変わらない。なのに、この扱いはなんだろう。俺は兄貴と同じように女たらしとして、見なされているだろうか。

「俺、愛されてる？」

「うむ」

なんか間違っているような気がする。

「キスショットは俺のこと信用してる？」

「うむ」

「じゃあ、この暗示は？」

「保険じゃ」

俺信用ゼロ。

「解けない？」

「何重にもかけたからのう。無理じゃ」

俺は限定的な不能になってしまいました。まあ、キスショット以外を愛するなんてありえないので、特に支障はないのだが、なんでか、泣きたい。猛烈に泣きたい。男として泣きたい。

自分の身体について悩んでいたため、戦場ヶ原さんがこの廃墟にいるもう一人の人物、忍野さんと何を話していたのか、確認しなかった。これを俺は後で後悔することになる。

ひたぎシャーク 002（後書き）

非常にありがたいことに「葵しぐれ」様のHPである「七色魂」に傷物語（双）のイラストが掲載されました。ありがとうございます。どれも素晴らしいイラストばかりなどで、ぜひ一度訪れてみてください。

いきなりだが……

兄貴が家出した。

そして、俺は現在、兄貴を抹殺するために市内を徘徊している。

兄貴のことは尊敬しているし、感謝しているし、憧れている。しかし、今、俺が兄貴を殺害したとしても誰も俺を責めないだろう。

俺が兄貴の猥褻な雑誌、ビデオ、写真などを処分した結果、俺が作成していた妹の成長記録を破壊された。

以前から兄貴のコレクションは情操教育上悪影響しかないので、処分する機会をうかがっていた。最近、ようやく一時的に分離でき

るようになったので、兄貴の外出中にいい機会だと、全部まとめて処分した。細かく裁断し、灰にした。量が多かったのですからかなりの時間がかかってしまったが、時間内に作業は無事終了した。

兄貴は血の涙を流していた。

あんたいい加減に人間止める。もう十分に人外の領域に到達しているよ。本気でそう思った。

「探さないでください。 暦」

という書置きが残っていた。お約束だ。典型的な家出少年だ。マウンテンバイクでどこまでいくつもりなのか。まあ、その内に帰ってくるだろうと兄貴兼俺の部屋に戻ったら、絶句した。俺の長年の努力の結晶が無残に破壊されていた。写真から、日記、身長、体重の詳細記録など苦労して作り上げた二人の妹の成長記録が破壊されていた。許さん。常識的な兄なら、当然の義務なのに、それを壊すか。そうか、兄貴。なら、こっちも考えがある。

「これは殺していいよね？」

と呟き、兄貴を探しに出かけたのだが、見つからない。なぜか、分離状態も解けない。居場所もまったく見当がつかない。さすが、元ストーカー被害者。伊達に数回ストーカーされたわけではない。

「キスショットの所にいるのかも」

あの廃墟にいるかもしれないと、まだ昼間ではあるが、愛しの吸

血鬼の住居に向かった。

「やあ、弟くん。何かいいことでもあったのかい？」

とお決まりのセリフで忍野さんは迎えてくれた。逆さに吊るされた状態で。前回は、鳥葬され、首から下が地面に埋まっていた。今回は、鎖で逆さまに吊るされていた。インパクトのある登場はいいことなのだが、心なしか顔色が悪い気がする。なんか、青白い。頭に血が昇って赤くなる段階を超えたらしい。

「おーい、弟君？」

さて、どう対応しようか。

「登場シーンは派手、でも、あとは空氣的な存在。アニメで一番いないキャラだ」

忍野さんはすべてに絶望した顔をしていた。いいじゃないですか、登場すらできない俺とは違って、一応、謎めいた人物的な地位を貰えるんですし、なんか、外見がイメージと違ったりしますけど……

「君の彼女の声優は誰だろうね？　そもそもセリフがあるのかな？」

「

プツンと俺の中で何かがキレた。冷静にとっても静かに、俺は忍野さんを拘束する鎖を切った。重力で忍野さんが地面に落ちた。そして、そのまま地面に沈んだ。というか、落ちた。落下地点に俺の恋人によって事前に掘られていた落とし穴に……。穴の底が見えないが、問題ない。

「俺の恋人はロリじゃなくて、スタイリッシュなお姉さまだ」

ここで熟女と言わないのがポイントだ。

「メタすぎだよ」

「あなたが言わないでください」

会話の内容が危険過ぎたので、俺は足早廃墟の中へと向かった。忍野さんはたぶん自力で這い上がるだろう。と勝手に忍野さんの生存を自己完結しつつ、俺は階段を上がった。いつの間にか私物が増えていた。物質創造能力だろうか。

「パソコン？」

俺の恋人、キスショットがパソコンを使っていた。衝撃的な光景だった。文明の利器を使う古代吸血鬼。シニールだ。

「公式ホームページをちよつとな」

「わかった。もういい。何も言うな」

なんか疲れた。兄貴はいないようだ。アニメ化ねえ。知名度上がる。だが、俺は出ない。寂しい。それより、いったい、うちの高校は何階建てなのだろう。いくらなんでもあの階段長いだろ。

「ガゼルはいいのう」

「まあ、俺も好きだけどさ」

それはいいことなのだが、どうも話が危険な方向に進んでいるような気がするので話題を変えることにした。

「兄貴知らない？」

「見ておらん」

「どこいったんだ？」

「どうかしたのか？」

怪訝そうなキスショットに俺は首を振った。

「あの「蟹」の小娘なら来たが……」

戦場ヶ原さんか。時折ここに来ているのは知っているが、何が目的なのだろうか。なんかキスショットが物凄い複雑な表情をしている。

「なんか、服が血で汚れておった……」

殺人事件か。あの人なら可能性があるな。文房具でグサリと刺す光景が容易に想像できる。怖いな。

「人間はよくもまあ、くだらないことを考えるのう」

何の話をしていたのだろうか。非常に気になる。問いただそうと思ったら、机の上に置いてあるレポートの様な物が目に入ったのでパラパラと捲ってみた。兄貴の過去の人間関係が詳細に書かれていた。何人かの元同級生の名前の横には赤いインクで「削除済み」と

書かれていた。これはインクだろうか。それとも血だろうか。後で安否を確認した方がよさそうだ。

「パチンしたらしいぞ」

何をとば聞かない方がよさそうだ。過去の争奪戦の関係者の皆様は無事だろうか。

「これどうやって、調べたんだ？」

探偵なんてこんな田舎にいないし、別に記録が残っているわけでもないのだが。

「女には独自の情報網があるんじゃない？」

あの人に友人はいなかったはずだが、キスショットにもあるのだろうか。

「うぬの妹達の顔は知っておるぞ」

いつの間に……

「あの小娘は少々、行き過ぎじゃがのう」

あの人はいったい普段何をしているんだ。想像したくない。

「どう考えても、あの文房具の保留量は服の面積的に不可能じゃ」

そうだな。あれだけの文房具を服の中に隠し持っているのに、外からは全然見えない。どういう原理か分からないが、異能力に近い

ような気がする。

「てか、戦場ヶ原さんと仲いいのか？」

性格的にはあまり似ていないと思う。キスショットは俺に対して優しいし、照れ隠しにしか暴力を振らない。たまに腸がぶちまけられる程度だ。被害者は俺だけなので特に問題はない。

「俺にも創れないものがあるしのう」

「俺に言ってくればいいのに」

キスショットの能力でも不可能はあるらしい。刀や家具が創れても限界はあるようだ。

「荒縄とか、避妊具とか、媚薬とか」

「はい？」

思わず聞き返してしまった。いや、その確かに頼まれても困るが、なにも戦場ヶ原さんに頼まなくても。あの人が本当に調達したのなら絶句だ。どこから入手してるんだろう。

「俺も色々今後について考えておるのじゃ」

できれば、明るい家族計画であって欲しい。

「まあ、うめは俺以外に欲情できんから、浮気の心配は無いがのう」
そういえば、人体改造された。日常的に問題が無いからいいけど。

「うちの兄貴を去勢してくれないか？」

そのほうが今後役に立ちそうだし。

「アレに暗示が効くと思うか？」

あの化け物級の精神力を考えれば、無理だろうな。

「変な女に好かれる兄を持ったのう」

言わないでくれ、それ昔から気になってたんだ。なんか常識人が周りにいないような気がする。

「愛とは奪い、独占するもの……」

告白したのは俺なので、キスショットは別に誰からも奪ってないと思う。

「うむ、人間にはいいセリフじゃ」

小説の一節か何だろうか。

「正しくは、愛とは奪い、独占するものであり、手段を問わず、迅速に手に入れ、妨害を滅殺すもの。浮気には残忍な死を。離れぬよう鎖による束縛を。死体は朽ち果てるまで愛撫を。最後の時に手を汚すのは自分たれ」

「滅茶苦茶歪んでるぞ！ その愛情！」

それは愛情ではなくただの独占欲だ。恐怖の対象にしなければならない。誰だ、俺の恋人にそんなことを教えたのは。

「あの「蟹」の小娘が……」

「兄貴か！？ 相手は兄貴なのか！？」

ヤバイ。ヤバすぎる。これはマズイ。

「兄貴はドMなんだ！」

本人曰く、Mカッコイらしい。

「ストライクゾーンじゃねえか！？」

ヤバイ。本気でヤバイ。彼氏がMで彼女がS。最悪のパターンだ。駄犬の如く扱われる兄貴の姿が浮かんた。兄貴が犬の首輪で柱に繋がれた光景。似合いすぎだ。

「しかも、スタイルの良い一途な女の子って、過去の経歴見るとばつちりだな」

あと家庭的だったら、満点。

「いいことではないか？」

まあ、確かに兄貴に彼女ができることはいいことなのだが、こちらとしては問題が多い。俺と兄貴の体のことを受け入れてくれない。キスシヨットの場合は元々人外なので、この問題はないのだが、相手が一般人だとどうだろう。そもそも、失礼だが、兄貴

の変態的な思考を受け入れられる女性などいるのだろうか。それに

……

「絶対にまた「戦争」になる」

ただでさえ、トラウマなのに。またアレが始まるのか。

「止めるのか？」

それは兄貴の自由なので、俺がどうこう言つべきではない。

「何をそんなに慌てておる？」

「刺されかけたりするんだよ。ほぼ毎回」

俺が防いでいるので未遂で終わっているが。今、兄貴は一人だ。兄貴が死んだら妹と両親が悲しむ。それは嫌だ。最初と矛盾しているが、元々、俺は半殺しで終わらせる予定だった。

「すまん。ちょっと、見てくる！」

恋人と離れるのは悲しいが、今は兄貴の生死を確認する方が大切だ。幸い、夕方になっていたので、吸血鬼の能力が使用可能だった。

「翼！」

バサリと音を立てて、背中からコウモリと翼が生えたとすぐに飛翔した。高度を最大限まで上げて、地上から見えない位置まで到達すると、視力を強化して、兄貴を探した。すぐに見つけた。不審過ぎた。

離れた位置にある公園で兄貴がツインテールの幼い女子と戦っていた。正確には、兄貴が腕を噛まれ、逃れようと必死に腕を振り回していた。それを戦場ヶ原さんが傍観していた。

「兄貴ってロリコンだったのか……」

心配した俺が馬鹿だった。

ひたぎシャーク 004

犬がいる。飼い犬だ。

飼い犬である以上、首輪をしている。黒い分厚い、革の首輪だ。首輪の金具部分には銀色に煌めく鎖が繋がっており、鎖の反対側の先端は飼い主に握られている。ここは公園であり、犬を飼っている人が散歩で訪れていても、別に不自然ではない。特段に奇妙な光景でもないはずだ。

その犬の名前が、阿良々木 暦でなければの話だが……

今の兄貴の心情を象徴するかのように、アホ毛がしょんぼりと項垂れたように下に傾いている。四つん這いなので、掌が汚れているようだ。ガツクリと力なく、肩を落としているその姿は本当に疲れた犬のようだ。

元氣のない飼い犬とは異なり、飼い主は嬉しそうだった。普段、仮面の様に、まったく感情を表に出さない人なのだが、今は薄い笑みを浮かべていた。少女漫画に登場するヒロインの如く、その瞳には楽しそうな光があった。そう、驚くべきことに、そして、信じられないことに、あの戦場ヶ原さんが普通に笑っているのだ。本来なら、とても微笑ましいはずなのだが、どうみても、男子高校生を鎖で繋いで、鬼畜な行為を行おうとしている悪女にしか見えない。

放っている雰囲気あまりにもアレなので、キスショットはさりげなく俺を盾にしている。つい先程まで、俺をボコボコにしていたキスショットだが、今は神妙な表情をしている。キスショットから数歩離れた所にいる八九寺ちゃん、露骨に顔を顰めている。あまり、小学生が見ていて気持ちのいい光景ではないだろうから、当然だ。

非常に端的に今の状況を説明すると、兄貴が戦場ヶ原さんの犬となっており、首輪と鎖で拘束されている。それを俺とキスショットと八九寺ちゃんが微妙な気分で眺めているといった感じである。

なぜ、このような混沌とした状況に陥ったのか、俺は痛み始めた額を抑えながら、数分前の出来事を思い返した。

キスショットの住居である廃墟から外に出て、上空から、幼い女の子に暴行を加えようとしている最低の人間、俺の兄である阿良々木 暦を発見した。身内が犯罪者になると非常に厄介なので、未遂で終わらせるために全力で現場まで、降下し、拳を放とうとしていた兄貴の襟首を背後から掴み、吸血鬼の怪力で空中に投げ飛ばした。兄貴の腕に噛みついてた女の子はその勢いで、引き剥がされた。怪我をしないように受け止め、地面に優しく下した。戦場ヶ原さんは突然の俺の登場に少々驚いたようだ。

「腕に穴が空いた！ って、奏か！？」

空中で兄貴が喚いている。濃密な血の匂いが食欲を沸かせた。あとで少しだけ、吸わせてもらおうと思ったが、B Lな光景になるの

で、断念した。

「小学生を殴ろうとするほど、兄貴が腐っているとは思わなかったよ」

錐揉みになって落下してきた兄貴を再度空中に投げ飛ばした。

「本気でヤバかったんだ！」

「それは女の子を殴っていい理由にはならない」

もう一回投げ飛ばした。まるでお手玉だ。

「……氣持悪くなってきた」

それが狙いだ。そのまま酔うがいい。

「俺の努力の結晶をよくも壊してくれたな！」

俺には二人妹がいる。二人とも中学生であり、非常に仲が良い。上の方の妹の名前は火憐ちゃん。格闘技を長い間続けおり、かなりの腕前で、常にトレーニングをしている。「正義の味方」と称して、自分が正しいと思ったことを迷わず実行する少々真っ直ぐすぎる性格の持ち主である。兄としては、あまり危ないことをして欲しくないが、本人の趣味にまでは口出しできない。ただ、いつもジャージを着用するのではなく、女の子らしい服装をして欲しいとぐらいは言わせてもらっている。将来はきっと、スポーツ系の美少女にあるだろう。

下の方の妹は月火ちゃん。和服をこの上なく愛しており、和服が

着れるからという理由で、茶道部に入部したほどだ。割と怒りっぽい性格だが、きちんと冷静かつ客観的に物事を考えることができる。大和撫子のようになって欲しいと思っている。

そんな目に入れても痛くない妹達の成長記録を作っていたのだが、ソレを兄貴が俺が兄貴の猥褻な雑誌を破棄したからという理由で壊された。実に理不尽だ。

「このシスコン！」

投げ飛ばされながら、兄貴が俺を罵った。痛くも痒くも無い。自覚している。

「僕の「金髪巨乳美女特集」を返せ！」

「キスショットの半径10mに近づくな！」

弟の恋人に欲情するな。キスショットは渡さない。あのサラサラの髪も、柔らかい体も、優しい瞳も、甘い匂いも全部俺のだ。渡してたまるか。

「昨日買った「委員長スペシャル」は未読だったんだぞ！」

「羽川さんに懺悔しろ！」

あの人にこれ以上セクハラしたら、さすがに嫌われるぞ。てか、あの人を敵に回したら、こっちの身が危険だ。制裁の意味を込めて、さらに高く投げ飛ばした。

「人権侵害だ！」

「二冊残しただろうが！」

内容が特に問題なかったなので、二冊ほど残しておいた。

「え？ あるのか！？」

知らなかったらしく、空中で兄貴は首を傾げた。

「和服美少女と格闘系美少女は残しておいた」

クルクルと兄貴は空中で前転し、俺の顔面に踵落としを見事に当たった。衝撃で、俺の顔面からメキャツッという嫌な音が響いた。

「火憐ちゃんと月火ちゃんに懺悔して、お前が死ね！」

兄貴はそのまま俺の顔面を鷲頭かみにし、地面に叩きつけてきた。砂が口に入り、塩の味が口に広がった。

「購入したのは兄貴だろうが！」

起き上がった勢いで兄貴を跳ね飛ばし、三日月を取り出す。鎌の部分を兄貴に向けた。

「そのアホ毛切り落とす！」

堂々と俺は宣言した。アホ毛の無い阿良々木 暦はもはや阿良々木 暦ではない。ただの変態だ。丸坊主の鬼太郎がいたとしても、それは鬼太郎と呼べないのと同じだ。ここで阿良々木 暦のチャームポイントを奪う。そして、アニメに俺が代わりに出演する。

「ギャルゲーのキャラめ！」

「それはあんだだ！」

兄貴はその台詞を言う権利は無い。断じてない。あんたが巻き込まれた修羅場の数は三桁後半だろうが。それを考えれば、ギャルゲーを遥かに凌駕している。俺は普通に彼女と恋愛しているだけだ。吸血鬼だけだ。

「この無駄にスペックの高い変態野郎！」

まったく同じタイミングで同じセリフを口にした。

「……む」

「……ほう」

俺は兄貴のアホ毛を切り落とすために三日月を構えた。それに対し、兄貴は外道すぎる手段をとった。大声でこっぴどいんだのだ。

「キスショット！奏が浮気したぞ！」

もちろん、俺の恋人はここにはいない。住居である廃墟でアニメ

版の公式ホームページを見ているはずだ。にも、拘わらず、兄貴が発言した次の瞬間、俺の体は腰の辺りで両断されていた。

「……え！？」

自分に何が起こったのか理解できなかった。スルスルとズレ始めた上半身と下半身と腕で抱き止め、接着した。その時になってようやく自分の体を切断した凶器が何か理解した。

学習塾の机。それが凶器だった。凄まじい速度で投擲された証拠に数か所が焦げており、地面に深く突き刺さっていた。そんな馬鹿なと思い、それでも事実を認識した直後に、今度は後ろから誰かに蹴り飛ばされた。

「浮気じゃと！？」

釈明する暇なんて無かった。突如空から落ちてきたキスショットにボコボコにされた。手加減も容赦もゼロの打撃の連打。一言も発せずに滅殺されそうになった。

「このネクロフィリアめ！ 幽霊に欲情しおったのか！？」

「ちょっと待つ……」

「ロリコンがア！」

なんで自分の恋人にネクロフィリアだの、ロリコンだの呼ばれないといけないのだろうか。

「幽霊って、なんだ？」

「そこにいるじやろうが！」

少し落ち着いたらしく、キスショットは手を緩め、兄貴が先ほど殴ろうとしていた女の子を指差した。ツインテールで、大きなリックサックを背負った可愛らしい女の子だ。困惑したような、怯えたような表情でこちらを見ている。戦場ヶ原さんは黙ったままだ。

「あの子幽霊なのか？」

「そうじゃ。気が付いておらんかったのか？」

キスショットはこの場所の違和感に気が付いたらしく、俺の拘束を緩め、辺りを見渡した。

「え、八九寺が！？」

八九寺ちゃんという名前らしい。幽霊のことについては、兄貴も知らなかったらしく、本当に驚いたようだ。ただ、戦場ヶ原さんは一瞬だけ、安心したような息を漏らした。

「あのね、阿良々木くん。キスショットさんはたぶん本当のことを言ってるわ」

淡々と戦場ヶ原さんは切り出した。

「八九寺ちゃん、よね」

確認するかのようには、戦場ヶ原さんは尋ねた。

「私には見えないのよ」

俺と兄貴は顔を見合わせた。だって、すぐ真横に立ってるのに、どうして見えないことがあるのか。そんな思いで双方を見比べた。そして、兄貴がポツリと噓だろうと言った。

「見えないわ。声も聞こえない」

「いや、だって、おまえ……」

そこで心当たりがあつたらしく、兄貴は押し黙った。

「なんで、何も言わなかったんだ？」

兄貴はそう聞いた。

「言えるわけがないじゃない。だって、阿良々木君に見えてるのに、私は見えないなら、私の方がおかしいって、思うわよ」

戦場ヶ原さんは不安だったのだろう。まだ、自分に異常があるのではないかと。まだ、悪夢は続いているのではないかと。きっと、怖かったのだ。また、異常な状況に戻ってしまったのかもしれないと。だから、見て見ぬふりをした。

「それより、奏は本当に浮気をしたのか？」

キスショットの優先事項は違つたらしく、いきなり俺に問いただした。

「兄貴の嘘だって、俺はキスショット以外眼中にない。本当だ。」

キスショットがパチンと指を鳴らすと、兄貴の体が浮き、キスショットの手元に引き寄せられた。

「嘘じゃな？」

「じよ、冗談です」

だらだらと汗を流しながら、兄貴は壊れた人形のようにぎこちない笑みを浮かべた。

「さて、どんな罰を与えてやろうかのう」

キスショットは少し、怒っていた。こめかみがピクピクと動いている。そして、兄貴の首に手を伸ばし、触れた。すると、首輪と鎖が現れ、兄貴は四つん這いになった。

「しばらくそうしているがいい」

キスショットは飽きたといわんばかりに鎖の先端を適当な木に結びつけたが、戦場ヶ原さんが手を伸ばした。

「私にください」

その勢いに思わず、キスショットが一步後ろに後退した。キスショットは何も言わずに鎖を戦場ヶ原さんに手渡した。

そして、冒頭に戻る

兄貴のシニール過ぎる姿をできるだけ見ないようにして、俺は八九寺ちゃんを改めて見た。寂しそうで、どこか諦めを含んだ表情だった。この年齢の女の子が浮かべていいものではない。

「さて、どうしようか?」

「コイツをお母さんの所に送り届けるんだよ。それ以外無い」

そうはつきりと兄貴は言った。まだ事情は十分に把握できていないが、どこかに行くとかちゅうだったらしい。

「幽霊だけど?」

「そんなの関係ない。子供が親に会うのに理由なんていらさないさ」

そこが兄貴らしくていいところだと思うんだけどさ。その恰好でいいことも言っても、説得力ないよ、兄貴。

あとがき

更新が遅れて申し訳ありませんでした。感想返信させていただき
ました。わざわざメッセージをくださった方、本当にありがとうございます！

皆様の批評が原動力です。これからもよろしく願います。

ひたぎシャーク 004 (後書き)

更新が遅れて申し訳ありませんでした。

小学生（幽霊）に存在を否定された。

うちの変態兄貴がとんでもない行為を八九寺ちゃんに対して行ったらしいので、俺は自己紹介の後、阿良々木家を代表して、心の底から謝罪した。誤っても被害者の心情が改善されるような場合は少ないのだが、身内の行為に対して、ある程度の責任を負わなければならないと個人的に感じている。特にいつ逮捕されても不自然ではない兄貴の行為を考えると、未然に防げなかったことに対して、責任を感じる。身内が実はロリコンだったというのは結構ショックが大きい。もしかから、普段から、二人の妹をいやらしい視線で視姦していたのではないかと、考えるだけで、やるせない気分になる。

「まあ、オリキャラさんの責任ではありませんし、私の心は拾いですから」

自分がオリキャラであることは否定できないが、それを固有名詞にしないで欲しい。一応、阿良々木奏という名前があるのだ。それと拾いではなく、正しくは、広い。微妙に間違っている。語学力が高いのか、低いのか、判断に困る。

「なんで、オリキャラって、呼ぶの？」

「アニメ未登場人物のことをオリキャラさんと呼ぶのではないでしようか？」

それは違う。少なくとも、俺以外にも未登場人物いるし、彼らはオリキャラと呼ばれる分類には入らないはずだ。なんで、小学生がオリキャラという言葉を知っているのかという疑問もあるが、スルーした方がいいような気がした。

「それで、モブキャラさんとその……金髪さん？はどのような関係で？ お二人とも人間ではないようですが？」

「モブキャラ！？ さりげに酷くない！？俺はオリキャラだよ、モブキャラじゃない」

「失礼。噛みました」

「違う、絶対わざとだ！」

「影ました」

「わざとじゃない！ てか、俺はそんなに影が薄いの！？」

初対面の小学生に影が薄いと言われてしまった。確かに、兄貴の行動が変態すぎて、俺の印象があまり残らないことは否定できないが、それでも、忍野さんや戦場ヶ原さんよりは目立っているつもりだと思ったら、大量の文房具が飛んできた。もちろん、避けた。吸血鬼の身体能力に感謝した。

「何か失礼なことを思われた気がするわ」

「無茶苦茶だ！　この人！」

勘が鋭いとか、そんなレベルの話ではない。読心術の領域に到達しているのではないだろうか。その対処方法にも疑問を感じずにはられない。

「戦場ヶ原さん。中学時代の同級生にナニカしましたか？」

これ以上、自分の身が危険にさらされる前に、非常に気になっていたことを尋ねてみた。

「犬が欲しいと主張しただけよ」

そう言つて、兄貴の首に繋がったままの鎖を引つ張った。聞かなければよかった。その時の戦場ヶ原さんの嗤いは真性の吸血鬼であるキスショットですら、俺の後ろに隠れるほど、ヤバかった。ああ、ヤバかった。目の錯覚か、兄貴を噛み砕こうとしているジョーズ並みに大きな鮫の幻影が見えた。これ以上深入りしないほうがいいと、本能が告げていた。昔の知人の皆様、無力ですいません。無理です。勝てる気しません。とりあえず、自己保身のために、話す対象を変えることにした。

「えーと、八九寺ちゃん。あの人はキスショットって名前だね。俺の恋人なんだ」

「なるほど、男女交際をなされているんですね」

間違つてはいないが、言葉づかいが古い気がする。そういえば、また詳しくは聞いていないが、この子は幽霊だった。実際の年齢は何歳なのだろうか。やはり、見かけとは異なるのだろうか。これか

らどうするのか、判断するためにもその辺りの事情を聞かないといけないのだろう。重い話になりそうな気がする。

「それにしても、見蕩れるの蕩れるって、すごい言葉よね。知ってる？草冠に湯って書くのよ。私の中では、草冠に明るいの、萌えのさらに一段階上に行く、次世代を担うセンチティブな言葉として、期待が集まっているわ。メイド蕩れー、とか、猫耳蕩れー、とか、そんなこと言っちゃったりして」

今は八九寺ちゃんの事情を知ることが先決だ。なんか、後で意味不明の会話がなされているが、俺は聞こえない。何も聞こえていないさ。

「今の阿良々木くんの姿には私、とつても、蕩れるわ」

俺は何も聞いていないし、見ていない。ああ、さらに犬っぽくなった兄貴なんて見てない。アホ毛よ、なぜ嬉しそうに左右に揺れる。このドMめ。Mカッコイイと言えいいのか。まあ、俺は何も知らないし、見てない。キスショット以外は眼中に無い。美人だなあ……

「なあ、奏、そろそろ、これ、どうにかしてほしいんだけど……」

無視。無視に限る。我が家には子供は三人しかいません。長男と長女と次女だけです。少なくとも、住民票にはそう記載されているはず。阿良々木暦なんて人は知りませんと勝手に自分に言い聞かせていたら、体が透け始めた。

「うわ、モブキャラさん！　なんか、消えますよ！　存在感が無くなってます！」

「うーむ、もともと、PV数とか、コメント数が極端にすくない二次創作にしか、登場しておらんかったしのう。更新停止か」

「人気がある作品は自然とコメントが増えますからね。やっぱり、モブキャラさんが面白くなかったのが、いけなかったのでしょうか？ 私の権限でもアニメに登場させられませんし…」

「ネクロフィリアは放送できんしのう」

モブキャラではなく、オリキャラだと主張したかったのだが、無理だった。分離できる時間が過ぎてしまったのだ。つまり、タイムアウトだ。強制的に兄貴の中に戻らされる。これが別に初めてというわけではないのだが、タイミングが悪すぎる。それより、八九寺ちゃんは一体アニメ化に対してどれだけの発言権を持っているのだろうか。あと、キスショット、おまえの発言が一番酷い。普通に精神的にダメージ受けたぞ。

「ああ、ハブキャラさんが消えてしまいました。喪服を祈ります」

ハブキャラとはつまり、ハブられているキャラクターということだろうか。いくらなんでも、それはない。この子、実は、戦場ヶ原さんクラスの毒舌なのではないだろうか。無邪気なだけに余計にたちが悪い。あと、喪服じゃなくて、冥福だ。喪服はお葬式に来ていく服で祈ることではない。

「なんで、俺まで、駄犬兄貴の視界を共有しなければならないのだろうか？」

「それは、僕たちが兄弟だから」

「今、心の底から、自分の血縁関係を呪ったよ」

「奇遇だな。僕も金髪でボインの彼女がいるのに、シスコンな弟に殺意を覚えたよ」

なんで、俺ばかりこんな災難に遭うのだろうか。さっきは自分の恋人にボコボコにされたまだ、決着はついていない。こうなったら、口論でこの兄弟喧嘩の勝敗を決めるしかなさそうだ。先に兄貴が攻撃してきた。

「知ってるか？吸血って、性行為に近いんだぜ？」

「知ってるよ」

もう十分、色々ヤッているので、その程度ではどうしようしない。よく腸ぶちまけられるし、たまに全身ポリポリ喰われるし、今日は胴体を両断されたし、なんか、慣れた。

「ついでに、子作りにも該当するらしい。つまり、キスショットは二人目の母親」

兄貴が何を言っているのか、一瞬理解できず、俺の頭が真っ白になり、数秒後、再び動き始めた。

「マザコン」

「いや、俺はシスコンだから」

ただ、俺がキスショットの眷属であるということは確かに子供と捉えることも可能であることは一概には否定できない。そういう解釈も存在するからだ。でも、マザコンはさすがに無いと思う。たぶん……

「ネクロフィリアでシスコンでマザコンで四肢の無い吸血鬼に一目惚れした鬼畜。それが、阿良々木奏だ」

「ただだけハイレベルの変態だソレ。まず、キスショットは吸血鬼だけど、生きているから、俺はネクロフィリアではない。シスコンは認めよう。吸血がどんな行為かは多義的な解釈になるので、俺はマザコンではない。一目惚れは、事実だから認めるが、俺は断じて鬼畜ではない。」

「黙れ、ロリコンな幼児虐待者」

「幸いに献身的な弟のおかげで虐待は未遂で、僕は大きい胸が好きだ」

まさか、自分の行為で自分の首を絞めることになるとは、後、キスショットに近づかないでほしい。本当にセクハラしそうで怖い。

「この駄犬」

「視界を共有しているお前もな」

不味い。完璧に負けている。このままでは完全に敗北してしまう。なら、最終兵器を使うしかない。

「なあ、兄貴気が付いてるか？」

「ん？」

「この先の交差点に羽川さんがいる」

「なにイ！？」

兄貴が本気でビビッている。ピタリと戦場ヶ原さんも歩くのを、動くのを止めた。今の現状を再度説明すれば、兄貴が戦場ヶ原さんの犬となっており、四つん這いで首輪と鎖で拘束されている。それをキスショットと八九寺ちゃんが微妙な気分で眺めており、俺はいつものごとく、兄貴の視界を共有しているといった感じである。

「えーと、阿良々木くんだね？」

交差点を渡り、羽川さんがこちらに近づいてきた。困惑気味の表情だ。もし、知人が兄貴と同じ状況だったら、当然の反応だ。兄貴は慌てて首輪を取ろうともがいている。

「戦場ヶ原さん？」

即座に文房具で攻撃したら、どうしようかと思っていたが、戦場ヶ原さんはそのまま硬直していた。男女では扱いが異なるのだろうかと思っていたら、キスショットの声が聞こえた。

「聞こえるか、奏？　今、念話で話しておる」

「聞こえているよ」

「あの眼鏡の小娘から、魔王の匂いがする」

「……はい？」

魔王って普通にヤバくないか。名前からしていかにもヤバそうだし。新しい「怪異」の類だろうか。だとしたら、かなり危険だ。羽川さんは俺たちをそれぞれ見渡し、頭の中でどのような過程でこのような状況に陥ったのか、推測し終わったようだ。

「ちょっと、頭冷やそうか」

これは普通に脂肪フラグ、じゃなくて、死亡フラグのようだ。スーパー阿良々木ブラザーズもここまでか。ご愛読ありがとうございました。なんか、白い魔王に殺されるっぽい。愛してるよキスショット。マイシスターズ。ああ、ごめん兄貴。最後に兄弟喧嘩なんてするべきじゃなかったな。胃に穴があいて死にそうだよ

「胃に穴がいあても、すぐに再生するじゃん」

確かに。自分は不死身の吸血鬼でした。なんて不便な体だ。前のキスショットの気持ちがあった。無限ループだ。

「キスショット蕩れー」

俺は現実逃避気味に最後にキスショットにこう告げた。

ひたぎシャーク 005 (後書き)

感想よろしくお願いします。モチベーション落ち気味なんで

ひたぎシャーク 006

猫が鮫に馬乗りになって、猫パンチで鮫をボコボコに殴っている幻影が見える。

以前から、兄貴が「表」に出てる時、自分の体はどうなっているのか、気になっていた。消滅しているのか、ドロドロに溶けているのか、見えないだけなのか、いずれにせよ、少なくとも、臓器の類は全て存在するらしいことはわかった。

だって、さつきから、胃に穴が開いて、再生するループを繰り返しているからな。

これぞ、本当の無限修羅場ループ。

さすがに、死にたくなってきた。キスショット。ごめんな。不死身ってこんなに辛いつてしらなかったよ。無事ここから逃げられたら、なんでもするから許して欲しい。

「で、戦場ヶ原さんは阿良々木くんにナニをしているのかな？」

羽川さんが笑顔で、優しく問いかけている。物凄い猫撫で声で、戦場ヶ原さんを問い詰めている。ああ、なんか、ヤバイ。何がヤバいつて、ヤバイのがヤバイ。

「わかりません」

戦場ヶ原さんが授業でいつも教師に対応するように、その一言だけ答えた。戦場ヶ原さんの額に一筋の汗が流れた。あの兄貴に対して、まったく怯まなかった戦場ヶ原さんが。今、本気で相手を警戒していた。

「阿良々木くんにはそういう趣味があるのかな？」

「違う！ 誤解だ！」

兄貴がようやく首輪を外すことに成功したようだ。正確に言えば、現在分離できない俺まで殺害される可能性があるので、キスショットが逃げるチャンスくれたらしい。キスショットはノートパソコンを片手に、少し離れた場所で傍観していた。八九寺ちゃんは何故か、ビデオカメラで一部始終を撮影していた。

「さつき、犬として躡けてください、戦場ヶ原様って、私の靴を舐めながら、言っただじゃない」

もちろん嘘だが、実際にあり得そうな事を戦場ヶ原さんは口にしていた。どうやら、本性を出したらしい。

「嘘だ！ そんなこと言ってない！」

兄貴の絶叫を無視し、非常に冷めた目をした羽川さんが、戦場ヶ

原さんに再び、質問した。さらに、その場の空気が凍った。

「戦場ヶ原さんの家に休んでいる間のプリントを今届けて来たんだけど、学校に登録されていた住所と違ったよ」

「聞き間違え」

「その場で、学校に電話して確認したよ」

ああ、猫が鮫にバックドロップを放つ幻影が見える。鮫に大ダメージ。でも、すぐに復活。タフだなあ。

「登録ミス」

「一年から三年までの名簿全部に？」

「ええ、そうよ」

明らかに不自然だが、平然と戦場ヶ原さんは言った。まったく、気負いする様子はない。ここまで来るといつそ清々しい気がする。

「……阿良々木くんの中学時代の同級生に私の知り合いがいるんだけど、戦場ヶ原さん今日会った？」

「いいえ」

これ以上この会話が進めば、戦場ヶ原さんが文房具で脅して口封じする可能性が高い。その場合、誰かが怪我をする前に兄貴か、俺が止めなくてはいけなくなるだろう。できれば、ここは実戦担当を兄貴に代わって欲しい。俺の場合、勝算がかぎりなく、ゼロに近い

が、兄貴の場合、ノリで勝ちそうな気がする。

「何人か知り合いがいて、みんな同じ証言をしているんだけど、阿良々木くんに説明した方がいい？」

「必要ないわ」

猫が鮫を銚で刺し始めた。幻影だと分かっているのに、なんでもんなにリアルなのだろうか。飛び散る鮮血が生々しい。ちなみに、今、胃の再生回数が三桁に突入した。なんで、気絶できないのだろうか。

「で、阿良々木くんに何をしているの？」

「阿良々木くんは変態だから、趣味が特殊なのよ」

「うん、それは知ってる。だから、私は阿良々木くんを更生させるために頑張るの」

いつの間にか、羽川さんは距離を詰めていた。戦場ヶ原さんとの距離は約50cm。もし、ここで文房具が放たれたら、避けるのは難しいだろう。それに兄貴も気が付いたらしく、慌てて二人の間に割って入った。だが、たぶん、これはただの自殺行為に過ぎない。なぜなら、戦場ヶ原さんなら、躊躇なく兄貴ごと刺すからだ。

「二人とも、喧嘩は止めよう」

「犬は黙りなさい」

「阿良々木くん。間違ったことはちゃんと正しくしないと駄目だよ」

ギロツという効果音が聞こえてきそうな雰囲気だった。スーパー阿良々木ブラザーズも今日までらしい。兄貴の女性関係の諸事情に巻き込まれて死ぬ弟って非常になさけないポジションだよな。現実逃避は唐突に鳴り始めた兄貴の携帯の着信音で遮られた。軽く、二人の方に断ってから、兄貴は電話に出た。

「阿良々木です。ん？ ああ、久しぶり。え？ 同窓会の出席？ あ、悪い。忘れてた。えーと、出た方がいいのか？ 女子の人数増やすため？ は？ ああ、わかった？ 行く。参加でよろしく。また、後で掛け直すよ」

急いで兄貴は電話を切った。通っていた中学校の同窓会の出席確認だった。相手に悪気があったわけではないのだろうが、タイミングが悪すぎた。兄貴を餌にすれば確かに、女子の参加人数は増えるだろう。ただし、胃に穴が開く人が続出するのは決定事項だ。まあ、それ以前に目の前の修羅場で兄貴が死亡する可能性も十分にあるのだが……

「ごめん。番号登録してなかったから、誰かわからなかった」

申し訳なさそうに兄貴は頭を下げた。たまに、警察関連の人からうちの妹に関して電話がかかってくることがあるので、一応、応対することになっている。この地域の警察の方々には色々お世話になっており、たまに相互援助などをしているので、助かっている。今度、また、挨拶に行くべきだろう。

「戦場ヶ原さん。後で「お話し」しようか？」

「ええ」

ただいま、同盟が成立しました。たぶん、兄貴にはあの幻影が見えていなんだろうなあ。あの戦うことを止めて、握手をして、なんか共同戦線を構成する合意をしまった猫と鮫の幻影が……あ、でも、なんか鮫が腹黒い笑みを浮かべている。

「えーと、アレはな。キスショットに嘘言った罰なんだ。それに戦場ヶ原が悪ノリしただけだから、別に僕にそういう趣味があるわけじゃないし、戦場ヶ原が変なわけでもないから」

下手な説明をどうも。ついでに、今、キスショットと八九寺ちゃんがこの修羅場を生中継でインターネットに流しているのが見えた。あのパソコンはどっから出したのだろう。あとどうやって、ここでインターネットに接続したのだろうか。

「どんな嘘かな？」

「奏が浮気したって嘘。僕が奏に殺されかけてたから、自己防衛」

別に殺す気はなかった。ただ、アホ毛を切り落として、アニメに代わりに登場しようかと考えていたぐらいだ。さすがに、家族に泣かれるのは嫌だしな。

「それは、キスショットさんに謝るべきだよな」

幼い子供を諭すように羽川さんはそう言った。それに兄貴は頷いた。あとで俺が正式に謝罪させれば済むことなので、後回しにした。さらに兄貴の弁解は続く。

「あと、戦場ヶ原さんはちゃんと謝るべきだよな」

「それは、まあ、たぶん、無理だし、別にいいよ」

兄貴はやっぱりと否定したのだが、完璧な善人である羽川さんがそれを許さないだろう。それは兄貴も当然理解している。

「戦場ヶ原は感情表現が不器用で、極端だから、普段からこんな感じだと思っぞ。まあ、まだあんまり話してないけど」

兄貴は戦場ヶ原さんに同意を求めたが、戦場ヶ原さんは無視した。ただ、ほんの僅か、視認できるかどうか否かというレベルで彼女の瞳が揺れた。

「ふーん、よく見ているんだね」

感心したように羽川さんが言った。超絶が付くほどの鈍感だが、恋愛関係以外の他人の感情の機微には兄貴は非常に敏感だ。そして、優しすぎる。兄貴は仮に付き合っていくには度々命の心配をしなくてはならない相手でも、隔たりなく接することができる。これが俺の兄貴、阿良々木暦だった。

「羽川は、結構、戦場ヶ原と似てると思っぞ」

「んん、どういふことかな？」

性格にはかなり違うと思うが兄貴は何を根拠に二人は似ていると言ったのだろうかと普通なら、思うだろう。しかし、この二人は似ている。戦場ヶ原さんは「怪異」の影響で周囲と隔たりを作っている。

た頃の兄貴と、羽川さんは演じて周囲を欺いていた頃の兄貴と似ているのだ。つまり、人上手く接することができない。その点が似ているのだ。

「戦場ヶ原は我慢しない直球タイプだけど、羽川は我慢し過ぎるタイプ」

「え、私、我慢なんかしてないよ」

ちよつと、驚いたように、羽川さんは否定したが、それはわかりやすい嘘だった。初めてキスショットと出会った事件で、兄貴も俺も、羽川さんが抱える黒い沼のような感情に気が付いた。事情はわからない。でも、羽川さんはナニかを抱え、それを必死に抑え込もうとしている。それは痛々しく、不気味で、悲しく、歪だった。

「私、そんなに感情表現下手かな？」

グイッつと羽川さんのほっぺたを摘み、左右に引っ張った。

「ふにゅ！ a k s d n a s d ; s a ! ?」

突然のできごとに羽川さんは変な声を漏らした。そのまま、兄貴はくすぐり攻撃に移行した。セクハラだ。完璧にセクハラだ。どさくさに紛れて胸を触っている時点で確定だ。

「完璧な善人なんていないぞ。なれないし、いない」

視界を共有しているため、兄貴の表情は見えない。でも、どういう表情をしているか容易にわかる。俺がキスショットと兄貴のために自殺しようとしたのを止めてくれた時と同じ、少し怒った、でも、

優しさを含んだ表情。

「無理するなよ。羽川」

ポフツという音が聞こえて、兄貴は羽川さんの頭を撫でていた。それはよく妹を叱るときにする仕草だった。

「いつでも、相談に乗るから」

出たあ、と大声で叫びたかった。これが「百人斬りの童貞野郎」と呼ばれた兄貴の真骨頂だ。本人はまったく意識していない。天然のキラー。無意識のうちに数々の修羅場を巻き起こしたトラブルコーラー、阿良々木暦。

「……阿良々木くん」

羽川さんなら、無理にでも、拘わろうとするだろう。兄貴はそれをしない。相手に手を差し伸べるが、それをどうするかは、相手の選択に任せている。それは大きな違いだ。

「戦場ヶ原もな。八九寺が見えていないなら、隠さずそう言ってくれよ。もう、一度経験したことは変えられないし、たぶん、これからそういうことと、僕たちは付き合っていくしかないんだから」

吸血鬼もいるし、僕は「合わせ鏡」だしなと兄貴は笑った。よく考えてみれば、身近に普通の人っていないな。超人だったり、人外だったり、ツンデレだったり。

「この前の借りはお互いに何かあったら相談するってことで、チャラ。それでいいか？」

「お安い御用よ」

即答だった。戦場ヶ原さんらしい、躊躇いの無い、はつきりとした返事だった。

「八九寺って、あの可愛い子の事かな？」

「ああ、大きなリックを背負ったって……おい！？」

ようやく撮影されていることに気が付いたらしい。兄貴はビシッとそちらを指差した。俺としてはなんで、羽川さんは八九寺ちゃんが見えるのか気になる。戦場ヶ原さんとの違いはなんだろうか。

「なんじゃ？」

キスショットはパソコンに何かを頻りに打ち込んでいる。なんとも奇妙な光景だった。

「何してんだ？」

怪訝そうな兄貴に対し、八九寺ちゃんが答えた。

「二人の女性がイヤラギさんを取り合っている映像を、キスショットさんのブログにアップしてます」

「なんだ、その性犯罪者みたいな名前は！ 僕の名前は阿良々木だ」

「失礼。噛みました」

「違う。わざとだ」

「神喰った」

「嘘じゃない！」

八九寺ちゃん是谁とでもあのやりとりをするらしい。あの、神喰ったってどんな幽霊ですか。一番気になるのは、キスショットがなんでブログなんて作ってるんだ。おまえは500歳以上の吸血鬼でしょうが。

「むっ！？」

キスショットが突然呻いた。何があっただ。

「炎上した！？」

早いな。さつきから数分しか経ってない。

「阿良々木暦の知人らのコメントで僕のブログが、炎上した」

「ふざけんな！　おい！　何投稿しているんだ！」

「変態観察日記じゃ」

兄貴が絶叫した。おい、キスショット。さすがに逃げた方がいいぞ。この男たまに神の領域に到達するから、何するかわからないから。聞こえてないけどさ。俺も早く念話覚えよう。

「誰じゃこの「夢は暦お兄ちゃんのお嫁さん」とやらは、執拗じやのう」

ソレはたぶんうちの妹ではないはずだ。ただ、なんか凄い聞き覚えがあるな、今のハンドルネーム。誰だったかな。キスシヨット。後でお前の私生活について、話そうな。一晩中。

「阿良々木くん。ちょっと、今いいかな？」

「そういえば、まだ、あなたにホッチキスの芯を打ち込んでなかったわね」

八九寺ちゃんを親御さんの元に送り届けるのはもう少し先になりそうだ。

ひたぎシャーク 006 (後書き)

八九寺は難しいです。違和感ありますか？

ひたぎシャーク最終話

愛とは奪い、独占するものであり、手段を問わず、迅速に手に入れ、妨害を滅殺すもの。浮気には残忍な死を。離れぬよう鎖による束縛を。死体は朽ち果てるまで愛撫を。最後の時に手を汚すのは自分たれ……………はいはい、ヤンデレヤンデレ

スーパー阿良々木ブラザーズに関して一言述べるとすれば、それは異常にトラブルに巻き込まれやすいことだろう。

妹を助けるために、暴走族と戦って、その後、和解して友人になったとか

クラスメートを助けるために、奮闘したり

何故か、地元で喧嘩が一番強いと噂され、挑まれたり

助けた女の子が極道さんの娘で、事務所に呼ばれてお礼言われて、心臓に悪かったり

兄貴の女性関係のトラブルで襲われそうになったり

兄貴の女性関係で喧嘩に巻き込まれたり

兄貴の女性関係で修羅場に巻き込まれたり

兄貴の女性関係で「戦争」に巻き込まれたり

兄貴の女性関係でストーカーされたり

兄貴の女性関係でシヨタコンに襲われそうになったり

兄貴の女性関係で「百人斬りの童貞野郎」と呼ばれたり

兄貴の女性関係で大勢と戦うことになったり

兄貴の女性関係で警察のお世話になったり

兄貴の女性関係で刺されそうになったり

兄貴の女性関係で刺されそうになったり

兄貴の女性関係で刺されそうになったり

兄貴の女性関係で刺されそうになったり

兄貴の女性関係で刺されそうになったり

兄貴の女性関係で刺されそうになったり

兄貴の女性関係で刺されそうになったり

兄貴の女性関係で刺されそうになったり

……つまり、毎回兄貴の女性関係で盾にされた俺が刺されそうになったということ

「アレ、俺ってもしかして物凄く不幸？」

今更ながら、自分はよく生きているなと改めて思い直した。普通、死んでいると思わるような状況でよくここまで生き延びたモノである。

「キスショットがいるのに、不幸か？」

「俺、幸せだ」

暫し、自分は物凄く運が悪いのではないかと思ってしまったが、キスショットという世界最高の彼女がいる俺は世界一幸せな存在であることを思い出した。

「ごめん。ちよっと、憂鬱になってた」

「じゃあ、前向きにこの状況をどうするか考えよう」

兄貴の指摘により、思考回路が現状に戻された。現在、ジョジョに出てきそうなスタンド使いが二名目の前にいる。兄貴には見えていないようだが、俺にはでかい猫とジョーズ並の大きさの鯨が先ほどからずっと、見えている。前者が羽川さんのスタンドであり、後者が戦場ヶ原さんのスタンドである。なお、キスショットの余計な一言により、同盟が成立。双方のターゲットは兄貴に変更している。したがって、分離できない状態にある俺も非常にピンチである。吸血鬼の再生能力でも、たぶん確実に死ぬ。いろんな意味で。

「キスショット。恋人のピンチだぞ」

唯一対抗できる可能性を持っている俺の恋人に「表」に出ていない俺の声は聞こえない。吸血鬼の能力である念話が使えれば意思疎通が可能になるのだろうが、まだ習得していない。当の本人は炎上してしまったブログの修復作業に没頭しており、恐らく、ハンドルネーム「夢は暦お兄ちゃんのお嫁さん」と何やらインターネット上で話しているようだ。愛の力で気がついて欲しいというのは欲張り過ぎか……

「八九寺ちゃん。助けてー」

幽霊になら聞こえるかもしれない最後の希望にかけてみたが、無駄だった。ビデオカメラが気に入ったらしく、相変わらずこの修羅場、もといスーパー阿良々木ブラザーズの危機を嬉々として撮影している。案外、Sの気があるのかもしれない。

「そう言えば、なんで八九寺ちゃんは戦場ヶ原さんには見えないで、羽川さんには見えるんだ？」

ふと、気になった疑問を口にしてみた。それに兄貴がよっしゃあと言わんばかりに飛び付いた。さすがに、この超ド級の鈍感野郎でも、生命の危機には敏感だったらしい。

「なあ、羽川。なんで、八九寺が見えるんだ？」

「え？ 何の話？」

怪訝そうに羽川さんが訪ねた。まだ、羽川さんは八九寺ちゃんが幽霊だということを知らないので、当然の反応だった。

「アイツは幽霊で戦場ヶ原には見えないらしい」

「とうとう、頭のネジが狂ったのね」

そう非常に淡白に戦場ヶ原さんが言った。羽川さんまで信じてしまったらしく、憐みの籠った眼差しでこちらを見ている。

「おまえがさつき視えないって言ったんだろうが！ それにキスシヨットが保障してるだろうが！」

「勝手に記憶を捏造しないでちょうだい」

「僕がメモ渡した時も受け取らなかっただろうが！ アレ実は見えなかっただけだろ！」

「あなたに汚染されるのを防いだけよ」

「僕は病原菌か！？」

「ええ、存在そのものがセクハラよ」

口論では勝てないと悟ったらしく、兄貴は羽川さんにアイコンタクトで助けを求めたが、首を振られた。兄貴がセクハラ魔人であることは誰も否定できない。本気で兄貴は落ち込んで、道路の隅で座り込み、意味不明なことを呟き始めた。いつも通り、約十秒で復活したので心配などしなかったが。

「で、話し戻すけど、八九寺は幽霊らしいんだ。…………あのーキスシヨットさん。何をしているのでしょうか？」

兄貴が思わず敬語を使ってしまった。それに釣られて後の二人も振り向いた。

「供養じゃが、何か？」

中世ヨーロッパにできそうな馬鹿デカイギロチンが道路の真ん中に鎮座していた。八九寺ちゃんが枷で拘束されており、処刑目前という様子だった。もちろん、ここは田舎町とはいえ、現代日本であり、道路のど真ん中で公開処刑など許されていない。それも幼い女の子ならなおさらだ。

「供養じゃねえ！ 死刑じゃなか！」

兄貴が絶叫し、慌てて羽川さんが走り寄り、八九寺ちゃんの拘束を解き始めた。戦場ヶ原さんにはたぶん、ギロチンしか見えていない。

「幽霊は成仏するのが、普通じゃろう？」

何を馬鹿な事をとキスショットは言った。正論なのだが、もう少し方法を考えて欲しい。せめて、先にご両親に合わせてあげべきだ。

「キレルぞ」

「儂相手にか？」

ジリと肌を焦がすような妖気が道路を満たす。キスショットは手加減しているのだろうが、相手が普通の人なら吐いていそいだ。キスショットの眷属である俺もたぶん逆らえない。羽川さんと戦場ヶ

原さんの顔色が一気に悪くなり、八九寺ちゃんがグロッキーになっている。

「吸血鬼の儂が言うのも変じゃが、うぬは立派な化け物じゃ」

動じない最強の我が兄に、キスショットがそう言い殺気を解いた。

「昔、いろいろあつてな。極道の皆様方とたまに飯食いに行つてたら、殺気に慣れた」

組長の娘さんを助けた事件以降、たまにお世話になっている。割といい人たちだった。ただ、一名ガチホモが混ざっているのが悩みの種だ。一番怖い。下半身的な意味で。

「阿良々木くん。普段何しているの？」

思わず羽川さんがそう問いだしてしまったのも無理も無い。

「いろんなこと」

この男の場合、主に女性関係です。

「おーい、八九寺、大丈夫か」

ペシペシと頬を軽く叩くと八九寺ちゃんが元に戻った。

「変態です！」

「お前がな」

「臭いです」

「酷エ！」

と言いつつも楽しそうなやり取りだった。悪意がお互いに無いからだろう。

「で、おまえ幽霊なのか？」

「ええ、そうですよ。その金髪さんは吸血鬼でいらっしゃるように、私は「蝸牛」です」

素直な答えだったが、幽霊ではなく、蝸牛とはどういう意味だろうか。

「蝸牛？」

兄貴も意味が分からなかったらしい。キスショットも知らんと目線で言ってきた。最近、登場しない専門家を呼びに行くのは無駄な時間がかかるので、本人に問いだした。

「……じゃあ、おまえはそれからずっと迷っていたのか？」

八九寺ちゃんが話し終わり、兄貴はそうポツリと呟いた。

重すぎる話だった。

今から、約十年ほど前、当初はとても仲の良かった夫婦が、長いドロドロとした争いの末、離婚することとなった。子供では正視できないような争いの後、一人娘は父親が引き取ることとなった。

母親は二度と一人娘と合わないよう半ば強制的に誓わされた。

家族だから、愛していたから、好きだから、血が繋がってるから、そんなことは関係を永続的にする保障にはならない。

目に見えないから、簡単に壊れてしまう。

ガラスよりも脆い。

時間が風化させる思い。

冷めた関係。

なんて、無意味な絆。

苗字が変わり、成長した少女は恐ろしくなった。自分の母親の顔が思い出せない。かつての温もりも、声も、思いも、何もない。隠し持っていた写真は実感をくれない。

迷惑ですか。

忘れましたか。

嫌いですか。

でも、会いたいです。

だって、私は二人の愛の結晶の証でしょう。なら、その愛が無くなったら、私はどうすればいいのですか。

この顔も、この声も、この髪も……

みんな半分ずつ貰ったのに

そして、五月の第日曜日、母の日に該当するその日に、少女は誰にも告げることなく、母の住居を直指して、家を出た。その手には、目的地が描かれた住居をメモを握りしめて……

そして、信号を無視した自動車に轢かれ、目的地にたどり着くことはなかった

その直後に「蝸牛」が生まれた。それが今の八九寺ちゃん。

「どけ」

キスショットが妖刀心渡りを取り出した。

「せめてもの、慈悲じゃ。痛みを感じることも無く、楽に逝かせてやろう」

キスショットの技量ならそれが可能だろう。幽霊なら、成仏するべきだろう。きっとそれが自然の摂理なのだろう。

「なあ、キスショットは、嬉しかったか？」

「なんじゃ？」

「奏に助けられて、幸せだったか？ 嬉しかったか？ 暖かったか？」

ギリギリと兄貴の齒が鳴る音が俺にも聞こえた。これは本気でキレている証拠だ。

「コイツさ。俺に初めて会った時、なんて言ったと思う？」

キスショットではなく、全員に聞いていた。ポンと八九寺ちゃん頭の頭に手を置いている。

「ロリコン」

「性犯罪者」

「変態」

「道をお尋ねしたいのですが？」

上から、キスショット、戦場ヶ原さん、俺、羽川さんという順番だ。兄貴に大ダメージ。さすがに今回は凹んだ。まともな回答は羽川さんだけだった。まあ、すぐに復活するし、したので問題ない。

「あなたのことが嫌いです。分かるか、幽霊だから、生者とは拘われないから、コイツは自分からそう言ったんだよ。助けて欲しいのに、そう言えない。なあ、キスショット。おまえならわかるだろ？」

キスショットは無言。兄貴は続ける。

「いいじゃねえか！ 最後くらい、我がまま言っても！ ちくしょ

う！ 八九寺は何も悪くねえのに！　なんで、家にいつまでも着かない！」

兄貴が珍しく本気でキレていた。

「魔女の宅急便」

非常に有名な映画のタイトルをキスショットは口にした。

「ヒントじゃ。有り難く思え」

パチンと指を鳴らすと、短刀を何も無い空間から取り出した。握りと鞘が木製の見事な一品だった。妖刀心渡りと俺の三日月と同じ種類の武器である証拠にキスショットの妖気が刃の部分に漂っていた。「怪異」を殺せる類の武器。

「うぬの失敗で、奏の手を汚すことは許さん」

無理矢理その短刀を兄貴に握らせ、キスショットは翼を生やすと飛び立とうとした。その背中に兄貴が呼びかけた。

「弟を幸せにしてくれて、ありがとう。いつも感謝している」

ヒラヒラとキスショットは手を振ると、空に消えた。たぶん、帰ってブログを直すのだろう。

「んじゃ、行くぞ、八九寺」

「どこにですか？」

「もちろん、おまえのお母さんの家」

「今まで、できませんでしたよ」

ここで言うべき、セリフはもう決まっている。

「大丈夫、今の僕は……」

ここで、うまく俺が「表」に出て、美味しい場面を奪った。

「スーパー阿良々木ブラザーズだから」

そして、翼を出そうとしてある問題に気が付いた。バランスの問題から、乗せられるのは二人が限界なのだ。右に一人と、左に一人。今の俺の能力ではたぶんそれが限界であり、重量オーバーになれば途中で堕ちる。地上から見えないようにある程度高度を上げることが考えれば、安全面から、二人が限界となる。つまり、戦場ヶ原さんが羽川さんのどちらにはここで別れてもらわないといけない。

「羽川、悪い。戦場ヶ原が道案内に必要なんだ」

事情を説明すると兄貴が「表」に出て、羽川さんに謝罪した。

「うん。わかった。私もそろそろ帰らないといけないから」

長い話だったため、かなり時間が過ぎており、もう夜だった。吸血

鬼の能力を最大限使える。

「ねえ、阿良々木くん。ひとつ聞いていい？」

「ん？」

「私が助けてって言ったら、どうする？」

「そりゃあ、助けるよ」

即答した兄貴に羽川さんが本日一番の笑顔を見せた。以前見た、あの人形染みた嗤いではなく、普通の女の子の笑顔だった。

「どうなったか、ちゃんと教えてね。また、明日学校で、遅刻は駄目だよ」

そう言っ、羽川さんはその場を去った。

この瞬間がこの「戦争」の勝敗を決定したのかもしれないと後になって俺は思ったことをたまに思い出す。

「よし、奏！ 準備頼む」

「あいよ」

「ちょっと、待って」

入れ替わろうとすると兄貴は戦場ヶ原さんに呼び止められた。

「一言いいかしら？」

今度はどんな暴言が来るのだろうかと兄貴は楽しそうだった。何だかんだで、兄貴はこの会話を楽しんでいるのだ。Mカッコイイからだろうか。あまり、理解したくない快感だがと思っていたのだが、戦場ヶ原さんの攻撃はまさに電光石火だった。ライバルが誰もいない一瞬を狙った、精密な一撃。

「I LOVE YOU」

と流暢な発音でそう兄貴に告白したのだった。

「おめでとうございます」

八九寺ちゃんが空気を読まない讃辞を述べた。俺と兄貴はただ、呆然とするしかなかった。このタイミングでいきなりかというのが直な感想だった。スゲーストレート。これが戦場ヶ原さんのスタイル。

「魔女の宅急便、スーパー阿良々木ブラザーズバージョン逝きまーす」

八九寺ちゃんと戦場ヶ原さんを翼に寄せ、俺は夜空へダイブした。高度が上がるに連れて頬を撫でる風が心地よかった。兄貴はさつきから、無言。どう返事するか考えているようだ。半月が空に浮いており、町の明かりが夜を彩っていた。

「着地よろしく」

「はい？」

いきなり、兄貴がそう言い「表」に出てきた。俺は吸血鬼で、兄貴は人間だ。つまり、兄貴は空を飛べない。したがって、全員落下することになる。

「のわあああ！？」

八九寺ちゃんが女の子らしくない悲鳴を上げた。戦場ヶ原さんは叫ばない。驚いた顔で兄貴を見ている。現在進行形で落下中。分離できない俺も落下中。

「戦場ヶ原とさ、話すのは本当に楽しい。三年になる前からもっと話したかった」

この状況でピンク色の空気を醸し出す兄貴は、なんというかもう、最高だ。ちなみに地面まであと三十秒。

「私も、もっと、あなたと話したい」

それに答える戦場ヶ原さん。

「本気だよな？」

「それが分からないようなら、あなたを殺して、私は逃げるわ」

「ただの殺人じゃん！ おまえも死ねよ！ てか、このまま無理心

中
」

「幽霊になりそうね」

アホなこと言っていないでさっさと決めろ。地面まであと二十五秒。ずっと、兄貴は戦場ヶ原さんに手を伸ばした。

「流行るといいな」

「はい？」

地面まで、後二十秒、八九寺ちゃんが物凄い悲鳴上げてます。本当に無理心中するかも。

「戦場ヶ原、蕩れー」

兄貴の答えは決まったらしい。戦場ヶ原さんの嬉しそうな笑みは彼女がいる俺でも惚れそうぐらい、綺麗だった。

「おめでとつ」

陳腐で、単純で、くだらないが、心の底から兄貴に告げた。戦場ケ原さんなら兄貴の強さについて行けるだろう。いや、そうあって欲しいとそう願った。

「奏！ GO！」

「YEAH！」

入れ替わり、翼で落下中の二人をキャッチし、もう一度高度を上げる。なんか、負けた気がする。たぶん、人類初だろう。夜空を飛びながら告白する高校生は。さすが兄貴はレベルが高い。ホストやれば、儲かるだろうな。

「あの辺よ」

しばらく飛んだ後、戦場ケ原さんの指示に従い降下した。道路に降り、目的の住所を探したが……

「…こんなことって」

兄貴が呆然と漏らした。

更地

区間整理による解体

何も無かった

「エグッ」

八九寺ちゃんが泣いていた。

「ヒクッ」

八九寺ちゃんが泣いていた。

「ウウッ」

八九寺ちゃんが泣いていた。

「ただいま。帰りました」

そして、消えた。

「奏。おまえ、物質創造能力使えるか？」

「少しだけ」

「花頼む」

「了解。ちょっと、季節外れだけど」

入れ替わり、侵入禁止と書かれた柵を飛び越え、俺はかつて家が
あったであろう場所に手伸ばした。イメージした。

満開のひまわりを。

笑顔がよく似合う少女への贈り物。最後まで魔女の宅急便らしく
決めないと。

「ありがとな」

「お疲れ様」

お互い労い合った。いつものやりとりだった。

「中々カッコ良かったわよ」

戦場ヶ原さんから褒め言葉が出た。そして、戦場ヶ原さんの家
まで夜空のランデブーと何度かの新カップルのスカイダイブの後、
公園に放置していたマウンテンバイクを回収し、俺と兄貴は帰路に
ついた。

「おめでとう。兄貴」

「サンキュー」

「なあ、兄貴。今度八九寺ちゃんの墓参り行こうか？ 探せば見つかるだろ珍しい名前だし」

「明日放課後行くか？」

「OK」

という約束を交わして、翌朝、国語が一段なので、俺が「表」の状態で自宅を出たら、なんと成仏したはずの幽霊が道路を歩いていた。

「アレ？」

「なんか、間違えた？」

入れ替わって見たが、兄貴の視界でも見えた。

「あ、エロキャラさん？」

「なんで、俺まで兄貴みたいな性犯罪者になってるの！？」

「失礼。噛みました」

「絶対嘘だ！」

「鴨ました」

「オレオレ詐欺かよ！」

小学生の詐欺師とかいたら嫌だぞ。兄貴に代わったら同じようなやり取りとしていた。どうやら、本物らしい。

「なんと、私、阿良々木さんたちのおかげで、二階級特進して、浮遊霊になりました！」

どこでも身分社会ってあるんだなと現実逃避気味にそう思った今日のこの頃。

「私、しばらくは、この辺りをうろつろしていると思いますから、見かけたら話かけてくださいね」

まあ、知人が死んでいるよりは生きている方がいいので、これはきつとハッピーエンドなのだろう。なんか、意味が違う気がするが……

「あのさ、雨で困ったりしたら、この廃墟に行くといいよ」

キスショットの住居の場所を八九寺ちゃんに俺は教えた。

「寂しがり屋で不器用で優しい吸血鬼がいるからね」

また、今度会っだろう。

で、今回のオチだが、羽川さんは兄貴に戦場ヶ原さんが告白したことを知ったらしく、しっかり「お話し」したようだ。何故か羽川さんに対してのみ、やたらと低姿勢な戦場ヶ原さんの姿が目撃されるようになり「ご主人さま」や「脅し」「怖い」「虐め」と言った聞き逃せない単語が聞かれるようになった。

つまり、あの「戦争」は終わったわけではなく、継続中だということであり、兄貴に彼女が出来ても、女性関係でトラブルは起きる。

だから、また、俺はいつものように、刺されそうになるのだろう。

これが我が家の日常。

ひたぎシャーク最終話（後書き）

ここまで、読んでくださった読者の皆様に心より感謝を申し上げます。

ひたぎシャーク編はこれで完結です。正直、ここで終わってもいいかなと思っています。できれば、続けたいと願っていますが、それは読んでくださる読者様がこのような駄文を許してくださいるか、私が決断しないといけません。

よい、夏をお過ごしください。一言感想をいただければ嬉しい限りです。

幕間（前書き）

遅くなってもうしわけありませんでした。更新再開です。今回は幕間です。

幕間

これは怪異などとは関係の無い話であるが、一応話しておこう。

阿良々木暦という人間は基本的にはヘタレである。たまに無駄に強かったり、カッコ良かったりするが、基本はただのエロ青年である。まあ、つまり、阿良々木暦は基本的にはただの変態だということだ。そんな認識の元に行われたくだらない兄弟の会話だ。

「兄貴ってさ、結局どんな女の子が好きなんだ？」

「どうしたいきなり？」

弟が机で宿題をやっているのを見ながら、ベッドでグラビア雑誌を読んでいる馬鹿兄貴にそう聞いた。分離できるようになってからだいふ怠け癖が付いたような気がする。アホ毛をピクピクを揺らしながら雑誌を呼んでいる兄貴は気の抜けた犬のようだ。

「戦場ヶ原さんって彼女がいるのに、他の女性に興味を持つのは失礼だと思う」

この前、告白されたばかりなのに、どうしてそんな雑誌を読んでいるんだろうと疑問に思う。なんというか、恋人に対して失礼ではないか。

「奏は興味無いのか？」

「キスショット以外は無いね」

そもそも暗示でキスショット以外には欲情できない体になっている。日常生活に支障が無いから特に気にしていないけど。

「男として最低だな」

兄貴は侮蔑するようにそう言った。基本的に下心の塊の様なこの男にそう言われるのは心外だった。だが、兄貴にとっては重要な事項だったらしく、雑誌を放り投げ、こっちによってきた。

「兄として言うぞ」

珍しくシリアスな表情だが、語る内容は恐ろしく馬鹿だ。

「異性に興味を持たないのはおかしい」

「そりゃそうだ」

「だから、僕はノーマルだ」

世間一般的に見ればそれは正しいのだが、兄貴が言うとなぜか変態的に聞こえる。どうしてだろう。

「そして、これは男性として当然の行為だ」

「ベッドの下に隠してある本も？」

「それは宝」

この部屋にはいくつか特定の隠し場所があり、そこに兄貴は買集めた猥褻な雑誌を隠している。以前、一度まとめて廃棄処分したのだが、いつの間にか復活していた。

「たとえば、羽川だ。僕が保障する絶対にアイツは巨乳だ。着痩せするタイプ」

聞いてもいないのに、勝手に話し始めた。拳をグツと握りしめ、兄貴は熱弁をふるう。

「キスショットはもう日本人じゃ絶対に無理な領域だな。知人内一位だ」

よし、殺す。人の恋人を普段どういふ邪な考えで見ているのか、よく分かった。これはさすがに許さん。

「……戦場ヶ原さんは？」

「僕の中では3位」

阿良々木暦という人間は超がつくほどの鈍感である。それは人間の機微や恋愛感情、そして、気配に対して恐ろしく鈍い。そう、だから、今キスショットと一緒に室内に入ってきた戦場ヶ原さんのことなんて絶対に気が付いていない。自分の耳がホツチキスで挟まれそうな状況にあることも気が付いていない。

「恋人なのに、3位？」

「譲れないモノぐらいある」

背後の戦場ヶ原さんがもう片方の手にカッターナイフを握りしめているのが見えた。これは兄貴の命日だろうなと密かに確信した。無表情でも瞳は激怒。ヤンデレとツンデレのハイブリッドである戦場ヶ原さんに今更言い訳なんて意味が無いだろう。

「キスシヨットはいつだって俺の一番だから」

「うむ」

満足そうにキスシヨットが頷き、兄貴が驚いて振り返った。そして、ソレを目撃した。

「あ、あああ、え、えーと」

「イカ臭い部屋ね」

「誤解を生じるような表現禁止！」

「あらあら、別に嘘は言っていないわ。恋人が第3位の阿良々木君」
ビクリと兄貴の肩が震えた。さすがにこの男でもこの状況から逃れる方法は思いつかないらしい。

「キスシヨットさんと途中で会ったから、一緒に来たの。恋人として、部屋ぐらいは確認しないとねえ、羽川さんのおっぱいが好きな阿良々木君」

僕とキスシヨットは無言で窓に向かった。前日見かけた巨大な鯨のスタンドが見え始めたのでそろそろ緊急回避しないとこちらの身も危ない。兄貴がアイコンタクトで助けを求めてきたが無視。自業

自得だ。

「ふーん、眼鏡の委員長さんが好みなのね」

兄貴の猥褻な雑誌を隠し場所から取り出し、戦場ヶ原さんは中身を確認し始めた。そのうちの一冊には「眼鏡委員長特集」と書かれており、逆鱗にふれたらしい。

「これ羽川さんに見せたらどうなるのかしら？」

「ちょ、待て」

「もう遅いわ、写真をメールで送ったから」

これで、明日から羽川さんとの関係が色々と気まずいことになるな。再開するまでに兄貴が生存していればの話だが。

「あら、これなんかキスショットさんにそっくりね」

戦場ヶ原さんの袖からドバツと大量の文房具が落ち、床に散らばった。さほど広い部屋ではないので、かなり足の踏み場が無くなったことになる。

「……童貞風情が、いい度胸ね」

「童貞は関係ない」

「そうね、素人童貞だもの、阿良々木君は」

チキチキとカッターの刃が伸び、兄貴の耳たぶがホッチキスで挟

まれた。それを確認した俺はキスショットを抱き上げ、窓から飛び出した。後ろでこの世のものとは思えない悲鳴が聞こえたが、たぶん気のせいだろう。

「あれは死んだのう」

地味に辛辣なキスショットだった。

「こんな時間にどうした？」

いつもの廃墟の屋上に降り立って、キスショットに尋ねると、少し困ったような表情を浮かべてから、指を鳴らし、黒い大きな布のような物を取り出した。

「遅れたがのう、吸血鬼の象徴じゃ」

黒い布と思っていた物体にはよく見ると赤いリボンのような紐が付いており、それで調節ができるようになっており、首回りの部分は丁寧に編まれていた。

「これはマント？」

手作りの漆黒のマントだった。

「手作りじゃ。これを纏えば、夜下から視認されることはない」

「俺に？」

「うむ」

「スゲー嬉しい」

思わず抱きついてしまった。恋人からは三日月という鎖鎌を以前に貰っていたが、こう手作り感があるプレゼントはまた別格だった。

「着ていいか？」

「後ろを向け、儂がつける」

大人しくそれに従うと、マントが後ろから掛けられた。分厚い布だがさわり心地は良かった。ふと、気がつけば前髪が赤みを帯びていた。

「この髪は？」

「マントの効果じゃ。吸血鬼としての力が上昇する」

「ありがとう、キスショット」

まだまだ弱い俺の事を考えてくれたキスショットの愛情が本当に嬉しかった。そのまま、キスショットと夜明けギリギリまで過ぎた。

「兄ちゃんに彼女ねえ」

「お兄ちゃんに恋人ねえ」

翌朝の我が家の食卓は戦場ヶ原さんの話題で盛り上がっていた。昨晚、兄貴の悲鳴を聞き、何事かと妹達が部屋に乱入したらしい。困惑状態の二人に戦場ヶ原さんは堂々と自分が阿良々木暦の恋人で

あることを説明し、ご両親に挨拶をしにきたと平然と言い放ったそう
うだ。どういう理由か、乙女の直感か、妹達は戦場ヶ原さんを怪し
むことなく、リビングにいた両親の元へと連れて行き、穏やかに会
話を楽しんだそうだ。

その後、兄貴に何があったのか、外出していた俺は知らない。

ただ、あの日以来、兄貴の部屋から猥褻な雑誌が消えたことは間
違いない。

幕間（後書き）

更新が遅れて大変申し訳ありませんでした。頻度は落ちますがまた続けますのでこれからもよろしく願います。

兄貴と分離できるようになってから、時折一人で散歩に出かけるようになった。数週間前までは兄貴の許可を得て「表」に出る時だけが自分が肉体を持ち、血の通った生物なのだと実感できる数少ない瞬間だったことを考えると生活リズムの変化に加えて徐々に価値観が変わり、知識量が増えてきた気がする。活字から吸収する知識ではなくて、五感を通じて学ぶこと。例えば、緑に恵まれた地域に長年住んでいたけど、落ち葉を踏み締め、緑の匂いが周囲に充満しているのを感じたことがなかったとか、雨が服に染み込んで骨の髄から体が冷えるということを体感したことがなかったとか、普通の人から見ればごくごく当たり前のことが新鮮で、有難かった。

人間じゃない化物として生まれてきてしまった。合わせ鏡の片割れとして

ザラついたコンクリートの塀には黄緑色の苔が生えていて触ると染み込むような冷たさを感じさせてくれる。緑の細い系の塊のような苔がコンクリートという固すぎる土台に付着し、生きている。視線を右に移すと、ジグザグにひび割れたコンクリートからたんぽぽが顔を覗かせていた。形だけ鋭利な歯を持ち、控えめな花を咲かすその姿が何故か尊く見えるほど気持ちのいい朝だった。

戦場ヶ原さんが蟹に行き遭って

八九寺ちゃんが蝸牛に出遭って

そして、俺が吸血鬼に魅入られて

そんな奇妙な事件が身の回りで立て続けに起こっていることを忘れさせてくれるほどの良い気候だったから、馴染み深い廃墟で目の前で忍野さんが自動販売機の取出し口に入れていた状態で挟まっていても特に不快に感じなくて済んだ。

キスショットが勝手に改造したのか廃墟にはいくつか家電製品があり、自動販売機までいつのまにか完備されていた。一缶100円のお得な自動販売機と菓子パンが買えるタイプの自動販売機の二種類があり、後者の取出し口に忍野さんの手は差し込まれて見事に引っ掛かっていた。

「やあ、弟君。何かいいことでもあったのかい？」

「……抜けないんですね？」

「そうだねえ」

気の抜けた表情で忍野さんは苦笑していたが大丈夫なのだろうか。以前に見た映画では確か自動販売機を破壊するか、腕を切り落とすかして脱出していた気がする。四つん這いの状態で左腕を限界まで伸ばした姿勢はそれなりに辛そうだった。

「手伝いましょうか？」

「うん。そうだね。頼もつかな」

少々乱暴だが吸血鬼の身体能力を利用して自動販売機を持ち上げ、

忍野さんの腕が抜け易いように垂直にすると簡単に取れた。手の感覚を確認している姿を見ると本当にキスショットの心臓を奪い取った人物には見えなかった。ただのアロハシャツの中年男性にしか見えない。

でも、忍さんは怪異関連の専門家で吸血鬼を殺す能力を持っている。

そのことを忘れないようにいつも心掛けている。何故、キスショットが忍野さんと同居しているのかは分からないが、この人はいつでも狩れる立場にいる。それが正直恐ろしいと思う。この人の得体のしれない空気が測り知れなくて、単純に逃げ出したいと時々思う。

「何もしないよ」

まるでこっちの心を見透かすように忍野さんが俺の顔を覗き込んでいた。接近されたことにまったく気が付かなかった。

「忍野さん。キスショットはまだ寝ていると思うんで、ちょっとだけ話をしませんか？ 怪異のことが聞きたいんで」

「いいよ。ちょっと歩こうか。いい天気だしね」

ペタペタと草履のまま忍野さんは先に外に出て行った太陽の光が射すことのないコンクリートの折の中から、眩い外へと、そして、振り返った。

「で、何から聞きたい？」

「忍野さんはキスショットを退治というか、殺す気はありますか？」

」

「無いよ。恋路を邪魔して馬に蹴られる気はないからね」

それは俺にも危害を加えることはないということと解釈してもいいのだろうか。忍野さんの胡散臭い表情からは何も読めなかった。

「それに僕じゃあ君のお兄さんに勝てないからね」

「え？ 兄貴は普通の人間ですよ」

「普通かい？」

「……女性関係以外は」

モテモテだもんねえと忍野さんは笑った。

「もしも、お兄さんと君の片方しか生きられないとしたらどうする？」

唐突にそんな質問を投げ掛けられた。逡巡し、正直に自分の答えを伝えた。それを忍野さんは特に動揺することもなく、貶すことなく、褒めることもなく、黙って頷いていた。何か面白いものでも見つけた無邪気な子供の用に。

「怪異はね。心の在り方に依存していると言っても過言じゃない。君たちの「合わせ鏡」もその例外じゃない」

要領の悪い生徒に言い聞かせるように忍野さんは淡々と言葉を紡いだ。

「人の心は移ろう。いつか必ず、少なかれ遅かれ。君はいつまで、人の寿命を超えてハートアンダーブレードを愛せるかな？」

まだあまり実感が無いが俺は完璧に人間を止めてしまった。吸血鬼もどき。最高位の吸血鬼の眷属に成り損ねた存在であり、出生時から怪異の産物だったモノ。

そんな化物がいつまで生きるのか？

怪異の専門家ではない自分に分かるはずもなかった。それでも、特に怖いとは思うことはなかった。

「もう、聞いているとは思いますが、この前八九寺ちゃんっていう幽霊の女の子にあったんですよ」

「ああ、迷子ちゃんね。聞いてるよ」

「その子が教えてくれたんですよ。人を好きになることは好きになるための努力を続けることだって。だから、関係が変わってもたぶん折り合いをつけて、キスショットのことが好きでいられると思います」

「そうかい」

そして、いつも通りのシニカルな微笑を浮かべたまま、忍野さんの姿がブレた。少なくともまるでデジタルカメラでの撮影に失敗した時の様に、姿が線を引き伸ばしたように見えた。

トンッ

本当に軽く肩に手を置かれた。それだけで視界が反転した。グルリと文字通り、柔道の一本背負いのように。何をされたかまったく理解できなかった。

「ちよつとだけ、運動をしようか」

「……はい」

パーカーに付着した芝生を手で払い、そのまま直進。右手を拳の形で突き出し、当たる直前に折り曲げ肘打ちに移行。上の方の妹から習った空手の応用技だ。それを忍野さんは難なく頭を右に振って避けた。

「怖いなあ」

右足を擦じり回し蹴りを放つ、胴の辺りを掠めるだけでアロハシヤツにすれ触れることができない。そのまま勢い任せに殴り掛かっても当たらない。

「これなら！」

左手を地面についてまま片手で逆立ちの姿勢、右手で地面を殴り、回転、吸血鬼の怪力が加わった回転蹴り。それを忍野さんはジャンプで逃れた。こっちの期待通りに。空中では身動きが取れない。そう思っていた。でも、それは俺がまだニンゲンだった頃の常識で空中に伸ばした手はまるで見えない足場があるかのように再度ジャンプした忍野さんに届かなかった。

「はい。御終い」

吸血鬼の視力でもまったく見えなかった。ただ、胸の辺りに押された感覚があり、気が付けば地面に倒れていた。

「いやー、弟君があんまりにも強いからこっちもヒヤヒヤだったよ」

息を全く乱さず、汗を掻くこともなく、平常状態の忍野さんがニヤニヤと笑っていた。

「君なら大丈夫。お兄さんにも勝てるよ。一回ぐらいなら」

「別に兄貴と本気で喧嘩することなんてないですよ」

たまに喧嘩をするがそれはあくまでも遊びの範囲であって、本気で俺と兄貴が仲違いをすることはない。少なくとも今までではなかった。

「近いうちに喧嘩するよ」

それは予言や忠告というよりも確信と事実を伝えているだけという調子だった。

全部が終わってから、この時忍野さんは俺のことを鍛えようとしてくれたのかもしれないとキスショットに打ち明けた。そうでなければ、あの忍野さんが、兄貴と同レベルのお人好しで平和主義者があんな行動をとるはずがないから。

こんなできごとがあった翌日から始まったゴールデンウィークに

俺と兄貴は羽川さんの家庭事情を知ることになる。本当に救いのない悲しい話だ。その痛みを羽川さんは抱え続けていた。そして、ちょっとした事件を契機にその痛みは、ストレスは、憎しみは、爆発する。

黒い翼を持つ、羽川翼として

それはキスショットですら恐れ、あの忍野さんですら敗北するほどの圧倒的な感情の奔流による復讐劇。

でも、この時羽川さんが抱えている闇よりも、兄貴の方が深淵の様な闇を抱いていて

ソレが暴れ始め、全てを食い尽くした時が俺と兄貴の絆の、長年の兄弟としての在り方の崩壊の始まりだった。

めめブラジャー 001（後書き）

私生活で身内に不幸があり、執筆作業が停滞していましたがようやく筆をとることができました。感想やメッセージを下さった読者の方々のお力がなければ、再び投稿することはできませんでした。本当にありがとうございます。

オリジナル、二次創作双方本日より全力で再度作成をしますので何卒これからもよろしく願います。

春休みが過ぎ、新学期の空気に徐々に慣れ始め、陽気が心地よい四月二十九日にあの救いようのない事件は起こった。その日の午前中は幸い時間があつたので、キスショットが住居にしている廃墟の掃除をしていた。窓がベニヤ板で塞がれているため、換気することができなかったが、キスショットが一番上の階で寝ている間に腐食が進んだ板を取り外し、室内の清掃を行っていた。

普段あまり室内を散策することはなかったが、改めてよく見ると学習塾として機能していた頃の名残がまだ顕著に残っていた。教室内に残されているのは小中学校で頻繁に見かける学習机が横に五列、縦に四列並んでいる。正面に大きな黒板と教壇。床はコンクリートが剥き出しだが、昔はそれなりに大きな学習塾だったのだろう。壁には不良による落書きもなく、カビとシミ以外は比較的綺麗なままだった。

ちょうど、二階の清掃を終え、三階に移ろうとしていた時だった。兄貴に強制的に分離を解除され、視界がブレ、兄貴と視界を共有する。この瞬間嫌でも兄貴と俺の力関係では兄貴の方が上だと思いきらされる。ただ、そんな感傷に浸る暇もなく、羽川さんの姿が視界に入った。

羽川翼。委員長。完璧な成績を誇る超人。兄貴と俺の秘密を知る人。

そんな彼女の顔の左半分はガーゼで覆われていた。その姿はあまりに痛々しく、普通に微笑んでいる羽川さんが一層痛々しさを際立たせていた。

「後で説明するから、奏の血で治してくれ」

「分かった」

吸血鬼もどきの血液には治癒効果がある。些細な傷なら簡単に、一瞬で塞いでしまう程度の万能性を備えた不老不死の特権。それは他人に塗布することで効果を発することができる。ただし、使いすぎると吸血鬼化する。

「羽川。ガーゼ外して」

「うん」

白いガーゼの下にはまだ血を滲ませた切り傷と青黒い痣が浮かんでいた。ジクジクと音を立てて体液と血が滲んでいる傷口に、吸血鬼もどきの血を垂らすとジュツと水が瞬時に蒸発するような音がして、傷が治り始めた。消しゴムで消える様に消えていく。それを確認すると兄貴がまた「表」に出た。

「一応、ガーゼ張り治しておけよ。いきなり怪我が治ってたらおかしいだろ。怪我をしてる振りだけはしとかないと——」

諭すように、劳わる様に、兄貴は羽川さんに告げたが、途中で遮られた。とても自嘲的な笑みを浮かべて羽川さんはこう言った。

「親は不審に思わないよ。私が何をしても気が付かない。私の顔も覚えてない」

自嘲的な表情に見えるように顔の筋肉を動かしただけの作り笑い。初めて合った時の様に、キスショットと初めて出会ったあの日の様に。羽川さんの人間味の無さに心底吐き気がした。

人の形をしたナニカ

吸血鬼よりも人間味を欠いたナニカ

気持ち悪い

殺したくなるほど気持ち悪い。生理的嫌悪感を抱かせ、全身に鳥肌が立つ、もしも、今、俺が「表」に出ていたら、奇声をあげて吐いていたかもしれない。でも、兄貴は弱い俺なんかと違って、強くて、胸糞が悪くなるくらい。こんなバケモノにも優しくかった。

「僕が覚えてる。羽川翼はここにいる」

ギュッと羽川さんのことを兄貴は抱きしめた。強引に。相手に痛みを感じさせるほど強く。両腕でベアハグ。

「戦場ヶ原さんに怒られちゃうよ」

「怒るじゃすまないな。たぶん、文房具で串刺しだな」

「じゃあ、離さないよね」

「嫌だ」

「離して」

「無理」

「離しなさい」

「断る」

そして、さらに兄貴は恐ろしいことをやってのけた。パチンという音が耳朶に響き、羽川さんの頬が羞恥で真っ赤に染まった。

「フハハハッ！ さあ、羽川！ どうする！ 今僕から離れたらズレ落ちるぞ！ ブラジャーが！」

「最低！ 信じられない！」

重ね重ね繰り返すことだが、阿良々木暦は変態である。どの程度変態か人類に理解できる範囲で表現すると傷ついた女性のブラジャーのホックを直視せずに、指先の感覚だけで外せるくらい変態である。

「もっと罵ってください羽川先生！」

見えないが兄貴は最高にイイ笑顔を浮かべているのだと思う。

「変態！ 痴漢！」

「もっとだ！ でないと次はスカートが」

「…つつ！ 馬鹿！ 卑怯者！」

羽川さんは本気で兄貴を罵っていた。先ほどの能面のような表情ではなく、ごく普通の女の子の様に、頬を羞恥で染めて必死に目の前の変態から逃れようと足掻いていた。

「この距離なら眼球舐められるかな？」

変態という言葉の枠組みに最早捉えることが不可能となった兄貴の奇行はさらに上昇を続け、冗談抜きに、本当に羽川さんの眼球に向けて舌を伸ばした。そして、次の瞬間、共有している視界が地面に激突した。

「ちょ、ちよつとソレ反則」

おそらく条件反射的な反応だったのだろう。羽川さんの膝が兄貴の股間を見事に蹴り抜き、兄貴を瞬時に悶絶させていた。荒く息を吐き出し、乱れた着衣を直し、悶絶しながらも密着している兄貴を突き飛ばした。ドンツと軽快な音と共に共有している視界が今度は左から右へと移転。そのまま、兄貴が頭を捻り、スカートを覗き込むという蛮行に。

「黒！ セクシーだけど清楚」

「…つつ！」

そして、今度は平手。パンツと小気味の良い音が周囲に響いた。そして、静寂。

「少しは気晴らしになったか？」

未だ股を抑えながら兄貴は羽川さんの目をまっすぐ見ながら訊ねた。弱い俺にはできない好感度を犠牲にした最低最悪で最高の励まし。

「私、羽川翼は阿良々木暦君に汚されました」

まだ、少し頬が赤い。眼も潤んでいる。それでも、氷山の一角でも吐き出せたのだろうと信じたい俺がどこかにいた。

「よって、裁判官である戦場ヶ原さんに訴えます」

「それだけは勘弁してください」

先ほどとは変わって兄貴は土下座をした。情けなく、打ち捨てられた犬のように。道化を演じ、笑いを引出し、少しだけ忘れさせる。このどうしようもなく無慈悲な現実を。それが兄貴の、阿良々木暦の真骨頂。

誰もが魅入られる偽善者のパフォーマンス

ヒトの心を語らせたら誰もこの道化に勝つことはできない。だから、兄貴は誰よりも強い。

「女の子に恥ずかしい思いをさせました」

「そうです。羽川様の仰る通りでございます」

「よって、責任を取ることを要求します」

「何なりとお申し付けください」

道化に徹し兄貴は踊る。誰もが滑稽な舞台で、兄貴は羽川さんという天才と言葉遊びを続ける。

「これから副委員長としての責務をキチンと果たすこと。今日みたいなことは二度としないこと、それと、いい加減に私の下着を返さない！」

キスショットを救うことになった一連の事件の際に兄貴は羽川さんから下着の上下セットを強奪してる。あの時期以降一向に見えていなかったからもう捨てたのかと思っていたらまだ持っていたらしい。

「代々受け継ぐべき我が家の家宝なのに！？」

「返さない。今すぐに」

ズゴゴゴという効果音が聞こえそうなほど羽川さんは怒っていた。当然過ぎてもはや何も言えない。そして、その怒りの炎に油、もと、爆薬を注ぐような行為をさらに兄貴はやってみせた。持参していたリックサックから丁重に包まれた風呂敷を取り出し、差し出した。

「え？ 冗談だね？」

黙って兄貴は風呂敷を差し出した。本当に羽川さんの下着を持参していたらしい。想像を絶する変態だ。

「大事な家宝を手の届かない場所に置くわけないだろう？」

「もう最低すぎて何も言えないんだけど」

羽川さんの瞳にはもう絶望しか残っていなかった。震える手で風呂敷を受け取り中身を取り出した。中から出てきたのは下の方の妹の浴衣だった。クリーニングに出したままだったのを今日取りに行くように両親に頼まれていたことを思い出した。どうやら兄貴はそれを利用したらしい。

「嘘だけど。なーんて、最近大ヒットな某小説の狂ってしまったヒロインのために孤軍奮闘するハーレム体質な超鈍感な主人公のセリフを真似てみた」

「ねえ、阿良々木君？ 怒っていい？ これはもう我慢しないでいいよね？」

プルプルと拳を握りしめ羽川さんは震えていた。泣きそうだった。

「怒ってくれ。叱ってくれ。羽川ぐらいなんだよ。友達の中でちゃんと、そういうことしてくれそうなのは」

「友達ね」

「いい友達。だから、下着をプレゼントしてほしい」

「しないから。後、話題逸らさない」

「何の話だったけ？」

毒気が抜けたように羽川さんはガツクリと膝をついた。疲れたよ

うに。とても疲れたように。嘆くように空を仰いだ。見事な晴天はもちろん何も答えてはくれない。

「…帰る」

「途中まで送るよ」

「大丈夫。一人で大丈夫だから」

兄貴が差し出した手を振り払い、羽川さんは立ち上がった。スカートについた汚れを払い、羽川さんは立ち上がった。そして、ガ―ゼを抑えて感触を確かめた。それが現実の証拠だと言わんばかりに。

「羽川。僕はいつでもいいから、ただ一言声をかけてくれれば飛んでいくから、奏が」

「俺かよ！」

思わず怒鳴ってしまったが羽川さんにその声は届かない。

「傷治してくれてありがとうね」

それだけ言って羽川さんは俺たちに背を向けた。そして、振り返らずに歩き始めた。兄貴も無理に後を追わなかった。ただ、その背中に向けて叫んだ。

「羽川！ 待ってるからな！」

兄貴の声は、愚かな偽善は届かなかったことが翌日判明した。

めめブラジャー 002（後書き）

次回ファイヤースターズ堂々の初登場！

皆様の感想をお待ちしております

昔からうちの両親は共働きで家にいる時間が少ない。そのためか、子供達は自然と家事ができるようになっていた。何故か兄貴は妹たちよりも料理が美味いし、俺は裁縫が得意だったりする。下の妹の月火に言わせれば、一家に一匹欲しいブラウニーだそうだ。餅は餅屋と我が家ではそれぞれの得意分野を分担している。

まだ、春の朗らかな気候が心地よい四月の末日に俺は妹の解れてしまった空手の道着と帯を直していた。いったいどんな練習をしたら厚地の道着にこんな穴が開くのだろうと不思議に思いつつも、ダイニングのテーブルで使い込まれたミシンの前に座っている高校生というのは傍から見れば奇妙な光景なのかもしれない。そんなことを思いつつも、ダイニングと繋がっているリビングの方に目を向ければ下の妹の月火がソファで横になりながら、テレビを見ていた。向日葵の柄が薄くプリントされた薄緑の布地がソファの端から覗いている

「月火。皺を直すのが大変だから、その服で寝転がるのを止めて」

何故か小さい頃から月火は着物や浴衣と言った服を好んでいた。黒曜石のような黒髪がよく似合う大和撫子を体現したような月火に非常に似合った服装なのだが、傷みやすいのが欠点だ。

「そんなに脱いでほしいの？」

悪戯っぽく明らかに冗談だと分かる口調で月火は振り返った。表情がちょうどいい暇つぶしを見つけたという顔だった。

「ぜひお願いしますと土下座してでも頼みたいけど、せめてカーテンは閉めて。外から丸見えだから」

その後だといくら脱いでもらっても構わないけど、さすがにご近所から丸見えというのは何かと厄介なのでカーテンを閉めてもらうことにした。

「土下座！」

鈴の音色のように室内に響いた月火の指示に合わせて両膝を床につき、限界まで頭を下げ、願望を口にした。

「お願いします！月火様！御召し物を脱いでください！」

俺の率直かつ丁寧な要求に対し、仁王立ちの姿勢で両腕を腰に当てたまま月火は堂々と宣言した。

「だが、断る！」

グシャツという効果音が現実に聞こえるほど落胆した俺は床に崩れ落ちた。四肢から力が抜け、軟体動物の様にカーペットのようにだらしなく横たわっている俺の側頭部を月火が容赦なく踏みつけた。

「月火！？な、何故！？」

昔は素肌を見せ合うくらいなんの問題もなかったのに、今では土下座をしても妹の裸一つ見れないなんて、この国はもう終わっている。

「火憐ちゃんの露出癖を止めるために暦お兄ちゃんとちょっとした約束したから」

「はい？」

自分の妹がいきなり露出癖があると唐突に言われて愕然としない人間がいればぜひ会いたい。俺は吸血鬼もどきだが、兄貴とは異なり、常識人であり、一応人並みの良識は備えているつもりだ。

「火憐ちゃん、平気で男子のいる前で体操着に着替えたりするんだよね」

「え！？」

自分の世界がガラガラと音を立てて崩壊する音が聞こえる。妹が人前で平然と肌を晒す様な人物だったとは考えたくなかった。確かに風呂上りは下着同然の格好で歩き回っているがそれは家族愛の一環だと今まで信じていた。

「大丈夫もう二度とやらないらしいから。それに火憐ちゃんが着替えだしたらちゃんと男子は慌てて教室から逃散してたから、別に暦お兄ちゃんみたいにクラスの男子全員虐殺するとか言っただけ、実行未遂までしないでいいからね」

兄貴！ 何故俺を呼んでくれなかった！ その場にいたら即座に乗り込んで全員の眼球を抉り出してやったのに。

「しないでね。するなよ。するんじゃないぞ。やったらぶつ殺すぞ。奏お兄ちゃんは暦お兄ちゃんより危険度高いんだから」

「兄貴よりは真面なつもりだよ」

「…ねえ、それ本気で言ってる？うわっ、奏お兄ちゃん本当に自覚なかったんだ」

あの変態兄貴と比較するまでもなく、自分は社会的に見て常識人だと思っていたのだが、それを妹に完全否定された。同情の籠った眼差しで見つめられると胸が痛む。俺が一体何をしたというのだろうか。

「話戻していい？」

「その前に月火の胸で泣いていいか？」

精神的なダメージが大きすぎてそろそろ限界であるため、月火の温もりが欲しかった。返答は頭部へのさらなる圧力だった。現在進行形で月火に踏みつけられているのを忘れていた。慣れるとマッサ―ジ染みていて悪くない。視界の上の方に見える月火の下着も素晴らしい目の保養だ。手に握ったパールもよく似合っている。

「…ちょっと待て、パール？」

「パールだね」

「着物にパール。シニールだけどカッコイイねえ！ 月火カッコイイ！」

「キヤー、ありがとう！」

ノリノリのいいテンションだった。このままやり過ごせるかと思

った瞬間に満面の笑みを浮かべた月火が俺の脳天に向かってバールをフルスイングで振り下ろした。

「うおお！」

もしも、昨晚キスショットに血を吸ってもらっていなければ、回避が間に合わず、頭が陥没しているところだった。

「チッ、死ねばよかったのに」

汚く舌打ちをして、月火は再度バールを振りかぶった。見事なゴルフスイングで床をゴロゴロと転がる俺の腰を狙ってくる。

「マジでストップ！ 死ぬから！ バールよりも愛する妹に殺されそうになってる事実が心を殺しそうだから！」

ゴミ屑でも見る様な視線を月火が向けてくるといふ事実が何よりも辛かった。本当に涙を流したかった。もとより、号泣していた。

「あ、うん。その、ごめん。なんかプラチナム力ついたから」

「なあ、俺の存在意義って何？」

心底死にたい気分になった。完全な吸血鬼になって太陽の下に身投げをすれば地獄を味わうが確実に死ねる。今度実行しようかと思う。

「暦お兄ちゃんのボディガードでしょ」

何をいまさらという風に告げてくる月火を見てさらにテンション

が下がった。いつそ殺してくれと叫びたかった。おまけか。やっぱ
り兄貴のおまけのなのか。

「他には？」

頼れる兄であることとか。

「変態？」

「それ存在意義か！？」「

「まあ、奏お兄ちゃんなら有り得そうじゃん」

「兄貴は！？ 兄貴は！？」「

俺は至って常識人だが兄貴はどう考えても変態だ。羽川さんに対
する数々のセクハラ行為の数々は記憶に新しい。

「暦お兄ちゃんは暦お兄ちゃんだし」

「まあ、確かに」

長閑な会話の間も続いていたボールによる猛攻がようやく収まり
気まずそうに月火がボールを手放した。カランと乾いた音が響き、
ようやく俺は安堵の息を吐いた。

「暦お兄ちゃんと奏お兄ちゃんってセットだから、嫁にもらう前に
奏お兄ちゃんは潰さないといけないなあと前から思っていたら、つ
い」

「嫁!？」

「火憐ちゃんって女子度少ないから、普通に女の子らしく振る舞えるようになったら一日暦お兄ちゃんがなんでも言うこと聞いてくれるって約束。私も手伝ってうまくいけば同じ条件なんだ」

「それで、嫁？」

「うん、嫁」

「なんで、嫁？」

「ノリで」

「ノリか」

「その写真高く売れそうだな」

「もうすでに予約済み——」

「なあ、ファイアシスターズの活動資金ってまさか？」

「イエー」

「イエー」

誤魔化す意図もあったのは丸見えだが、手を差し出されたのでなんとなくハイタッチを交わした。相変わらず愉快な妹だった。脱いでもらうのは非常に心苦しいが今日は諦めようと思ったたちょうどその時に月火の携帯電話がなった。

「火憐から？」

「違う。千ちゃんから」

千ちゃんという名前に心当たりはなかったが、月火の友達の一人だということくらいは推測できた。妹が携帯電話をカチカチといじっているのを横目に道着の修繕を再開した。コトコトというミシンの音とカチカチとキーが叩かれる音がなんとなく優しく部屋を包んでいるように思えた。作業が終わり、一息着いているといつの間に火憐が室内にいた。

「いつ入ってきた？」

「んー、兄ちゃんが猫みたいに伸びして時」

「そっか。道着できてるよ」

月火とは異なり、火憐は兄貴も俺も両方兄ちゃんと呼ぶ。簡単に人前で肌を露出する件について問いただし、実演して欲しかったがそろそろ両親が帰宅する時間なので止めておいた。特に要件は聞いていないが兄貴は用事があるということなので今日は出かけている。帰宅時間が分からないが兄貴の分の夕食も作っておいて大丈夫だろう。そんなことを思いつつ、火憐に道着を手渡した。

「おお！ さすがあたしの兄ちゃん！ ナイスだぜ！」

「御代は？」

「妹相手にそりゃないぜ兄ちゃん」

そこはノリで体でと言つて欲しかった。撤回できる前に吸血鬼の身体能力を活用して本気で堪能する計画だったのだが、ものの見事に初めから崩壊した。

「あ、そうそう兄ちゃん今夜は外に行かない方がいいぜ」

「なんで？」

夜中に抜け出してキスショットに会いに行く予定だったのだが何か事情があるならキャンセルするしかない。

「あー、アレね」

相変わらず携帯電話をいじっていた月火も振り向いた。

「なんかさ、猫のコスプレした女の人人が人を襲ってるって話。今、話題急上昇中」

「へえ」

まさか兄貴じゃないだろうなと不安になった。兄貴が女装をする恐ろしく似合うのだ。遠くから見れば絶対に男だと判別できないレベルだ。まさかなあと自分の考えに苦笑いが浮かび、妹たちともうすぐ帰ってくるであろう兄貴のために夕食を作ろうとキッチンに向かった際に窓の外にはつきりと見えた。

屋根の上を疾走する頭部が不自然に膨らんだ人影と

兄貴らしき人物を背負い、疾走するキスショットの姿が

めめブラジャー 003 (後書き)

月火ちゃんと少しだけ火憐ちゃん登場。次回より始動です。

「友達の胸は揉めなくても、妹と弟の恋人の胸なら揉める！」

自宅から飛び出し、猫のコスプレをして下着姿で疾走している女性の後を追跡しているキスショットとキスショットに背負われた兄貴に接近した瞬間、とんでもないセリフが耳朶に響いた。何かに集中するように目を閉じていた兄貴がカツと目を見開き、ワキワキと指を蠢かしながら、キスショットの胸に腕をゆっくりと伸ばし始めていた。

「死ね」

ジャラジャラと投擲した三日月が兄貴の背中に向かって飛んでいく、刃の部分ではなく、鎖鎌の重りの部分を投げたのはキスショットが返り血で汚れないように配慮しただけで、手加減したわけではない。一度死ぬがいい。

「こんの戯けがあ！」

ただ、正真正銘本物の吸血鬼であるキスショットの方が俺が兄貴を殺すよりも遙かに速かった。背後から伸ばされていた兄貴の右腕を掴み、肩ごしに背負うようにして振り抜いた。一本背負い。兄貴が錐もみ状態で猫のコスプレをして下着姿で走る女性に向けて飛んだ。

「キスショット避ける！」

「なんじゃ！？」

間一髪のところでキスショットが背中に激突しそうだった重りを避けてくれた。そのまま重りは兄貴の方に向かって弧を描いた。

「人間砲丸投げだ！ 反省しろクソ兄貴！」

ジャラジャラと鎖が兄貴の足に絡まった兄貴の顔が驚愕に染まる。そのまま、上に振り抜いた。独楽のごとく兄貴が回転しながら夜空に消えていく。

「か、奏？」

「キスショット大丈夫か？」

慌てて近寄ろうとしたら手で制止された。怯えた表情でこっちを見ってくる。

「ヤンデレじゃったのか！？」

「どうしてそうなる！？」

恋人にヤンデレ呼ばわりされた。そもそも男であるのにヤンデレ属性という有り得ない存在に認定されている。それも自分の恋人に確かに俺は四肢の無い吸血鬼に一目惚れした変態でシスコンかもしれないが、ヤンデレ属性は無い。

「俺が他の男に触れているのを見て亡き者にしよう」と

「違う！誤解だ！　兄貴を殺そうとしたただけだ！」

「儂を生首だけにして、体はライダースーツを着させてプロポーシ
ョンを愛でるための人形とするつもりで攻撃を！？」

「なんで今人気の某首無しライダー知ってんの！？　てか、それだ
ったら鎌のほう投げてるから」

そんな勘違い合ってたまるかと叫びたかったが、キスショットが
意地の悪い笑みを浮かべているのを見て冗談だと気が付いた。それ
でも、走りながらコスプレをして下着姿で走る女性を追いかけてい
るのはご愛嬌。そろそろ兄貴も落ちてくるだろう。

「まだまだ甘いのう」

「誰だって自分の恋人に手を出されたら怒ると思うぞ」

「そうじゃな」

ニヤニヤと笑っているキスショットが妬ましい。完全に騙された。
そして、ようやく兄貴が落ちてきた。このままだとコンクリートに
激突してグロテスクな光景が生まれることになるだろう。その場合、
家族が泣くことになるので、兄貴を空中で回収、グエツと言ってい
たのは無視だ。

「奏！　あの猫を捕まえろ！　アイツは羽川だ！」

「んな、アホな」

「後で説明するから捕まえろ！」

「あの猫っばい露出狂が本当に羽川さん？」

「僕が女性の腰のラインを間違えるはずがない！」

「絶対に信じたくない根拠だ」

物凄く嫌な話だが、兄貴の異常性は十分に理解している。ミリ単位で腰のラインを把握する能力を持っているのだ。ただ、それでも信じられないし、信じたくなかった。

「奏。アレは怪異の一種じゃ」

「怪異？ どうりで速いと思った」

吸血鬼が全力で追わないと追いつけないほどの速度で人間が走れるわけがないと思っていたら相手も同類だった。

「怪異なのはわかったけど、なんであの恰好？」

あの完璧委員長こと羽川さんにコスプレして下着姿で走り回る趣味があつたとは驚きだ。何故兄貴に好意を抱く女性は独特な人ばかりなのだろうか。戦場ヶ原さんとか、中学時代の同級生とか。

「あの猫の恰好はその愚か者が押し倒して服を奪い取ったからじゃ」

「マジで！？」

「マジじゃ」

さすがにあの恰好はないだろうと思っていたら兄貴が押し倒した結果だったらしい。非常に残念なことに兄貴を警察に突き出す時が来たようだ。身内から犯罪者が出るなどという事態は絶対に避けたかったのだが、今回は避けようがない。

「んな訳あるか！ 元々あの恰好だ！」

兄貴の怒号が虚しい。いくら無罪を主張しても兄貴への疑いは晴れることはないと思う。いつか犯罪に手を染めるんじゃないかと思っていたがまさか同級生に手を出すとは思わなかった。悲しい限りだ。

「百歩譲ってあの怪異が羽川さんだったとしよう。それでも、下着姿で走り回る理由がない。兄貴が襲ったという方がまだ納得できる」

髪の色から根本的に違うし、外見もあまり似ていない。眼の色素も違う。羽川さんと同一人物だという可能性は極めて低い。怪異のことは詳しく知らないが、そこまで外見が変わるものだろうか。若白髪じゃあるまいし。

「正論だけだな。僕は何もしていない」

「あのな、兄貴。もしも、兄貴が何もしていなくて、アレが本当に羽川さんなら羽川翼という人は露出癖に近いことになるぞ」

あとコスプレも追加で。事実ならとんでもない変態だ。ドン引きだ。

「事情は今一つ分からないけど、あの猫っぽいのは羽川で、捕まえないとヤバイ。OK？」

「キスショット。兄貴を出頭させるのは確定事項としてまず、捕獲しよう」

「そうじゃな」

「人の話聞けよ！ 家族を信じるよ！」

運ぶのが煩わしいので分離状態を解除して兄貴と入れ替わり、再び疾走。吸血鬼の方が身体能力が高いらしくだいぶ距離が縮まってきた。

「いい加減うるさいにや！」

いきなり反転した羽川さん（？）が平手を放ってきた。よく見れば指先から鋭い爪が伸びている。人間の手のサイズからすれば立派な刃物だ。猥染みたその動きに一瞬身体が硬直してしまった。

「甘いわ！」

キスショットがそう言い放っただけで、羽川さん（？）が軽自動車に弾かれたかのように吹き飛ばされた。キスショットの瞳孔が完全に開いているのはかなり迫力があつた。そのままにらみ続け、羽川さん（？）を近くの林にピンボールの様に弾き落とした。

「よし！ 捕まえた！」

三日月の鎖で縛りあげようと接近した瞬間、両足を串刺しにされ

た。何もなかった地面から木の杭が槍のごとく飛び出していた。それが太もも部分に刺さっている。何が起きたか分からず、その次の瞬間、痛みに襲われ、自分の喉が勝手に悲鳴を上げていた。

「奏！」

キスショットが一步踏み出した瞬間また地面が爆散した。木の槍が弾丸のごとく飛び出してくる。

「にやはははは！ にゃーい、甘いのはそっちにゃ！」

腹を抱えてゲラゲラと笑う羽川さん（？）に向けて引き抜いた槍を投擲しても俊敏な動きでかわされた。

「空を飛べる儂にこんな罠は通じん！」

キスショットが空高く飛び上がり、鷹の如く急降下を仕掛け、俺はそれに合わせ地面スレスレと低飛行で距離を詰めた。何かが作動する音が聞こえた瞬間には視界が木の杭で埋め尽くされていた。心臓に杭を打ち込まれれば吸血鬼は消滅すると一般的に言われている。自分が該当するのか分からない以上、必死で心臓を庇うしかなかった。

「吹き飛ばし！」

キスショットが再び睨んだだけで周囲の地面が抉れ、罠そのものを根本的に破壊した。なんでもありの恋人にもう、驚きすら感じられない。なんでもできそうな気がする。

「無茶苦茶だにゃ。でも、これで終わりにゃ！」

羽川さん（？）の手にはいつの間にか俺の三日月が握られていた。キスショットが作成した二番目の怪異殺し専用の武器。俺がキスショットを守るための武器。それがキスショットに向けられていた。

「させるか！」

俺が三日月を奪い取るよりも早く、兄貴が分離状態を解除していた。俺の方に完全に気を取られていた羽川さん（？）も、心渡りを慌てて取出していたキスショットも、そして、半身である俺すらも予想外の速度で兄貴は動いた。

ブチッ

そんな間抜けな音と重すぎる静寂が周囲を支配した。羽川さん（？）に触れた瞬間まるで魂を奪われたかのように兄貴は脱力して倒れた。その手にブラジャーを握りしめて。

「やーと、追いついたよ。皆して何かいいことでもあったのかい」

間の悪すぎるタイミングで見覚えのありすぎるアロハシャツが視界の端に見えた。俺からはちょうど羽川さん（？）の背中が見えており、キスショットが正面、兄貴が真下、今到着した忍野さんが右前方という形になる。

「あれ？」

忍野さんも硬直した。兄貴の手にはブラジャーがしっかり握りしめられていた。

「お約束というやつじゃな」

キスショット。それはここで言うセリフでは断じてないと指摘したかった。三日月が地面にガランと投げ出され、羞恥に頬を染めた羽川さん（？）が絶叫した。大音響で。

その間も動かない兄貴はまだブラジャーを握りしめていた。

この時、俺は兄貴を後で肅清することを信じもしない神に誓った。

めめブラジャー 004 (後書き)

キスショットが相手の分ブラック羽川も警戒が強くなってます。しかし、それすらも暦君の前では無意味なのです。

いつの間にか自分の左目が改造されていた件について

兄貴が羽川さん（？）の下着を盗り取る故意か事故か不明な事件の後、僅か数秒で恐ろしいことが起きた。まず、忍野さんが後ろから忍び寄っていた戦場ヶ原さんにいきなり殴り飛ばされた。なんか、手に煉瓦らしきものを握っていたのは見なかったことにした。全力で目を逸らした。

「貸してやれ。さすがに哀れじゃ」

キスショットのその指示で俺は愛用のマントを羽川さん（？）に被せた。その間僅か7秒。

「なんで戦場ヶ原さんがここに？」

「あのゴミを燃や…じゃなくて切り刻みに」

「そうですか。どうぞご自由に」

弟が兄を見捨てるまで5秒も必要なかった。家族の縁なんて脆いものだ。さよなら兄貴。蟹のように業務用のホッチキスを構えた戦場ヶ原さんによって代わりに肅清されてください。

「うむ、左目に仕込んだカメラは良好の用じゃの？」

「カメラ？」

「これじゃ」

キスショットによる問答無用の眼突き。左目の眼球に痛みはなく、何故かピンポン玉のように外れた。

「この瞳に写した映像は儂がいつでも見ることができのじゃ」

「ソレ俺の目だよね？」

「うむ」

「なんでそんなとんでもない機能付いてるの？」

「儂が追加した」

そういつて影から取り出したパソコンのスクリーンを指さす。不思議なことに本当に俺が見ている光景が映っていた。

「あの蟹の小娘がスぺアをもっておる」

「なんで？」

「儂が寝ているときに監視できんからの」

兄貴の方に視線を向ければものの見事に戦場ヶ原さんに刺されていた。コンパスで左腕をグイグリと。滅茶苦茶痛そうだ。

「もう二度と僕は一人にならん。なりとうない。一緒じゃ、この命ある限り」

抱きしめれている状態ではキスショットの表情が見えなかった。ただ、いつも通りの暖かくて甘い香りがする。長く嗅いでいたら中毒になりそうな俺が好きな香り。それが何故か少し薄ら寒かった。

「怒っておるか？」

「別に、あんまり」

「愛しい。うぬが愛しい」

「俺もね」

名残惜しそうに離れ、兄貴の方に向かっていくキスショットの背中をぼんやりと眺めがら、状況を観察している羽川さん(?)の横に移動。互いに終始無言。兄貴の断末魔が原因。逃避開始。

数分前に知った衝撃の事実。実は恋人に人体改造されていました。キスショット以外に欲情できない暗示だけじゃなかった。吸血鬼とニンゲンの価値観は違う当たり前の事実から目を逸らし続けた。

それでも、やっぱり、キスショットのことが好きなんだから、俺は壊れている。

久しぶりに、キスショットと合ってから初めて、改めて自分の異常性を認識した。キスショットは俺の体を弄繰り回していた。いつからかはまだ聞いていない。たぶん、和解してからすぐだろう。

キスショットは俺の体を弄んでいた。前の従者を失った教訓から俺が勝手に死なない様に。

俺の視界はいつの間にかキスショットが自由に監視できるように細工されていた。キスショットが作ったとはいえなぜ、パソコンで確認できるんだろう。本当に俺の体はいつたいていどうなってるんだ。プライバシーという概念は吸血鬼にはないらしい。

何気に戦場ヶ原さんも便乗して兄貴の行動を監視していた。怖いなあ。でも、兄貴の方がやっぱり怖い。

事実、兄貴は戦闘担当ではないが、俺よりも強い。純粋な喧嘩ではなく、発想力が最悪なのだ。屋気楼のように掴みどころのない。だから、誰も兄貴に勝てない。無害で無敵。でも、兄貴は甘んじて戦場ヶ原さんによる制裁を受けている。優しいから。

兄貴は優しい。吐き気がするくらい。

そんな兄貴が大っ嫌いで、最高に妬ましいと思うようになったのはいつからだっただろう。どうやったら、人にあれ程優しくなれるのだろう。時折、そう疑問に思っ、口に出せずにいた。俺には兄貴の暴走を止めることはできない。せめて、暴力的な局面で兄貴をある程度守ることができるだけ。だから、もし、兄貴が誰かと生涯を共にするのならば…

「兄貴を愛すると同時に、その歪みを否定できる人でないといけない」

いつのことか珍しく兄貴の将来の相手について話をした時にそんなことを言っていた気がする。その条件に後一項目追加するとすれ

ば兄貴が馬鹿なことをした時にきちんと肅清してくれることだろう。その条件に戦場ヶ原さんほど適している人材はいないだろう。

「戦場ヶ原さんは誰でも容赦なく半殺しにしてくれるから安心して任せられるなあ。兄貴が文房具のハリネズミみたいになってる」

もはや完全にハリネズミと化した兄貴を見ていると乾いた笑い声しか出なかった。最初は甘んじていたがもう完全に脱出不能になっている。必死で現実逃避をしているのだが、眼前の物体が兄貴だと思いたくなかった。なんかいい顔したキスショットが吸血鬼の血で継続的に回復させていなければ絶対に死んでいる。忍野さんは気絶してるし。兄貴は瀕死状態だが、急所は外されているという拷問中。

「兄貴が死ぬとしたら、絶対に女性関係だろうなとは思っていたけど」

文房具とは想像以上に頑丈かつ殺傷能力が高いらしく、人体の一部に刺さっても然程損壊していない所が凄い。特にあの細いホツチキスの芯が皮膚を食い破るのだからホラー映画を超越する光景だ。

「蛆虫。いいえ、蛆虫と比較するのも蛆虫が可愛そうね。そうね、そのブツ。何か遺言があれば聞いてあげるわ」

あれだけの量の文房具をどうやって持ち歩いているのか常々気になることろだが、聞いた瞬間に人生が終わる気がする。

「アレ、そのうち死ぬともうにゃ」

隣で俺の吸血鬼専用のマントに包まった羽川さん（？）も物凄く遠い目をしている。本来ならば敵対している立場なのだが、数分前

に起こった信じ難いできごと、自分の身体のとんでもない事実について知って正直精神が壊れそうだったからか、どうでもよかった。

「まあ、元気出すにや。あの人間が死んだ方がおまえはきつと幸せにや」

「たまに本気でソレ思っんですよ」

いつそ兄貴死なないかなって。兄貴の女性関係で刺されそうになった回数が三ヶタの自分の人生を考えるとどうしても。

「初めてなんですよ。女性関係で俺じゃなくて兄貴が刺されるの。刺すという条件を除けば被害回数が四ヶタ。それでようやく一回目」

理不尽だ。それ以外に思えることはない。

「元気出すにや」

ポンポンと羽川さん(?)に肩を叩かれた。お礼を言おうとして、急激に体が重くなったことによりやく気が付いた。まるで、キスシヨットに血を吸われた後のような感覚。

「このマントは借りるにや。おめえ、やつぱ馬鹿にや。吸われてるのに気付かなかったにや」

自分の頭部が冷たいコンクリートに触れているのは感じられるが声は出なかった。何かされたのは分かる。しかし、対処できなかった。兄貴が倒れた理由も分かった。

怪異を甘く見ていた。

愚か者と罵って欲しい。

俺と兄貴が共存できてる事実は極稀な例外であって、怪異は人間の価値観を持たない。

俺の恋人は、キスショットは何人も過去に殺している。俺という楔がなければ躊躇なく殺し続ける。

ああ、馬鹿だなあ。怪異が人間と同じなはずがない。ただヒトガタなだけ。

また、騙された。羽川さんを最初の頃警戒していたことをすっかり忘れてた。兄貴はもつと早く気が付いたんだろうな。先ほどの罠といい、怪異殺しに関する知識といい、人を騙す機転といい、嘔吐きなところといい、塵ほども思っていないのに同情する行為といい。

アレは間違いなく、羽川翼さん。頭良すぎです。ただ、なんで語尾が「にゃ」で下着姿なのかは分からないし、あまり知りたくない。たぶん、犯人兄貴だろうし。

兄貴という奇想天外予測不可能な変態と戦場ヶ原さんの登場がなかったら、俺かキスショットのどちらか片方が殺されていた可能性がある。それくらい、危険な状況でもわいせつ行為で突破するのが兄貴、それは制裁するのが戦場ヶ原さん。

どうしようもないくらいに羽川さん。今になって分かった。何故あれ程苦手意識を感じていたのかを。単純明確、同族嫌悪。数年前の俺と兄貴とそっくりだ。

全然知らなかった。知りたくなかった。

キスショットも、俺も、兄貴も、戦場ヶ原さんも、羽川さんも、たぶん、忍野さんも

そして、俺も

いい具合に壊れている

そんなどうでもいい思考に耽っているとキスショットの治療が効き始めたのか兄貴が口を開いた。

「部屋がなかったんだよ」

文房具のハリネズミ。兄貴だったものが口が開いた。

「十年以上同じ家に暮らしているのに羽川の部屋がなかった」

じゃあ、普段いつたいどうやって生活しているという問いを聞くことができなかった。想像してようとして、その不可解さに、悍ましさに、思わず顔をしかめた。生活風景がまったく想像できない。それでいて学校では優等生として振る舞っている。

「怖かった。マジで怖かった」

今の兄貴の状態も十分ホラーだと思う。文房具ハリネズミという新種の怪異が生まれそう。性欲を奪う怪異とかになりそう。

「可哀そうとか、同情とか、そういうのじゃなくてただ、気持ち悪くて」

一番痛いのは羽川なのになと兄貴はブリキ人形みたいに動きながらつぶやいた。キスショットのお蔭でだいぶ回復しているけど兄貴も十分痛々しいよとツッコみたかったができなかった。痛みを無理やり押さえ込む兄貴の精神力はやっぱり怪物染みていた。

「狂ってるよ。ホント、マジで笑えねえ」

実際に俺はみていないが、それは言葉で表現できないほどの歪み。曲がって、曲げすぎて真直ぐになってしまった人間。それは兄貴と本当に同じ境遇だった。

「なあ、戦場ヶ原？」

「童貞が口を開かないで」

「この空気でその暴言かよ！ 謝れ！ 世界中の童貞に謝れ！」

「素人童貞が呼吸をしないで」

「死ねと。もう、死ねと言うのか！？」

「私は優しいから敢えて表現をソフトにしていたけど、率直に言うわ。死になさい」

「もう直接堂々と言い放ちやがった！」

先ほどのシリアスな空気が台無しだった。さすが戦場ヶ原さん。俺には絶対にできないことを平然とやってのける。まあ、羽川さんの下着握りしめて気絶していた兄貴が悪い。忍野さんもばっちり正

面から目撃していたのだから、戦場ヶ原さんに速攻で殴られても文句はいえないだろう。

そう考えると、一番の被害者は人体改造されプライバシーがなくなつた俺じゃないだろうか？

しかも、俺を人体改造したのがショッカーのような悪の組織ではなく、自分の恋人。もう、いい加減に神を呪ってもいいのかもしれない。

「待て戦場ヶ原！ その首でも刈れそんな馬鹿でかい鉄はなんだ！」

「ただの鉄よ」

「嘘つけ！ 刃の部分が明らかに50cm超えてるだろうが！ イカれてるよその武装！」

「失敬ね。ちょっと。。。を。。。して。。。させてもらおうと思っただけよ」

「。。。には何が入るんだ！？」

「あんなことやこんなこともしてみたいわね」

「正確なの意味を答える！」

アレも一種の愛情表現だということにして、現実逃避しながらも

兄貴に突き刺さった文房具をささっと引き抜いて無理やり立たせる。

「落ち着いた？」

「おう」

「戦場ヶ原さんに完璧に調教され始めているよね？」

「おう？」

ホッチキスを力チ力チと後ろで鳴らしている戦場ヶ原さんが見事な背景となっている。俺の恋人も、兄貴の恋人も個性的な性格の持ち主だ。ただ、何かを達観したかのように首を横振っている。

「行く？」

「おう」

「どこに？」

「羽川の家。たぶん、戻ってる」

「行きますか」

「行くか」

分離解除。便利で不便で呪われた体を結合。道が分からないので羽川家までは兄貴に行ってもらおうとしよう。まだフラフラだが兄貴なら問題ないだろう。いつも通りのスーパー阿良々木ブラザース。

どこか狂って、歪んで、曲がって、捻じれて、欠けて、壊れた兄弟の日常。

本日の行動理由は同族嫌悪という実に身勝手に自己中心的な内容。

妹の夕飯作り忘れたことが、人体改造よりも心が痛んだのは何故だろう。

思えば、この頃から徐々に自分はニンゲンを止め始めていた。

俺も兄貴も。

めめブラジャー 005（後書き）

怪異は決して人間とは共存できない。

しかし、この兄弟はそれを続けてきました。そして、徐々にズレて、クライマックスに向かい始めます。

奏君に不幸属性を少し追加。キスショットは若干ヤンデレ気味にしてみました

『天才』とは何か？

そんなことを唐突に聞かれても明確な答えは出せないし、答えがあるとも思えない。頭が良い、学習能力が高い、思考回路が常人と異なる、五感が優れている、ポテンシャルに恵まれている。定義の例を挙げればキリがないだろう。ただ、一つだけ言えることは『天才』は『凡人』とは違う。何が違うかは分からないが、何かが違う。

ニンゲンと怪異が根本的に違うから、俺とキスショットの愛情が屈折しているように。

『天才』である羽川翼という人物もまた、屈折している。真直ぐに屈折している。

針金を何回も螺子曲げた後に強制的に真直ぐに伸ばしたように、真直ぐなのに曲がっているという矛盾した現象。

それは俺にとって見慣れた、とても見慣れたことだった。

どうしようもないくらいに、兄貴と羽川さんは似ている。

俺が外見で、羽川さんが内面。俺と羽川さんを足して二で割った兄貴になる。

もしも、自分が兄貴の立場だったら恐らく逃げ出して、可能な限り羽川さんと拘わらない様にするだろう。何故なら、気持ちが悪く、気味が悪いからだ。両親から放置と無視という徹底的な存在否定を当たり前のものとして受け止め、学友の前では優等生として振る舞い、困っている人には手を差し伸べる。

ホラー小説風に表現すれば、腹部にナイフが刺さって深紅の血が流れ、服を汚しているのに、それに気が付いていないように振る舞っている。概ねそんなかんじだろう。

仮にもし、自分がそんな状態の人と遭遇した場合、助けようという思いを抱くよりも、恐怖や嫌悪感を抱くだろう。そんな俺とは違い、兄貴はきっとこう言うのだろう。

「知ってしまったら、どうしようもないだろ？　そういうことがあるってことを、僕はもうどうしようもなく知ってしまったているんだから、見てみぬ振りはできないし、知って知らぬ振りもできない」

そう言って羽川さんの現状を改善しようと孤軍奮闘するのだろう。死にそうになっても諦めないだろうし、最後までやり遂げるのだろう。

う。いつものように。

こんな兄貴だから、誰よりも尊敬できるのだと思う。

口に出すにはあまりに恥ずかしいことを考えているうちに羽川家に到着した。表札に羽川の文字、そして、少し離れたところに「つばさ」と書かれていた。今にも消えそうで、雨風によってすり減った表札が、この家の末期を表しているみたいで悲しかった。

「やっぱり、閉まってるわね」

「それはそうだろ」

「ええ、阿良々木君のような素人童貞が襲ってくるんだもの、私なら怖くて部屋で震えているわ」

「素人童貞は関係ないだろうが！」

「あら、阿良々木君は素人童貞ではないと言うの？」

「そうだけどさ！ 確かにそうだけどさ！ お前に憤みとか、デリカシーは無いのか！」

「クラスメートの下着を剥ぎ取り、鼻息も荒く欲情した阿良々木君にそんな概念が到底理解できるとも思えないのだけれど」

「あれは事故だ！ 不可抗力だ！」

「あら、それにしても嬉しそうだったわね」

「そんなことない！」

「あら、羽川さんの胸には興味が無いというの？」

「ある！滅茶苦茶あるけど！」

「ほら、素人童貞じゃない。それもこんなに美人な彼女以外に欲情する変態」

「そうだけど、違う！僕は健全だ」

「いい加減うるさいわね、決るわよ」

「横暴にも程があるぞ！」

二人が相愛になってからまだそれ程時間がたっていないが、もはや夫婦みたいなノリの良さだと第三者の立場からは思う。とりあえず、閑話休題。羽川家に意識を集中。

戦場ヶ原さんの指摘通り、当然と言えば当然のこと、羽川家の玄関の扉は施錠されていた。戦場ヶ原さんが扉を引く度に、カチツ、カチツと金属が擦れる音が響く、窓に明かりは無く、人の気配がしない。ただ、窓の縁に残っている足跡が家主の帰還を物語っていた。

「やっと追いついたよ」

先ほど戦場ヶ原さんの奇襲を受けたはずの忍野さんがいつの間にかそこにいた。アロハシャツの中年男性にしか見えないのに、とても心強く思えた。

「まったく、ツンデレちゃんは怖いなあ。久々に意識が飛んだよ」

「不可抗力です。クラスメートの貞操の危機だったので」

いつものように無表情のまま、戦場ヶ原さんは答えた。それに対し、忍野さんは苦笑していた。

「まあ、いいけどね。どうするんだい？ このまま突入するかい？」

この扉を壊すことは俺がキスショットならば簡単にできるだろう。後で証拠隠滅ができるかどうかは別として、戦闘になったとしても吸血鬼が二体いれば勝てないことはないだろうし、心渡りか三日月があれば怪異だけ殺すこともできる。

「弟君が何を考えているのか分かるけど、あまりお勧めはできないね」

この人は本当に心が読めるのではないかとたまに思う。キスショットと和解した時といい、全てこの人の掌の上で弄ばれているのではないかという疑念が消えない。グルグルと、モヤモヤと、そんな感触が残り続ける。

「あの怪異はね。『障り猫』って言うんだ。本来なら一瞬で倒せるただの雑魚怪異」

忍野さんが雑魚と呼ぶにしては強かったような気がする。少なくともあの吸血鬼ハンター三名よりは。

「でも、今回はちょっと違う。アレはもう障り猫と呼べるレベルじゃない。通常の対処法じゃどうにもならないし、ハートアンダーブレードの虎の子の日本刀でも一時的な効果しかないだろうね」

つまり、倒しきれないということ。不死身の吸血鬼が殺せない相手。なんともまあ、皮肉な敵だ。

「赤の他人じゃあ、他の人の家庭事情にまで踏み込めないからね」

誰も異論を唱えないためか、忍野さんは言葉を続ける。

「ここのご両親だけど、ちょっとだけ事情が聴けたよ。正直あまり気持ちのいいものじゃなかった」

いったん間を置いてから、忍野さんはこう言った。

「娘を殴った。メガネが割れて頬から血が流れているのに、『駄目だよ、お父さんそんなことしちゃ』と取り乱した様子一つなくそう言ったそうだよ」

女性の顔を殴るなんて到底許される行為じゃないけどね、一応病院まで運びこんだよと忍野さんは付け加えた。

「それで、君たちはどうするのかな？ 児童相談所にも行くかい？」

家庭とは一つの閉ざされた社会の様なモノだ。当事者が動かし、外部からの干渉は本来なら最小限にあるべきもの。そこにズカズカと踏み込む権利を持っているのかと聞かれれば無いと答えざるを得ないだろう。

「僕をここまでコケにし、奏を傷つけたモノを放置しておくと思うか？」

犬歯をむき出しにしてキスショットは唸った。不機嫌そうにグルグルと喉を鳴らしている。羽川さんを殺すことは無くとも、あの猫の怪異はキスショットに殲滅されるだろう。容赦もなく、躊躇もなく、吸血鬼という捕食者の立場からキスショットは敵を潰す。それが吸血鬼としての在り方だから。

「しないだろうね。でも、いいのかい？」

「何がじゃ？」

「将来の義理のお兄さんに嫌われるよ」

「グッ」

僅かな迷いがキスショットに生じていた。羽川さんが死ぬようなことがあれば俺はともかく、兄貴は許さないだろう。それはキスショットの望むことではない。

「さて、どうしようか？」

忍野さんは訊ねた。

「僕は羽川の家事情をどうにかできるなんて思っていないよ」

その答えは意外だったのか、忍野さんは兄貴の方を振り向いた。忍野さんに集中していたためか、いつの間にか玄関の扉が開かれて

いた。もちろん、鍵の付近に突き刺さった文房具は見なかったことにした。たぶん、ピッキングの一種なのだろう。きっとそうだ。

「何アレ？」

小さく戦場ヶ原さんが呟くのが聞こえた。

まるでここにお前の居場所はないと言わんばかりに、使い古された布団が廊下に敷かれていた。

そこが羽川さんの寢床だった。

そして、嫌な沈黙を破る様に、猫が、白い人型の猫が、閃光のような速さで兄貴に襲いかかった。

グチャリと肉の潰れる音がした。

めめブラジャー 006（後書き）

更新が遅くなり本当に申し訳ありません。

感想を下さった皆様に心より感謝しております。

ようやく最終話までのプロットが終わりました。二月末には完結する予定です。

それまでこれからお付き合いいただければと思います。

めめブラジャー 最終話

この世界には『お約束』というものがある。より正確に表現するならば、典型例や固定パターンといった表現になるだろう。例外的な場合を除いて基本的にこのような法則から逃れることはできない。先ほど兄貴が戦場ヶ原さんに串刺しにされた件を除けば、いつものように自分は受け入れるしかないのだろう。

『阿良々木暦が関わった女性絡みの事件で阿良々木奏は必ず刺される』という法則を。

毎回の事だが、兄貴は本当に、全くの一切の躊躇なく、今回も俺を盾にした。羽川さんの指先から伸びた鋭利すぎる五本の爪が深々と胸に突き刺さり、視界が激痛のあまりに白く染まる。それでも、どこか、ああ、またいつものパターンかと達観している。

「ぬ、抜けないにや!？」

羽川翼という人間は『天才』であって、万能ではない。だから、俺ほど刺され慣れている人間を相手にすることなんて考えたこともなかっただろう。慣れてしまっているのだ。阿良々木奏という人間

は、刺されるということに、死ぬことに慣れてしまっている。本当の意味で死んだのは精々キショットに噛まれた最初の時だけだ。

「でも、やっぱり痛いなあ」

こんなことを考えているうちに空いていたもう片方の手が腹部に突き刺さった。限界値を超えた為か、もう痛みを感じなくなっている。視界は真っ白で何も写さない。ただ、グイグイと引っ張られるような痛みが断続的に続いている。

「奏、頼んでいいか？」

こんな時でも兄貴の声は嫌に耳に響く、兄貴と俺の場合、具体的な指示を口にしなくても大体お互いが考えていることが分かる。喉に血が詰まって声が出ないのでとりあえず親指を立てておいた。痛いけどもう少しだけならギリギリ我慢ができる気がする。

「悪いな」

そう思うならいい加減俺を女性関係のトラブルに巻き込むのを止めて欲しい。

「ごめんな、羽川。実はかなり前から羽川の家事情知ってたんだ」

嘘か本当か今日まで分からなかったけど兄貴は小声で加えた。俺には羽川さんの家庭事情について聞いた記憶は無いが、兄貴が知っているということは口調から嘘ではないと感じた。それは戦場ヶ原さんと忍野さん、そして、羽川さんも同じだったらしく全員の動きがピタリと止まった。問答無用で羽川さんを妖刀『心渡り』で斬ろうとしていたキショットまで硬直した。

「幼馴染から聞いた。高校入学するちょっと前ぐらいだったと思う」

淡々と兄貴は事実を述べていく、口調はいつも通り、何か下らない馬鹿話をする時と変わらない口調で。重くもなく、軽くもない、いつも通りの兄貴。

「知ってて何もしなかったのかにゃん？」

「ああ、別に」

「まあ、兄貴だったらそうだよな」

未だ串刺しにされたままで、徐々に生命力が奪われているのだが声が出る様になったのでスーパー阿良々木ブラザースの片割れとして一応会話に参加しておくことにした。羽川さんは俺が想像していた程兄貴のことを理解していなかったらしい。

「同情しなかったのかにゃん？ 哀れだと思わなかったのかにゃん？ 可哀そうだと思わなかったのかにゃん？ 助けようと思わなかったのかにゃん？ にゃあ、人間？ 誰でも助けるお人好しのヒーローはご主人をなんで放置したのかにゃん？」

縦に割れた瞳孔をギラギラと光らせながら問い詰めてくる。先進の毛を逆立てて怒りを露わにしている。俺から爪を引き抜くことができれば、すぐにでも兄貴を刺しに行くだろう。

「その時は詳しいことは知らなかったし、ただ少し意外だなと思った」

いつのそんな話があつたのか思い出せないが兄貴が幼馴染と呼ぶ人は一人しかいないので恐らく『彼女』と羽川さんに接点があつたのだらう。考え直してみれば『彼女』と羽川さんは少し似ているかもしれない。嘔吐きという点で。兄貴と友達以上恋人未満だった『彼女』と。

「お前が勘違いしてるみたいだから一応言っておくけど、僕は別に正義の味方でもなんでもないし、事件に巻き込まれるけど大半は不可抗力で緊急の場合以外は自分から突っ込まないぞ」

「ダウトオ！」

「嘘にや！」

「嘘も程々にしろ」

「もう少しマシな言い訳はできないのかしら、この低能が」

「さすがにそれは白々しいんじゃないかな？」

兄貴のあまりに露骨な嘘に対し、全員が思わず声を上げた。兄貴が付いた嘘の中でも最もくだらない嘘かもしれない。妹たちだってこんな嘘を信用したりしないだらう。ガツクリと肩を落とした兄貴に対し、全員の視線はあまりに冷ややかだった。

「奏、フォロー頼む」

「それ以前に俺が死にそうなんだけど」

頼むから空気読んでくれ兄貴。こっちはもう十分死にそうなんだ

よ。鈍いのは女性関係だけにしてください。お願いだから。

「キツいか？」

「見てわかると思うけど、現在進行形で刺されているからね。爪と
いうか刃物十本で」

ナイフで体中串刺しにされている状態がこれ以上続くとさすがに
辛い。生命力は吸われ続けているし、限界が近い。いつものことで
いい加減に諦めの境地に達しているけど、何故毎回兄貴の女性関係
で刺されなければいけないのだろうか。

「まあ、その、なんだ、何が言いたかったかというとき、僕は自分
なりに線引きとか判断基準を持っているつもりだってこと」

今回は声に出さなかったがこの場にいる全員が嘘だと心の中で叫ん
でいたはずだ。

「ご主人は助けないってことかにや？」

「そうだ」

ズボツではなくヌチャという音を立てて俺の腹部から爪が三本引
き抜かれた。あと数十秒で拘束が解ける。

「キスショットも戦場ヶ原もちゃんと助けてって言ったけど、羽川
はまだ何も言っていない」

先日兄貴は羽川さんに告げたのだ。連絡してほしいと、助けが欲
しければ協力すると、それにも関わらず、羽川さんは一人で抱え、

結果として怪異に憑りつかれてしまった。他人に告白し、助けを求めるのは並大抵な覚悟ではできない。それでも、それでもだ。羽川さんは兄貴や俺、戦場ヶ原さんを少しでも信用していたなら助けとすべきだった。

「だから、羽川。僕は僕のできる範囲で羽川を助けたいんだけどいいか？」

相変わらず掴み所もなく、飄々としたしかし、背には冷や汗を流しながら兄貴は羽川さんに問いかけた。

「ふざけるにや！ ふざけるにやああ！」

片腕が自由になった。グサグサと何度も胸を刺される。もう、何も見えない。動き出したキスショットを忍野さんが止めているのだけが最後に見えた。

「なあ、羽川。もう演技はいいからさ。語尾の『にや』は可愛いけどさ。大好きで毎日聞かせて欲しいくらい可愛いけどさ。後で写真撮らせてほしいくらいだけどさ」

たぶん、今のセリフ聞いた戦場ヶ原さんに後で兄貴は怒られるのだろう。そして、また俺が盾にされる。なんか、結末が見えた。ああ、いつもの平和で歪な我が家の日常だ。

「辛いんだったら、相談してくれよ。友達だろ？」

最後のひと踏ん張りでもう一度羽川さんを拘束する。戦闘担当の

意地だ。

「知ってることしか知らない。そうだよな？　だって、今どうしたらいいか分からなくて猫のコスプレして徘徊してるんだもんなあ」

かなり語弊を招きそうな表現だが、一部事実なので誰も反論しなかった。

「分からないなら、誰かに聞けばいいだろう？　どうすればいいかなって羽川の委員長ボイスで！」

そして、羽川さんの頭を兄貴は撫でた。生命力が吸われるにも関わらず、クシャクシャと真っ白に染まった髪を、親が子供にするように。ただ、兄貴は羽川翼という一個人に触れた。恐らく、彼女の人生で初めて、誰かが彼女を叱った。

「分かんないよ！　もう嫌だよ！　助けて！　阿良々木君！」

羽川さんがどれ程長い間我慢していたのか、疲弊して歪んで、壊れたのか、俺は知らないし、知ることは無いだろう。ただ、この時、彼女は間違いなく涙を流し、兄貴に助けを求めている。

「任せろ、羽川。約束だ」

なんでこの人はこんなにカッコいいのかなと思いつつ、キスショットが心渡りを振り抜くのを俺はぼんやりと眺めていた。

「奏、お疲れ。ありがとな」

「兄貴も無理しない方がいいよ。立つので精いっぱいだよ。」

羽川さんに直接触れた兄貴の顔色は真っ青だった。根性だけではないかと立っていたのだろう。膝について必死で呼吸を整えようとしている姿が滑稽だった。

「ほんと、馬鹿すぎて私の頭でもなんとっていいか分からないわ」

「兄弟そろってここまで馬鹿とはのう」

二人仲良く揃って恋人に馬鹿呼ばわりされた。戦場ヶ原さんは相変わらず無表情で、キスシヨットは心底呆れたという表情だった。

「キスシヨット。頼みがあるんだけど」

「戦場ヶ原。手伝ってほしいことがあるんだけど」

俺と兄貴はやはり似た者兄弟らしい。大方同じことを考えていた。キスシヨットは予想していたらしく着々と準備を進めてくれたが、戦場ヶ原さんは一通り兄貴を罵ってから、いつもの黒髪に戻った羽川さんを背負った忍野さんと共に羽川家の中へと入っていた。

「兄貴さ。本当にどうにかできるのか？」

「頑張ってみる」

「ある意味最低だね。ちゃんと責任とりなよ」

「分かってるって」

「何年かかるかな？」

「さあ？ 家族の関係なんてそう簡単に変わらないだろ」

今度はきちんと服を着せられた羽川さんを伴い戦場ヶ原さんと忍野さんが玄関から現れた。忍野さんが何かしたのか羽川さんは虚ろな表情で左右にグラつきながら門を抜けた。その背後で羽川家が崩壊した。クレーン要らずの解体作業だった。さすがは真祖の吸血鬼。

そして、警察のお世話、もとい警察官であるうちの両親に捕まるような事態に陥る前に倒壊した羽川家を後にした。そう、羽川家は倒壊した。立派な犯罪行為だがこれで正しかったのだろと思う。羽川さんにとっても、ご両親にとっても。

あの家は、まるで牢獄の用で、羽川さんの苦痛の象徴だった。経済的なダメージは相当なものになるだろうが、虐待を警察に通報しない対価だと思ってほしい。

「ごめんな、羽川」

ようやく動くようになった体を半ば強引に動かし、兄貴は羽川さんの頭を撫でた。気が付いているのかいないのか、羽川さんはただ、気持ちよさそうに兄貴の手に頭を押し付けた。

これから、何年かかるか分からないが、羽川さんは徐々に自分なりの幸せを見つけて欲しいと思う。少なくとも、彼女には阿良々木暦という最高の友人で、相談役がいるのだから。

めめブラジャー 最終話（後書き）

羽川編完結！ 次回より皆様お待ちかねの神原後輩が登場です！

奏君の胃痛の原因がさらに増加。今回も暦君の盾扱いされた奏君は嫉妬に囚われた後輩相手にどう対応するのか？そして、神原後輩にあこがれる火憐ちゃんがとんでもないことに…

というわけで次回より『かれんハンマー』をよろしくお願いします。

少し昔のことだが、人生最大の衝撃の一つはある日の食卓で妹に彼氏ができたという話だった。あの時は俺も兄貴もかなり暴走した。そして、妹たちに肅清された。まあ、結果として妹たちが惚れた男性はそれなりに納得のいく人柄の持ち主だった。ただ、何故か兄貴に微妙に似ていた。外見ではなく、内面的なものがかなり。それから数週間は「表」に出ることなく、いつの間に兄貴は自分の妹まで攻略したのだろうと憂鬱になったことはよく覚えている。まあ、要するに、我が家の長女と次女は揃って兄貴のような男が好きなのだ。

「あたしの彼氏？ 兄ちゃんみたいな奴だぜ」

「うーん、暦お兄ちゃんと似ているかな」

妹たちに彼氏の人物像を訊ねた時にこんな答えが返ってきた。その時はさすがに自殺しようかと思った。無性に生きているのが辛かった。

「兄ちゃんって女装が似合いそうだな。あたしと同じ顔出し」

火憐ちゃんのそんな一言から今回の騒動は始まった。火憐ちゃんが唐突に奇抜な発言をするのはいつものことだ。ただ、今日の行動はさすがに兄として妹たちの将来が本気で心配になった。特にその妄想を翌日に具現化するために行動するその行動力が。

「兄ちゃん逃げるな！正面から戦え！」

「何と戦うんだ！？」

ワンピースを着た、否、寝ている間に着替えさせられた兄貴がリビングを駆け回っていた。テーブルを飛び越え、まるでサルのように壁を蹴り、妹たちの追及を逃れている。吸血鬼化しているわけではないのに、何故こんなにも無駄にスペックが高いのだろうと常々疑問に思う。

「あたしの愛を受け入れる！」

「愛ってなんだ！？」

「どんな格好をした兄ちゃんでも愛してるぜ！」

「ヤベエ、カッコいい！」

火憐ちゃんの前蹴りをまるでマトリックスのような奇怪な動きでかわし、月火ちゃんが問答無用で突き出した果物ナイフをバックステップでよける。本当に兄貴は吸血鬼化していないのだろうか。

「か、奏シールド！」

予想通りいつものように俺は盾にされた。ただ、火憐ちゃんに踏まれるのは心地よいので許す。ああ、極楽と思っていたら月火ちゃんが落とした果物ナイフが後頭部に落ちてきた。刺さらなかったものの、普通に痛い。

「この前は羽川さんに串刺しにされるし、なんでいつもこうなるん

だろう」

痛む頬に冷たい床が心地よかった。ただ、その心地よさが無性に切なくて泣きたくなった。どうして、自分はいつも盾なのだろう。

「神様が本当にいるならもう少し俺の人生を楽しんでください」

キスショットという恋人がいるのに何を贅沢なと言われそうなセリフだが、兄貴と俺の扱いの差にいい加減泣きなくなった。むしろ既に泣いていた。

「兄ちゃん。煩い」

「奏お兄ちゃん。空気読んで」

「はい。すいませんでした」

この場で自分にできることは土下座をしながらなるべく体制を低くして難を逃れ、改造されたことでカメラ化したこの左を通じてこの状況を傍観しているであろうキスショットをちよつと恨むぐらいだ。見ているなら助けて欲しい。切実に。

「さて、兄ちゃん」

「ねえ、暦お兄ちゃん」

部屋の隅に追い詰められた兄貴の前に、いつの間にか月火ちゃんは両手に千枚通しを構えている。火憐ちゃんは全く隙の無いファイティングポーズで佇んでいる。二人とも逞しくなったという現実逃避を行いつつ、これからとてもアニメでは描写できないような光

景が広がることを予想すると二つのことを同時に考えるという離れ業を実現していた。現状打破には役立たないので意味は無い。キスシヨットに助けを求めるべきか検討中。

「正義の味方の兄ちゃんが嘘つくことなんてないよな」

「嘘つきな暦お兄ちゃんなんて眼球抉っちゃえばいいんだよ」

兄貴は妹たちとある約束をしていた。それは我が家の長女である火憐ちゃんが人前で着替える癖を直すことができれば兄貴がなんでも一つ言うことを聞くとという約束。そして、功労者である月火ちゃんは兄貴に女装してモデルをやることを要求。もちろん、兄貴は拒否した。その日の晩、寝ている間にいつの間にか、ワンピース姿にされていた。まだ、それなら笑って終わりだっただろう。

「もういいだろ！女装で十分だろうが！」

「いや、それは月火ちゃんとの約束だぜ」

「そもそも、お前の露出癖を直すためだ！」

今回は兄貴が正しいのだが妹たちに妥協する様子は無い。むしろ、これ以上拒否すれば実力行使にでるといふ雰囲気だしている。

「兄ちゃん！」

「暦お兄ちゃん！」

「奏！ お前がやってくれ！」

確かに双子なので外見に差は無い。だが、俺には妹の前で兄貴の様に女装をする趣味は無いので、これ以上胃が痛くなる前にその場を離脱することにした。

「一度、兄貴は過去の行いを顧みて死ねばいいと思うよ」

「僕が何をした!？」

「羽川さんとあの事件の後、廃墟で」

あの化け猫騒動の結果、羽川さんは家が無くなってしまった。陰悪な関係である両親とはワンクッションを置くことにして、しばらくキスシヨットと一緒に生活することになった。羽川さんは変わった。忍野さんがキスシヨット、それが両方が何か手を出したらしく、自分が怪異に憑りつかれていた時の状況をキチンと覚えていた。故に彼女は変わった。強いえて言えば人間らしくなった。ただ、若干性格がぶっ飛んでしまった。

「阿良々木君も奏君もごめんね」

「別に謝ることじゃないだろ」

「兄貴は人を毎回盾にしていることをいい加減に謝るべきだと思う。というか、謝れ」

羽川さんは暴走したから責任は問えないが、人の下着を剥ぎ取り、俺を盾にした兄貴は一度本気で自嘲するべきだと思う。

「私にできることなら、なんでも言っただけ。なんでもするから」

「な、なんでもだと！？ あの羽川さんが僕が望めばなんでもしてくれるだと！？ 僕が大好きな委員長さんを好きにしていいたと！？ あの眼球をペロペロしたり、肩をモミモミしたり、首筋をクンクンしてもいいんだな！？」

この兄貴の倒錯した発言を聞いて、なんで俺はこの人を尊敬しているのだろと本当に疑問に思い、底い続けたことを心底後悔した。

「うん、いいよ」

「え？」

「羽川さん！？」

侮蔑したような視線を向けることなく、羽川さんは笑顔で兄貴の欲望を肯定した。

「やったら、一生軽蔑するけど」

「無理だ！ 羽川に嫌われたら生きていけない」

大げさに頭を抱えて悶える兄貴。恐ろしいことに演技ではなく、本心だ。

「私も阿良々木君のこと嫌いになりたくないよ」

潤んだ瞳で兄貴の頬に手を伸ばす羽川さんの顔がそつと近づいていき、兄貴は彼女であるはずの戦場ヶ原さん以外の女性とキスをしたようにしていた。たぶん、妨害すれば俺が殺されるので黙っていたが、たぶん、左目の機能でキスショットにはバレるなとぼんやり考

えていた。

「羽川」

「阿良々木君」

この二人が恋人ということではないかと思うのだが、同時に娘が父親に甘えているような光景に見えた。現に顔を近づけてきた羽川さんの髪を兄貴が撫で、気持ちよさそうに羽川さんは目を細めていた。

「これ、気持ちいい」

「羽川。スゲー良い匂いがする」

「もう、そんなに嗅がないで」

あの事件で一番怪我をしたのは俺なんですけどと言い出すことはできなかった。

「はい。御終い。これ以上行くと私も危ないからね」

「ん、分かった」

その後、俺がキスショットが暇な時に話し相手になってくれるよう俺が頼み、生活に必要な物を羽川さん用の部屋に運び込んでその日は終わった。もし、この日の出来事を戦場ヶ原さんが知れば、兄貴がとっても愉快でスプラッターな光景になるのは間違いないだろう。回想終了。

「ごめん、僕が悪かった。だから、戦場ヶ原には言わないでくれ」

「なら、兄貴が大人しく化粧してウエディングドレスに着替えて、男装した火憐ちゃん相手に永遠の愛の誓いをしてくれ。それが口止め料でいいから」

抵抗を止めた兄貴は黙って正座して妹たちに顔を差し出した。普段、化粧品など使わない妹たちであるが、今回は非常に嬉々とした表情で兄貴に化粧を施していた。あと数分後には見る者全てが嘔吐するような光景ができあがりそうだ。何故、女装した兄貴の写真があんなに高値で売れるのか分からない。

「それでいいのか正義の味方？」

どの世界の正義の味方が自分の兄の女装した写真を売捌くというのだろうか。誰か教えて欲しい。憂鬱に成り過ぎた。キスショットに抱きしめてもらわないと本当に死ぬ。精神的に。そう思い。兄貴たちの方はなるべく見ないようにして、家を出た。

「おい、ちょっと待てい！！」

玄関から数歩踏み出したその瞬間、俺の目にはとんでもない光景が映っていた。我が家のリビングの窓を覗き込んでいる女性。怪我でもしているのか片方の手には包帯が隙間なく巻かれていた。母校の制服を着ていることから女子校生と判断できる。そんな人物が荒い息を吐きながら、制服のスカートの下に着用しているスパッツに右手を差し入れていた。

「そこで何をしている？」

警戒しつつも本気で怒鳴ってしまった俺に非は無いと思う。

「自慰だ！こんなに素晴らしいオカズを目の前にしてやることは一つしかない」

真昼にご近所に聞こえる様な大声で堂々とそんな宣言をした不法侵入者に対して、俺はただ純粹に生理的嫌悪感からドロップキックを放った。

これが後に、師弟関係となる神原駿河後輩とのファーストコンタクト。今となってはこの出会いを笑うしかない。

かれんハンマー 001（後書き）

相変わらず苦労人な奏君。神原後輩との出会いはこんな感じでした。
原作より、素直で甘えん坊になってしまった羽川さん。戦場ヶ原さ
んの危機。

そして、次回、暦君の恐ろしい秘密が明らかになります。

衝動的にドロップキックを当ててしまった相手は『神原駿河』という人物だということに気が付いたのは彼女が見事なバク転で着地をした時だった。

「あと、もうちょっとだったのに」

荒い息を吐きながら、潤んだ瞳をこちらに向ける仕草はどう見ても性犯罪者のソレだった。怒り気味の羽川さんと対面した時と同じくらい怖い。何があともうちょっとだったのかは追求しないことにした。絶対にロクな返答ではないと直感が告げていた。想像はできたが。

「誰というか、何というか、ああ、何処からつつこめばいいのかわからない。とりあえず、誰？」

完全に頭が混乱状態にあった。たぶん、誰だって同じ状況に遭遇すればこうなうだろう。誰でもいいから神原駿河と思わしきこの奇妙な人物が誰なのか教えて欲しい。

「阿良々木先輩の聡明の頭脳が既に答えを導いていると思うが私は明るいエロを追及する者だ」

「意味分かんねえよ！」

「なら、言い直そう。私は変態だ！」

「それは見れば分かるって！」

「男の娘を見て欲情する変態だ」

「ああ、そうだな！」

「先ほど不完全燃焼だったため、非常にテンションが高く、もどかしい！！自慰を再開したいのだからどうだろうか？」

「会話を成立させてくれ！マジで！」

「分かった。常に社会の支えとなっている阿良々木先輩が貴重な時間を割いて私と会話をしてくれているのだ、何とかムラムラを抑制して質問にお答えしよう」

『神原駿河』という人物とその時まで直接話をしたことは無かったが、どのような人物であるかは話で聞いていたし、一度見学した女子バスケトボール部の試合で彼女が一流のアスリートであることは知っていた。まるで、背中に翼が生えたように相手のチームを翻弄するその姿は一つの完成した技術のようで目が離せないほど人を惹きつけるナニカを秘めていた。素晴らしいスポーツマンだとその時感じたことを覚えている。本当に本人だろうか。

「OK。質問変更。うちで何をしていた？」

「フィリップ・マローウですら余裕で上回るほどの慧眼をお持ちの阿良々木先輩ならばもう既にお気づきかもしれないが、私は昨日から阿良々木先輩を追いかけていた」

「はい？」

ここで啞然として聞き返してしまった。少なくとも兄貴からそんな話は一切聞いていない。昨日は羽川さんに串刺しにされ、生命力を長時間吸われ続けて若干弱まった力を基に戻すためにキスショットと一緒にいたから昼間は兄貴と別行動だったから事情など一切わからない。また、兄貴が何かトラブルを起こしたのだろうか。ああ、そういえば服に妹の髪の毛が付着していたことが原因でまた体が改造された。鬱だ。目の前の天然褒め殺し変態も鬱だ。

「つまり、僭越ながら昨日から私は阿良々木先輩をストーキングしていた」

「神原さんですよ？ バスケ部の神原駿河さん」

「先輩なのだから後輩相手にさん付けせずに神原と呼び捨てにしてくれればいい。そもそも阿良々木先輩のような優渥な人にさん付けなどしてもらうような立場に私は到底ないのだ」

弱小バスケットボール部を全国大会まで導いた天才。それが『神原駿河』という人物に対する世間一般の評価だと少なくとも俺は思っていた。その神原駿河が何故か我が家に不法侵入をし、兄貴と妹たちの奇行をオカズに自慰をしていた。そして、堂々と昨日から兄貴をストーキングしていたことを告白した。

「意味不明だ」

思わずそう口に出してしまった。できれば間違えで欲しかったが本当に『神原駿河』本人だった。この意味不明な状況を打破するた

めに羽川さんにすぐにも連絡を取りたい気分になったが数週間前まで兄貴と別れて行動することができなかった俺は携帯電話を持っていない。このカメラと化した左目の映像を見て応援に来てくれることを願うしかない。

「とりあえず、警察呼ぶか」

警察と言っても警察官である両親だが。さすがに戸籍上存在しない人間が110番通報するわけにもいかない。事情を知っている両親に対処してもらうのが妥当な判断だろう。不法侵入は立派な犯罪だ。

「それは困る。ここで脱ぐので許してほしい」

「何故脱ぐ!？」

「私が変態だからだ!」

「堂々と宣言しているんじゃないやねえよ馬鹿野郎!」

思わず素で叫んでしまった。頭が痛い。

「しかし、この体くらいしか口止め料としてお支払できるものは無い。立场上警察のお世話になるわけにもいかないし、これは脱ぐしか…」

「どうやったらそんな発想になる!」

「阿良々木先輩ほど女性を熟知した人にはこの程度では満足してもらえないか」

「誉めてんのか、貶しているのかどっちだ？」

「むろん、褒めている。素晴らしい通り名の数々を抱えるだけのことはあると心底感服していたところだ」

「どこまで知っているんだ？」

「まず、可愛い妹さんが二人いることは事前にリサーチ済みだ」

「ふざけんな！月火ちゃんと火憐ちゃんは可愛いなんてレベルじゃない！もつと上だ！言語で表現可能なレベルを超えている！」

「む、それは失礼した。私としたことが、大変申し訳ない。阿良々木先輩ほど情に溢れる人が家族のことを単純に評価されて納得できるはずがない。これは私の完全な失言だ。重々本当に申し訳ない」

「まあ、いいから続けて」

思わず妹たちの可愛さを主張してしまい、肝心なところにつっこみ忘れたが中学生や小学生時代ならともかく、話したことも無かった先輩が自分の家族構成を知っているというのは少々薄気味が悪かった。

「女性の味方の代名詞と言えば阿良々木先輩という話を聞いている」

「具体的には？」

「阿良々木先輩と言えば『百人斬りの童貞』や『処女殺し』の通り名を持つに至った武勇伝を少々」

確かに兄貴はいい意味でも悪い意味でも有名人だ。そのくらいの噂話はあるだろう。

「そして、稀にみるマダムキラーであるという話も」

「おい、ちよつと待て!？」

兄貴が年上に好かれるのは昔からの話だったが、マダムキラー等という話は初めて聞いた。確かに一部の婦警さんや女性の先生方と仲が良く、時折お茶に誘われることがあったが、まさかそんな属性まで持っているとは。一度整理してみる。俺こと阿良々木奏「ネクロフィリア、シスコン、少々マザコン気味、キスショット一筋。自分の属性をまとめると大方こんな感じだ。これに対し、兄貴こと阿良々木暦「人たらし、ロリコン、シスコン、委員長フェチ、巨乳大好き、匂いフェチ、下着コレクター、眼球嗜好…etcと挙げればキリが無いが本日新たに『マダムキラー』の称号が追加された。そんな秘密知りたくなかった。

何故かそう遠くない未来で忍野さんと同業者で格闘系の和服美人を兄貴が堕とすビジョンが見えた。隣に小さい子供が見えたが人妻だろうか。だとしたら、お願いですから逃げてください。女たらしの兄貴から。

ああ、青々とした空に忍野さんがサムズアップして、「諦めなよ弟君。君の人生は何をしようとか、どう思っても、君のお兄さんの女性関係に振り回されることが決まっているのさ」と言っている幻がはつきりと見えた。最近疲れているようだ。

「マダムキラーという言葉は実に響きがエロい」

「ああ、そうだな」

「エロい」

「だから、分かったって」

「申し訳ない。まだ少々ムラムラしているようだ」

兄貴関連の噂は大半誇張されているが、いくつかは本当にあつた話なのでこちらとしても反論できない。特に通りの関連は実際にあつたできごとなのでなおさら強く反論できない。

「それと同時に阿良々木先輩は素晴らしい人格者であると」

「嫌、それは無い」

あの兄貴は人格者ではない。断じて正義の味方ではない。兄貴は皆が思っているほど善人ではない。あの人は十分すぎるほど歪んでいる。

「そんな謙遜な姿勢も私が想像していた阿良々木先輩らしい」

ここでようやく、ある誤解に気が付いた。神原駿河は当然のことながら『阿良々木奏』という人物を知らない。戸籍上存在しないし、ご近所の方も知らない。中学時代の後輩でも俺の存在を知っているのはごく僅かで基本的には兄貴を多重人格者として認識している。つまり、彼女にとって目の前にいる俺が『阿良々木暦』なのだ。

「謙遜じゃない。『僕』はそんな人間じゃない」

本来ならば『阿良々木奏』という人物はこの世界に存在しない。この世界に居ていいのは『阿良々木暦』で『阿良々木奏』ではない。だから、俺はいつものように兄貴を演じた。あの人たらしで、人格破綻者で、我儘で、独善者で、それでいて尊敬の念が堪えない馬鹿兄貴のために。

「それで、何で『僕』をストーキングしていたんだ？」

もし、このストーカーが兄貴や家族に害を成すなら俺はたぶん、それ程ためらうことなく血を啜るだろう。吸血鬼らしく、いつもキスショットの首を噛むように。かつて吸血鬼ハンター三人組と戦った時に躊躇なく彼らの身体を破壊したように。

「その理由を答える前に、土足かつ無断で家に入るといって、いくら謝罪しても足りないほどの無礼を働いてしまったことを謝罪させてほしい」

そう言って神原駿河は深く頭を下げた。綺麗な45度だった。

「幼い女の子の喘ぎ声が聞こえたものでつい、自分を抑えられなくなってしまった」

「気持ちはわかる」

月火ちゃんと火憐ちゃんの美声の良さが分かるとは見込みのある後輩だ。

「ところで、あの女装している人は誰なのだろうか？」

言うまでもなく、俺と兄貴は似ている。双子だから当然だ。でも、世間一般では兄貴に双子の兄弟はいないことになっている。

「遠い親戚だよ。たまたま遊びに来てる」

又チャ又チャと粘着質な音を立てて胸に渦巻く衝動を抑えながら、自分の家庭における居場所を『遠い親戚』と定義した。その場しのぎの言葉なのに、こんなにも苦しい。痛い。肉体的にも精神的にも。

「それはお邪魔してしまった。申し訳ない」

「別にいいよ。妹と遊んでいるし。さて、本題に移ろうか。それとも、警察に電話される方がいいか？」

「煩わせて恐縮なのだが、できれば場所を変えて話をさせてほしい」
「分かった。どこか行こう」

これ以上兄貴と顔が同じ理由を追及されないために足早に自宅を後にした。内臓あたりにある武器の感触を確認しながら、神原駿河という奇抜すぎる人物の後を黙って歩く、『阿良々木暦』を演じたまま。

後になって後悔したことだが、この時にさっさと兄貴に助けを求めていればもっと楽だった。兄貴に助けを求めていれば、俺が神原駿河に重傷を負わせるなんて事件は起きなかったのだから。

かれんハンマー 002（後書き）

神原のセリフは非常に再現が難しいです。書いていて改めて西尾維新先生の執筆能力の高さを垣間見ました。ぜひ、訂正や疑問点などを指摘してください。

読者の方々からの感想が原動力です。

今回はレイニーデビル VS 奏君です。

ある人物を評価する時に異常者や変態という言葉を聞くと大抵の人は良い印象を抱くことは無いだろう。少なくとも俺はそうだと思っている。ただ、この認識、もとい、法則は未だに偽物疑惑を内心抱いているものの『神原駿河』という人物には当てはまらないらしい。公園のベンチで神原駿河と会話をしているだけなのだが、楽しい。本当に楽しい。

発言はかなり常識を逸脱し、下ネタを中心としているにもかかわらず、神原駿河との会話は不快とは思えない。むしろ楽しい。ものすごく楽しい。軽快な音楽に合わせて歌っているようなそんな楽しい感覚を与えてくれる。本当に楽しい、楽しい会話なのに…

兄貴の女性関係で毎回刺される時のあの嫌な感覚が消えない。俺が兄貴の盾になり、刺された回数は三桁。その経験が全力で脳内警報を鳴らしている。ヤバいと。何か物凄く不味いと。それと何故か動物園特有の獣の匂いがする。神原駿河から。吸血鬼もどきになっしてから五感が敏感になり香水や消臭スプレーの匂いが嫌いになったがこれは正直辛い。少量でもまるでわさびを鼻の上に置かれたような感覚に陥る。キスショット曰くそのうち体が適当に調整するようになるらしい。

「神原の家は何かペットを飼ってる？」

ペットを飼っている人に動物の匂いが染み込むのは避けられないことだが、それにしても嫌な臭いだと思ってしまった。失礼だと思う。俺が吸血鬼もどきなのが悪いのであって決して神原駿河に非が

あるわけではないのに、ただ気になる。あの包帯の下が。

「頭の中と更衣室に可愛い子猫ちゃんを数匹ほど夜のお供に」

「で、飼ってるのか」

「ふむ。残念ながら私の家に動物はいないが、何か制服についていたかな？」

制服の前部分をパタパタと手で払う神原駿河。隙間なく左腕に巻かれた包帯が上下に揺れるたびに異臭が鼻をくすぐる。犬を撫でたとかそんなレベルではなく、本当に包帯に匂いが染み込んでしまっているようだ。

「その左手は部活で怪我したのか？」

神原駿河の左腕には指先までしっかりと白い包帯が巻かれている。あそこまで完璧に固定してしまうのは逆に悪そうな気がするのだが、本人はいたって平気そうだ。

「部活ではないが、見ての通りこの左腕が原因で今は休ませてもらっている」

「スター選手が抜けてチームの方は大丈夫なのか？」

「私のチームを、そんなワンマンチームみたいに言われるのは心外だぞ、阿良々木先輩。私のチームは私が抜けた程度でそう簡単にブれるような軟弱なチームではない」

神原は語気を強くしてそういった。

「バスケットボールは過酷なスポーツなのだ。一人の力でどうにかなるものではない。ポジシヨンの、つまり役割として私が目立っているのは認めるのにやぶさかではないが、それも全員の力があってこそなのだ。だから、私が浴びている称賛はチームで分け合うべきものなのだ」

「それは『僕』が悪かった」

立派なスポーツマンシップだと思う。チームメイトのことを考え、常に謙遜な姿勢で物事と向き合っている。少々行き過ぎのような気もするが、チームのことを顧みているその考えは立派だと思う。本当にいい奴なのだと思う。

「早く治るといいな。みんな待ってるから」

「それは私の様な小さき者にとっては勿体無いお言葉だな。阿良々木先輩は本当に思いやりのある人だ。細かな気配り、痛み入る」

もう一度包帯の巻かれた左腕をしてみる。確かに痛々しい外見なのだがどうも何かが引つ掛かる。湿布か何か包帯の下に貼っていてそれが臭いの元なのかもしれないが、無性に神原駿河の左腕が気になる。痒いところに手が届かない様なそんなもどかしい感覚。

「ギブスしてないから骨折じゃないよな？」

先ほどまで笑顔だった神原駿河は若干その笑みを消しつつも頷いた。そんな神原駿河を前にしてふと思ったことを口にしてしまった。

「何か動物に噛まれたりした？」

例えば、『吸血鬼』。春休みに俺と兄貴が遭遇し、結果としてギロチンカッターという一人の人間が亡くなったあの一連の事件。俺は最愛の人を手に入れ、前から欲しかった兄貴や家族を守ることができる体を手に入れた。ハッピーエンド。今のところは。

例えば、『蟹』。結局その全貌を肉眼で見ることが叶わなかったが、確かな重みを持って戦場ヶ原さんの人生を圧迫し、苦しめた。兄貴との出会いにより蟹に悩まされることはなくなったものの、過去の苦痛は消えることは無い。

例えば、『蝸牛』。八九寺ちゃんが遭遇し、長い間終わりの無い旅路を彷徨う状態に陥らせた存在。八九寺ちゃんが怪異なのか、別に本体があるのか。いずれにせよ。交通事故で亡くなった一人の少女が孤独を味わうこととなった。

例えば、『猫』。ネグレクトという最悪の虐待をその身に受け続けた羽川さんの絶望の捌け口。兄貴が差し伸べた手に救いを見出したものの、根本的な解決には至っていない。

特に確信があったわけではない。ただ、漠然と、漫然と、絵の具を水で溶かすような、モヤモヤと違和感が胸の中で広がっていく。気分が悪くなると同時に思い出す。脳が、心というものがあるなら心が、魂というものが吸血鬼もどきにあるのなら魂が、キスショットと初めて出会った、あの瞬間を。初めて怪異という非日常と接した時と似たような、あの感覚。あの肩に生暖かい手が置かれているようなあの感覚が。

「自主練習の最中に捻ってしまった。私は本当にまだまだ未熟ということだ。阿良々木先輩を煩わせてしまったのならば心から謝罪せ

て欲しい」

「ん、こっちこそ悪かった。あまり話したいことでもないだろうし」

瞳孔が先程よりも開いている神原駿河が素直に怖いと思った。

「ところで阿良々木先輩。ここ数日何か変わったことはなかったか？」

怪異絡みのことなら最近連続で巻き込まれているが、まさかこの前の羽川さんの件でも目撃されていたのだろうか。屋根の上を疾走していたから別段見られてもおかしくはない。

「特に『僕』はいつも通りだけど。受験生だし」

とはいえ、毎度の如く兄貴は女性関係のトラブルに巻き込まれている。そして、いつものように俺は刺されるのだと思う。ただ、神原駿河と兄貴の接点が見えてこない。でも、怪異の気配といつもの不幸の予感がする。

「そうか。それではこれ以上お邪魔にならない様に今日はこれで失礼するでしょう」

トンツとベンチから立ち上がり、たっ、たっ、たっ、たっ、ターンと公園のフェンスを軽々と飛び越えた神原駿河は最後にこちらを振り返って、少し頭を下げた。

「では、ご武運を阿良々木先輩」

まったく面白い後輩だと思う。面白すぎて本気で声を出して笑っ

てしまいそうだ。そのまま誰もいなくなった公園のベンチにグツタリと体を預けて太陽に向かって手を伸ばした。腹が立つくらいに青空。吸血鬼もどきが公園で日光浴をしているというなんともシュールな光景だった。

「キスショットの野郎。また、人の体弄ったな」

左目の視界をキスショットに盗られているというのはこの前知った衝撃の事実だったけど、まあ、左目に細工されているなら右目にも当然何かされているともっと早く考えるべきだった。

「この前聞きましたけど、怪異が見える眼らしいですよ」

「あー、やっぱり。最後あたり神原の左手からなんか黒い霧みたいなのが見えてから変だとは思っていたんだけどさ」

俺にとって、家族と家は本当に安らげる場所で帰りたくないという想いを抱くことなどないと断言できる。家に帰りたくない者にしか見えないはずの『蝸牛』が見えるのは自分が吸血鬼もどきだから見えていたのかと思っていたのだが、勘違いだったらしい。となると、なんで兄貴は見えているのだろ。ああ、ロリコンだからか。

「どうも、お久しぶりです」

「久しぶり。今日は『噛みました』って言わないんだ」

「弟さんだと阿良々木さん程ノリが良くないのでプロデューサーとしては質を保つために一人に限定しているのです」

「なるほど、さすが八九寺Pと言われるだけある」

「ちなみに『傷物語』の映像化も私が担当することになりました」

「マジで!？」

「ええ、そして、私の権限で弟さんも出演することになりました!」

「ええ!？」

「スカントマンです」

「何そのいかにも嫌われそうな名前?そんなに好かれてないかな? スタントマンの間違いだね?」

「失礼噛みました」

「嘘だ」

「神を見た」

「嘘じゃない!？」

どうやらサービスで俺にもお決まりのパターンを披露してくれたらしい。八九寺ちゃんの優しさが胸に染みた。八九寺ちゃんは外見こそ幼いが実年齢は俺よりも遥かに上だ。元々人間から怪異になったことを鑑みれば先輩的な立場だ。まあ、生まれた形を考えれば俺が人間に該当するかどうかは別として。

「阿良々木さんがボコボコにされたり、グチヨグチヨにされたりすると女性ファンからクレームが来ますので、弟さん頑張ってください」

い」

「結局『傷物語』でも盾役なのか！」

「プロデューサー権限です」

「横暴だあ！」

辛い世の中だった。そして、兄貴は相変わらず主役で、俺は脇役だった。別にいいけどさ。たまには主役になりたいと思う今日の頃。

「兄貴は主役だけど、ヒーローとか絶対無理だから」

「変態ですからね。兄弟揃って」

「俺まで変態って認識されてるのか」

外見が小学生の幽霊に言葉の暴力で負けて膝をついている高校生がいた。俺だった。それでも、すぐに復活するのが吸血鬼もどき。メンタルが強くなければあの兄貴の弟なんてやってられない。

「ちなみにどっちの方が変態だと思う？」

顎に手を当てて、若干小首を横に向けた八九寺ちゃんはツインテールを揺らしながら、とても冷めた表情でこう言った。

「どっちにしろ、シスコンは色々終わってると思います」

その後の記憶は無い。本当にない。完璧な空白。気が付いたら、

日が暮れていて、犬の様に無人の公園で四つん這いになって頭を垂れていた。一言で今日一日を表現するなら、厄日だ。

「キスショットのどこ行くか」

パラパラと剥がれ落ちる粒上の砂を見ながらふと思う、自分は生物的には吸血鬼なのか、人間なのか。何なのか。どうも最近、くだらないことで悩みがちな気がする。

「ん？」

日が暮れ宵闇で街灯が照らす路上以外黒く染まった公園の入り口に奇妙な風体の人物が立っていた。雨合羽。雨が降っているわけではない。フード付きの、膝の下まで伸びた長いタイプの雨合羽。そして、ゴム手袋と長靴という全身を隙間なく覆う徹底した格好。明らかに不審者であり、異常者であり、獣臭がプンプンする怪人。

「厄日だ」

呟いた瞬間に地面が陥没した。上段から左腕の叩きつける様な一撃。反射的に後ろに下がっていなかったら頭がい骨が潰れていた。終始無言の連続攻撃。翼を出して後ろに跳躍、相手の間合いから逃れるために空に逃げた。逃げて、逃げて、飛んで、飛んで、今日は月が大きいことに驚いた。遙か遠くの地面にあの怪人の姿が見える。

「あー、最高にハイッてこんな感じが」

唐突に気分が高揚して、抑えが利かなくなった。犬歯がはつきりと唇に触れた感触が残っている。クルクルと空中大車輪をしながら、落下していく、ビデオカメラのズームのように、地面と雨合羽の怪

人が近くなってくる。近づきすぎた。

「プギユッ」

左のストレートが顔面に食い込んだ。変な音が喉から漏れた。滅茶苦茶痛い。

「やっぱり、厄日だ」

ストレス解消のためにこの怪人には少々痛い目にあってもらおう。誰かは大方の予想がついているけど、俺を兄貴と勘違いしている以上、コレは兄貴に対する敵対行為だ。だから、手加減をする理由なんてない。

「暴力沙汰は部活に迷惑が掛かるよ」

一応注意はしたが、返答は拳だった。

かれんハンマー 003 (後書き)

遅くなり大変申し訳ありませんでした。ようやく日常に余裕が出てきたので投稿を継続したいと思います。

自分は自殺願望が強いという自覚は昔からある。兄貴の影として、家族にとっては異端であり、負担として生まれてしまった自分が消えれば、家族の重みにならなくて済むという思い。だから、キスショットと初めて会った時に俺だけ殺して欲しいと願った。嫌々ながらも内心は喜んで兄貴の盾を演じ続けた。必要として欲しかった。存在することを許してほしかった。

「案外マゾかもしれない。その辺りはどうだろう?」

俺のつまらない問いかけに対して、雨合羽の怪人、十中八九『神原駿河』であろう人物は終始無言のまま、ハンマーの様に左腕を振り下ろしてくる。そのたびに俺の体のどこかが拉げ、血が流れ、凹む、痛みが限界を通り越して、熱く成り過ぎて、ほとんど何にも感じられない領域まで達している。

「ああ、痛いなあ」

痛覚はある。ほんの数秒前までは苦痛で叫んで、呻いて、無様に転がっていた。徐々に感覚が麻痺し、今は表面が熱くて、内側が冷えていく感覚。キスショットに血を吸われる時の死んでいく感覚。体が生命活動を段階的に停止していく感覚。

「キスショットの恋人に成れたことはスゲー嬉しいんだ。未だに好きとか、愛とかよく分からないけどさ、傍にいて笑っていてほしいって気持ちにはつきりと分かるんだ」

あの時、噛まれたこと、自分を差し出したことに後悔など無い。

ただ、体を持たずに生まれたとはいえ、『人間』として俺を産んでくれた両親に対して『人間』というアイデンティティーを捨てたこと。それだけが嫌な罪悪感として残っている。後頭部がズキズキと痛むほどに。

「なあ、神原。もしも、自分の息子が生物学的に『人間』を止めてしまったら、親はどう思う？ 変わらずに接してくれるか？ 見捨てるか？ 化物として扱うか？ 無視するか？ 嫌悪するか？ 絶縁するか？」

自分の中にある消えない葛藤。自分は体を持たずに生まれた。それでも、つい最近まで自分は『人間』だと思っていた。吸血鬼もどきになり、時間制限があるとはいえ、自由に動ける体を手に入れた。その対価として、阿良々木家の次男『人間の阿良々木奏』という存在は死んだ。

「神原のその左腕を見ても神原の家族は相変わらず、家族でいてくれると思うか？」

俺の体と地面を殴り過ぎて、ゴム手袋は原型を留めていないただのゴムの塊になっていた。その内側からは黒い動物の毛並みと鋭い爪、露わになり強くなった獣臭が漂っている。兄貴ならそれも良いとか言いそうな気がするが、俺は匂いフェチではない。

「獣臭フェチとか絶対に嫌だ。でも、兄貴なら普通に有り得そうで怖い」

あの兄貴なら何故かこの獣臭でも喜びそうな気がした。鬱だ。

「なあ、神原。最近、彼女ができたんだ。俺には勿体無い位の美人でさ。毎日が今までと変わって見える。幸せなんだ。幸せなだけ

どさ。怖いんだ」

あまりに急激に『人間』を止め始めている自分が怖い。昔ならこんな感覚を抱くことなんてなかっただろう。自分の体というものを持ってから、思考回路が変わり始めた。兄貴の寄生虫じゃなくて、断固した一個人としての自分の確立と『人間』離れに対する葛藤。

「人間が美味しそうに見えるようになった自分が怖い」

頭の中は激痛の最中にも関わらずクリアだ。目の前の敵の血を吸えと騒いでいる。冷静に、落ち着いて、零さない様に、テンションも高い。でたために高い、理性が削れてしまったようなハイテンション。これ以上暴走すれば、誰かに噛みついてしまいそうだ。

「これが暴走状態か？それともいい加減にストレスでキレたか？神原はどう思う？」

いい加減に受けるのは辛くなったので回避開始、動きは速く、威力も高いが左腕だけの単調な攻撃は避け易い。

「俺のこと殺す気か？俺が吸血鬼もどきじゃなかったら最初の一発で死んでたぞ」

吸血鬼ハンターを半殺しにした俺が何か言えるような立場ではないかもしれない。ただ、改めて、自分を躊躇なく殺しに来る相手は怖いと思う。

「いろいろ悩むけどさ、やっぱり死ぬのは怖い」

テレビ番組だったか、小説だったか覚えていないが自殺を計画的

に実行できる人はほとんどいないらしい。そんな小さな情報だが、衝動的にキスショットに血を捧げた身としては嫌な心当たりがあった。あの時の自分は一目惚れし、危機的状況もあって衝動的に一種の自殺をした。正直もう一度同じことができるかと言われれば即答はできない。

「兄貴や家族の敵は容赦なく殺すことか口では言ってるけど、やろうと思うと難しいな」

返答は無い。終始無言。雨合羽の下表情も見えない。別に自問自答のつもりだから、応えは期待していない。羽川さんの時、振っていた武器は怪異殺しで直接的な殺傷能力は無い。吸血鬼ハンターが相手の時は暴走とキスショットを捌られた復讐と羽川さんが人質に取られた結果としての衝動で、誰かの命を奪うことなんてなかった。暴力を振るうことに戸惑いはない。そのはずだが、最近、手加減ができる自信がなくなってきた。

「漫画のヒーローが悪役殴り飛ばして、よく説教とかしているけど、俺には無理だ」

腸から引きずり出した三日月の鎖部分で防御しながら、考えを声に出してまとめる。吸血鬼の能力を使えば楽に勝てそうだが、そもそもコレは俺の勘違いで、相手は怪異ですらないのかもしれない。神原駿河という人間が異常に毛深いだけなのかもしれない。まあ、この右目がある以上さすがにそんな間違いはないだろうけど。

「説教できる程、まともな『人間』でもないし、自分が『人間』に該当するかも分からない。だから、馬鹿みたいに昂って、怖いって感覚を消そうとする」

[illegible]

「なあ、神原。こうやってコンクリートをバラバラに粉砕できるお前の攻撃を余裕で捌いている俺は間違いないく、化物だけど、両親は、妹は、一応『人間』に分類されていた頃と変わらずに接してくれると思うか？」

神原駿河は答えない。終始無言のまま攻撃を続ける。

「なあ、神原には慕ってくれる後輩だとか、OGだとか、たくさんいるだろ？その人たちは『人間』を止めても同じように接してくれるか？」

最近、本当に怖くなる。もし、妹に化物扱いされてしまったら自分は耐えられるのかと。それと同時に、この人外の体で暴れるのが楽しい。自分の意思を持つことが嬉しい。

「少なくとも僕は奏が化物だなんて、まあ、昔は何回かあったけど、

今は無いぞ」

公園の入り口の方から第三者の声が聞こえた。

「……え？」

街灯のぼんやりとした灯りに照らされ、悲しそうなキスショットと呆れたような表情をした兄貴、兄貴の後ろに寄り添うように立っている羽川さんがそこにいた。

「いつからそこに？」

「割と初めの方から、ついでに左目からのライブ映像で八九寺にシスコン呼ばわりされた時ぐらいから羽川と見てた」

「死にたい。マジで、よし！神原！俺を殴れ！」

次の瞬間に胸部の骨をへし折られた。一回死んでまた再生した。どうやら現実らしい。あの恥ずかしい独白は全部筒抜けだったようだ。

「僕なりの答えだけど、解釈は人によるだろうけど、まずうちの妹は大丈夫じゃね？アイツらも十分『人間』止めてるし」

「おい、コラ」

「それにな、奏。お前一番重要なこと忘れてるぞ」

珍しく真顔で俺と視線を合わせてくる兄貴に思わず、俺は生唾を飲んで構えた。

「ネクロフィリアで四肢の無い吸血鬼に一目惚れして、マゾで、シスコンで、マザコンで、外見小学生の幽霊に罵られて一日中公園で這いつくばっていたお前は『人間』云々以前の問題だと思う」

「珍しくシリアスな空気だと思ったと言うことに限ってソレか!？」

本気で殺してやろうかこのクソ兄貴。なんで横にいる羽川さんま
でウンウンと肯定している。

「まあ奏君だしね」

「うむ」

「キスシヨットは今反省中だから、黙ってる」

「うむ。そのすまぬ」

よく見ればキスシヨットは首から『反省中』と書かれた紙を首から下げていた。俺がいない間にいったい何があった。なんか、キスシヨットが物凄く腰が低い。兄貴と羽川さんと怯えた目で見てるし、なんか可愛い。抱きしめたい。

「奏を勝手に人体改造した罰を少々」

「テメエ人の彼女に何しやがった!？」

戸惑っている様子の神原駿河を放置して、兄貴に向かって蹴りを放った。しかし、それを映画マトリックスのような奇怪な動きで兄貴はかわす。本当に人間か。

「待て、奏」

キスショットに服の裾を握られ地面に落ちた。地味に痛かった。

「奏の気持ちも分からず、その、すまぬ。ただ、儂はもう、うぬを失うわけにはいかぬ。断じてそれだけはあつてはならぬ！ だから、儂は…少しでも早く奏に儂と同じ世界を見て欲しかった」

「ああ、分かった。もう大丈夫だ、大丈夫だから」

泣きそうな顔の、本当に申し訳なさそうなキスショットを見ると、キスショットにも元『人間』と付き合うことの不安、そして、また失うのではないかという恐怖を抱いていたことがよく分かった。お互いに悩みを抱えていたことが嬉しかった。

「サンキュー、兄貴」

「おう」

やっぱり兄貴は無駄にカッコ良かった。

「阿良々木君！危ない！」

羽川さんの悲鳴が響いた。雨合羽が視界いっぱいに広がった。雨合羽の怪人、もとい、神原駿河が兄貴に襲いかかった。キスショットを抱いていたぶん完璧に反応が遅れた。その間に、左腕が、あの毛むくじらの左腕が兄貴と盾になろうと体を傾けた羽川さんに伸ばされていた。

本当に反射的な行動だった。

何も考えていなかった。

ただ気が付いたら、三日月を投げていた。

銀色の凶器が神原駿河を貫いた。

かれんハンマー 004（後書き）

奏君とキスショットが抱える葛藤の話でした。珍しくオールシリアス。

暦君は変態ながらもきちんと『兄貴』として頑張ってます。そして、虎視眈々とまるで『虎』の如く暦君にアプローチを始めた羽川さん。次回はいよいよ戦場ヶ原さんと火憐ちゃんの参入です

暦君に『匂いフェチ』の属性を加えるか迷いました。皆様はどう思われますか？

パニック状態で頭が真っ白になってしまった。

人を殺してしまったかもしれないという恐怖と込上げる吐き気に視界が真っ白になった。何か直接的な行動を起こすことなく、ただそこで茫然としていた。そんな木偶の坊みたいな俺とは違い、兄貴と羽川さんは動くのが早かった。

「しっかりしろ！」

「阿良々木君！動かしちゃ駄目！」

キスショットはあまり興味が無いのか黙って兄貴と羽川さんを眺めているだけ。俺は自分が動けるようになるまで、若干の時間が必要だった。それがどれ位の時間だったか、分からない。短かったのか、長かったのかそれすら分からない。ショットが大き過ぎて何も考えられなかった。

「離れる」

キスショットが淡々と告げ、羽川さんと兄貴の襟首を掴んで数歩下がった。その有無を言わさぬ調子にあの兄貴ですら押し黙った。

「外れたようじゃな。ある意味」

その言葉を聞いて、レインコートの人影が無言で起き上がった時、醜くて卑怯な俺は安堵していたのだと思う。ああ、よかった。自分は人を殺していないんだと。

「一応言っておくが僕は一切手助けせんぞ」

「…分かった」

ユラリという効果音が似合いそうな空気を醸し出しながら『神原駿河』は起き上がった。俺が彼女を傷つけてしまった証拠にレインコートの左腹部が裂け、シャツらしき布が若干赤黒く染まっているのが垣間見える。

「すまない。本当に申し訳ない」

吸血鬼もどきになってから美味しそうと思える様な血液の匂いが鼻を擽る。幸いそれ程大きな怪我ではなかったらしい。あまり鼻孔を擽る匂いが強くない。

「さっきまで俺が殺されかかってたのにな」

変な気分だ。先ほどまで自分を殺そうとしていた相手に対し、防衛本能から生命を奪おうとしていたことを謝罪しているのだから。矛盾している。完璧に矛盾した行動だ。

「でも、本当にごめん」

矛盾していても謝りたかった。浅ましいとは思うが本当に罪悪感を抱いていた。汚い自己保身だと我ながら思う。だから、黙って殴られた。剥き出しの獣の腕に。何発もボコボコに。

「阿良々木君止めなくていいの？」

「たぶんな」

「ほつつておけ。くだらぬ感傷じゃ」

後ろから外野がヒソヒソと話している声が聞こえる。その間に10回前後殴り殺された気がするがそれは些細なことなのだろう。

「そろそろ限界かな」

吸血鬼もどきでも意識を失うことがある。肉体が損傷すればまるでリセットボタンを押したかのように戻るものの、意識が戻る時は何故か時間差がある。そして、連続で殺害され続けるとまるでブレーカーが落ちた時のように意識がブラックアウトしてしまう。それは避けないといけない。でも、反撃できる気がしない。手詰まりというわけだ。

「あら、総揃いで何をしているのかしら？」

助けとは意外な時に訪れるものらしく、凜とした声が公園に響いた。兄貴の恋人にして、たぶん吸血鬼よりも強いんじゃないかと素で思える毒舌製造機こと、戦場ヶ原さんの登場だ。本日の髪型はポニテールで、黒と紫を基本としたワンピースだった。

「まあ、覗いていたから聞くまでもないのだけど、できれば音声を拾えるようにしておいて欲しかったわ」

片手にぶら下げた鞆からノートパソコンの一部が覗いていた。そ

ういえば、俺の左目からの映像は戦場ヶ原さんでも覗けるのだった
ということをも今になって思い出した。自分のプライバシー無さに泣
けてくる。

「で、その神原。人の義理の弟相手に何をしているのかしら」

将来の義理の弟とか呼ばず、もはや俺が義理の弟になることが確
定事項となっていてこの人らしいなと思う。兄貴と別れるこ
とないという決意表明と多すぎるライバルに対する牽制だろう。

「あ、逃げた」

金縛りにでもあったかのように固まっていた『神原駿河』は本日
最速の速度でその場を離脱した。あまりに早すぎて誰も追おうとす
ら思わない程。

「アイツ怪我大丈夫なのか？」

兄貴がポツリと呟くのが聞こえた。

「ちよつと、行ってくる」

まだ漂っている血の匂いを辿りながら、電柱の上を飛び移りなが
ら移動する。映画のワンシーンの用で普段ならハイテンションでや
るこの行為も今日に限っては何の感慨も浮かんで来なかった。

昼間に若干緊迫感がありながらも楽しい会話を交えていた後輩が
夜になればレインコートと長靴姿で襲ってくる。それもゴリラ染み
た怪力で。殺傷能力を備えた異形の左腕で。

「……意味不明だ」

血の匂いを辿りながら走る。犬の気分はこんなものなのだろうか
と脳内で自問自答しても答えは無い。仮に『神原駿河』のあの獣の
腕が怪異によるものだったとする。もし、怪異によるものだとすれ
ば、ここ数か月で『吸血鬼』『蟹』『猫』『蝸牛』そして、元々抱
えていた『合わせ鏡』を含めると合計5つの怪異に短期間で出くわ
したことになる。多すぎる。偶然と呼ぶにはあまりにも多すぎる。
誰かが意図的に仕組んでいると思うのは単なる被害妄想だろうか。

恐らく因果関係は無いのだろう。少なくともそう思いたい。キス
ショットは自分の意思でこの町を訪れたと言っていたし、八九寺ち
やんも彼は10年以上前から活動していたのだ。誰かが仕組んだと
いう可能性は極めて少ない。

気になるのは怪異というものがこれ程頻繁に遭遇できるものなら
ば、世間に知られていても不思議ではないということ。何か違和感
が残る。何だろう、この奇妙な違和感は。そんなことを考えている
間に匂いに追いついていた。追いついたことに安堵する暇すらなく、
やっぱり今日は厄日なのだと改めて実感した。匂いに集中し過ぎて、
注意を怠っていた。

民家の塀を逆立ちで歩くという人間離れした曲芸を日課としている
大事な、大事な妹が傷つき、虚ろな瞳をした『神原駿河』と向き合
っていた。正確には火憐ちゃんが『神原駿河』に向かって逆立ちで
移動していた。シニールすぎる。

「火憐ちゃん！」

一旦引き返し、道路に飛び降り現場に向かった。妹があの獣の腕

で殺されるのではないかと思うと全身の毛が逆立つ気がした。

「あ、兄ちゃん！神原先生が怪我してて！」

面識があつたのかと尋ねるべきか迷つたが、火憐ちゃんと『神原駿河』の間に割って入った。これで万が一襲おうとすれば対処できる。

「阿良々木先輩？私は何を？」

暴走状態では無いらしく、きちんと話を通じた。獣の腕も見えないようにレインコートの内側にしまいこんでいる。あまり効果的ではないがしばらくは誤魔化せるだろう。

「火憐ちゃん。兄貴がこの先の公園にいるから呼んできて」

「嫌だ！兄ちゃんなら神原先生に変なことする！それを見過ぐすことは正義に反するんだぜ！」

「…泣いていい？」

「いつも妹の裸見て鼻血出してるじゃん」

「綺麗な女の人の体を見て鼻血を流すのは割と普通だ」

「そうなのか！？」

「この感覚は女の子には分からないよ」

「よし、男になって実感してやる」

「それはさすがに無理だから」

「甘いぜ兄ちゃん！人間やろうと思えばなんだってできるんだぜ！」

「お願いだからそれだけは止めて！無茶するくらいなら俺をもっと愛して」

「無理だ！二人とも好きだけど、私が愛しているのは一人だけだ！」

「俺だよね！？頼むから俺だと言って！」

「そんなわけ、ねえじゃん。私が愛しているのは何時だって一人だけ」

キスショットと同じくらい愛している妹にそんなセリフを言われ、もう俺の心は崩壊寸前だった。

「…とりあえず、兄貴呼んできて。近くの公園にいるから」

「私からも頼むよ」

「分かりましたあ！」

普段から尊敬していると豪語している『神原先生』の鶴の一声で火憐ちゃんは兄貴を呼びに行ってくれた。やっぱり、火憐ちゃんは素直でいい子だ。少々素直すぎるところが偶に不安になるが。

「さて、何から話そうか神原後輩。もう一人称は『僕』じゃなくていいな。さっきまでのことどれくらい覚えてる？」

「…夢でなければ大方全部」

青褪めた表情で『神原駿河』はこっちを見つめていた。まだ、腹部から少しだけ血が滲んでいる。ポタポタと零れ落ちる水道水のように灰色のコンクリートが斑に彩られていく。

「なんで、無傷なんだ？」

その問いに対する答えは簡単。

「俺が人間じゃないから」

今までも、そして、これからも。

かれんハンマー 005（後書き）

東日本大震災で被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

作者は幸い大きな被害を受けることはありませんでした。しかし、保険関連の仕事に携わっているため、震災以降、ほぼ一か月仕事だけしかしておらず、執筆が遅れてしまいました。読者の皆様に心よりお詫び申し上げます。

可能な限り早く続編を投稿しますので今しばらくお待ちください

かれんハンマー 最終話

正氣に戻った『神原駿河』は何故かとても完成していて、綺麗に見えた。

端がボロボロに破けたレインコート、俺が傷をつけた腹部からはみ出した濁った斑色に染まったスポーツシャツ、火憐ちゃんが居なくなったことで再び露わになった異形の左腕、汗ばんだショートカットの髪、そして、その表情。悲しみと罪悪感が混ざり合っているのに、思わず後退してしまいそうな凄味がある。この感覚をよく知っている。嫉妬。とても深くドロドロとした嫉妬。

兄貴に対して頻繁に抱く感情。ただ、それをもっと純粹にしたもの。曖昧な自分と違い『神原駿河』の姿は完成しているように思えた。嫉妬という感情を表現するという意味でとても完成しているように見えた。

憎い対象を打ち砕くための異形の腕という武器、それを押し止める理性が苦悶する表情に表れて、焦燥が体から噴き出る汗に裏付けられている。反発し合う二つの感情がドロリと混ざり合ったその姿は、嫉妬という感情をうまく表現しているように見えた。矛盾しているという意味で、憧れと妬みという正反対の要素が混合しているという点で。

それと同時に別段確固たる確信があるわけではないが、『神原駿河』という人物はとても純粹なのだろうという感想を抱いた。常に兄貴の視界から第三者視点で物事を眺めてきたからだろうか、漠然

とした感覚だったが、間違っではない様な気がした。

「さて、何から話せばいいかな」

ビクツと『神原駿河』の肩が揺れた。はつきりと警戒心を露にしている。

「…あなたは一体誰だ？」

「名前は阿良々木奏。阿良々木暦の双子の弟」

「阿良々木先輩に弟はいないと伺っているが」

「複雑な家庭事情でね」

最近まで『合わせ鏡』の中で生きていたことをこの場で告げても信じられることは無いだろうし、証拠も無いので適当に誤魔化した。実際に複雑な家庭事情を抱えているし。

「次はこっちから質問。うちの兄貴が何かした？もし、何かしてしまったなら謝らせてほしい」

あの鈍感が俺のいないところで何かをやらかしたという可能性は十分にあり、『神原駿河』本人、もしくは知り合いにセクハラかもしれない。羽川さんの下着を未だに奉っているあのバカならやりかねない。というかやる。割と積極的に。

「…この腕のことは聞かないのか？」

クイツと異形の左腕を持ち上げるが、正直そのことは大した問題

ではない。大切なことは家族の安全と、兄貴がトラブルを起こしたか否か。少なくとも『神原駿河』には異形の姿で『阿良々木暦』を襲う理由があり、それは解決していないということは分かる。

「まずは家族の情報と安否を優先したいんで」

「なるほど。別に阿良々木先輩が何かを私にしたというわけではない。私の一方的な想いが原因だ」

「もう少し具体的に」

「私は戦場ヶ原先輩を慕っている。はつきりとした恋愛感情を持っている」

「…はい？」

聞きなれない言葉に思考回路が完全に停止してしまった。いきなり何を言い出すのだとか、もう一度言っただけいいとか、切り返す精神的余裕が全くなかった。

「私は同性愛者だ」

「あー、うん」

「私はレズだ」

「OK。もう分かったから」

人其々愛の形は自由だと思う。例えば吸血鬼と人間の恋とか。ただ、本物の同性愛者と話すのは初めてなので若干戸惑ってしまった。

そうだと思いたい。決してその場から逃げ出したい気分になったわけではない。

「私は戦場ヶ原先輩と中学時代からの知り合いで、その戦場ヶ原先輩の御体のことも知っている」

詳細は分からないが『蟹』に取りつかれていた頃、戦場ヶ原さんの体重が異常な値だったことは知っているらしい。

「それで？」

「一度、私は何とか力になれないかと思って、声を掛けたのだが、拒絶されてしまった」

あの性格なら他人から何を言われても拒絶するような気がする。文房具を口の中に入れて脅されても尚食い下がる人間なんて、精々兄貴ぐらいだ。

「戦場ヶ原先輩は、変わっていた。私が知っている戦場ヶ原先輩ではなかった」

「へえ、昔の戦場ヶ原さんは違ってたんだ」

少なくとも文房具を凶器にすることはなかったようだ。それとも、ただ人前で出さないようにしていただけなのだろうか。

「最近になって、阿良々木先輩と戦場ヶ原先輩が付き合い始めたという話を聞いた」

「もう噂になってるのか」

恐るべし女子のネットワーク。誰にも口外していないはずなのにいつの間に漏れた。

「どうして、私じゃないのかと、隣に居たいとそう願ってしまったのだ」

獣の腕がドクンと躍動した気がした。

「この猿の腕に」

猿の腕の伝承は確か願い事を三つ叶えるとかそんな内容だった気がする。

「ありがとう。大体分かった」

胃の痛みとストレスが急上昇中だった。結局、いつもと変わらな。また兄貴の女性関係で俺が殺されただけのことだった。まさか同性愛者にまで嫉妬されるとはさすがの兄貴も予想していなかっただろうけど。

「要するにアレだ。お約束」

阿良々木暦の女性関係で阿良々木奏が暴力に晒される。毎度毎度お約束をありがとうございました。無神論者だから神様に文句すら言えないけど。そろそろ件の猿の腕の話でも聞こうかと思っていたら、何故か背後から炸裂音が聞こえた。

「兄ちゃんはあたしのだあ！」

振り返ると最愛の妹がブロック塀を素手で破壊し、戦場ヶ原さんが投擲したと思われる無数の文房具を空中でバラバラに分解していた。マトリックスも吃驚の破壊力だ。

「ありえねえー」

試しに伸ばした爪で掌を軽く切ったら血が出て痛かった夢ではないらしい。夢であってほしかったけど、現実逃避はできないらしい。

「オイイイ！なんで、火憐ちゃんと戦場ヶ原さんがマジバトルしてんの！？」

あの馬鹿兄貴今度は何をした。あの火憐ちゃんが本気で兄妹以外を攻撃するなんて余程の緊急事態だぞ。

「つて、足早っ！？」

元々火憐ちゃんの身体能力がずば抜けて高いのは知っていたが、戦場ヶ原さんの足も驚くほど速かった。フォームが滑るように滑らかで、無駄を感じさせない綺麗な走り方だった。サバンナを疾走するチーターはあんな感じなのだろうか。

「神原手伝いなさい！その諦めの悪い妹さんをちよつと教育しないといけないの」

「せ、戦場ヶ原先輩。私は戦場ヶ原先輩の隣にいても…」

「話は後にして今すぐ手伝ってくれと嬉しいわ。まったく、なんなのよ、あの子の身体能力」

戦場ヶ原さんが教育指導なんて行ったらとんでもないことになるのは容易に想像できるので、当然兄としては妹を守ることを優先させてもらう。

「神原先生そこ退いてください。ソイツ倒せない」

「火憐ちゃん！？何恐ろしいこと口走ってんの！？」

目が笑ってない。物凄く据わってる。本気で怒ってる証拠だ。

「火憐ちゃん止める！」

「兄ちゃん離せ！」

「落ち着け。正義の味方らしくないぞ」

「正義よりも愛の方が上なんだぜ！」

「ヤバッ、カッコいい！」

そんなことを言いつつ、後ろから拘束し、そのまま匂いを堪能する。最近、シャンプーを変えたらしく柑橘類の匂いがする。少しストレスが減った気がする。火憐ちゃんの腕力の程は熟知しているので、火憐ちゃんの目を覗き込んでキスシヨットに教えてもらった通りに意識を奪う。

「ごめんね。火憐ちゃん」

人形のように眠ってしまった火憐ちゃんの表情はとても悔しそうだった。兄貴のことが本当に大好きな火憐ちゃんにとって、兄貴に

彼女ができたという事実は想像以上のショックだったのだろう。帰ったらゆっくり話そう。

「奏！ナイスだ！」

「来るのが遅いよ」

ようやく兄貴たちが追いついてきた。火憐ちゃんを抱きかかえている俺を見ているキスショットの視線に殺気が籠っている。なんか後で干からびる直前まで血を吸われる気がするけど、これは家族として当たり前スキップなので許してほしい。

「大方の事情は聴いたぞ、神原後輩」

「阿良々木先輩。初めましてと言つべきなのか、なんと云えばいいのか」

「うん。僕もなんて云えばいいのか。まさか、同性愛者がライバルとは」

そんなこと誰も想像しないな普通。逆にそんな事態を想定できていたらスゴイ。

「とりあえず、変態キャラは間に合っているから」

「……待つてほしい。それは一体どういう意味だろうか」

意味が解らない。あの羽川さんですらキョトンとした顔をしている。兄貴は一体どんな話を聞いて、どんな認識を持っているのか見当がつかない。

「そこにいる僕の弟は、まあ色々あって吸血鬼になったんだけど、四肢の無い吸血鬼に一目惚れした鬼畜で、シスコンで、ネクロフィリア。つまり、変態なんだ」

何故、ここでそんなセリフが出てくる。俺が好きなのはキスショットであって別に四肢の無い女性に欲情するような趣味は断じてない。偶々好きになった女性との初めて出会った状態がそういう内容だったただだ。

「だから、まずお前程度の変態というアイデンティティじゃ役不足だ」

「おいコラ。さっきから誰が変態だ」

なんかキスショットと寝ている火憐ちゃん以外がゴミを見る様な目でこっちを見ているんだが。

「それでさ、僕は一応戦場ヶ原の恋人をこれからも続けるつもりだし、お前に譲るつもりはない」

兄貴にしては珍しくはつきりと宣言したそのセリフに対し、ギリツという『神原駿河』の歯軋りの音が確かに聞こえた。火憐ちゃんの温もりを手放すのは本当に心苦しいが、万が一兄貴が襲われた場合に備えるべきかもしれない。

「でも、神原が戦場ヶ原の後輩と友人として傍にいて欲しいと思ってる」

言い分は正しいけど、それで納得するなら、初めから猿の腕なん

て使わなかっただろう。それは兄貴も十分に承知しているはずだ。

「だから、競争しよう神原。どっちが戦場ヶ原に好きになってもらえるか。期限は僕が卒業するまで」

淡々と兄貴は告げる。下手をすれば異形の腕で殺される可能性がある。あるにも関わらず。

「私はこの腕に願ってしまったんだ！戦場ヶ原先輩の傍に居たいと！邪魔者を排除するまで止まれないんだ！」

ならば最初からそんな物は使わなければよかったのと言つには遅すぎるだろう。

「そんな左腕一本で奏に勝てる訳がない。奏が本気になれば絶対に負けない。奏は誰かを守ることに關しては誰よりも信賴できる。仮に神原が僕を襲ったとしても、今回みたいに対して何も起こらずに終わる。僕の家族は強いぞ」

誇らしげに兄貴は語った。いつの間にか俺から火憐ちゃんを奪つて大事そうに抱えているところが物凄くム力つく。

「だから、競争しよう神原。僕は昔の戦場ヶ原なんて全然知らないんだ。面白い話聞かせてくれよ」

「阿良々木君、じゃなくて、ゴミにしてはいい意見ね。そうしなさい神原。私もあなたがいた方が楽しいわ」

相変わらず戦場ヶ原さんは無表情のままだったけど、どこか優しげに見えたのは気のせいだろうか。

「阿良々木先輩は卑怯だ。そんなことを言われたら私は。私は何も言えないじゃないか」

兄貴が卑怯なことはいつものことだけど、そんな指摘をわざわざする必要も無かった。

トラブルが多く、唐突だったが今回の話はこんな感じであっけなく終わった。

今回のオチと言えばオチ

結局、あの異形の腕は猿の腕ではなく、レイニーデビルと呼ばれる悪魔の腕だということを忍野さんに教わった。放っておけば二十歳頃に元に戻るらしい。ただ、願望が強くなれば再発することもあり得るとのこと。また、厄介な問題が増えた。そして、当の本人はというと何故か俺に弟子入りしたいと言い出した。

「師匠と呼ばせていただきたい」

「いや、何で!？」

「変態という私のアイデンティティを取り戻すためにより質の高い変態を学ばせて頂きたい」

「誰が変態だ!」

断じて自分は変態ではない。ただキスシヨットと妹が好きなだけだ。ともあれ、何故か同性愛者の弟子候補ができてしまった。

「よし、師匠。とりあえず、脱げばいいのか？」

訂正。同性愛者で露出狂の弟子候補ができればいい。

かれんハンマー 最終話（後書き）

ようやくかれんハンマーが終わりました。長い間ありがとうございました。

結局、奏君は今回も殴られ役でした。

今回はオリジナル要素（珍しくキスショットと奏君のイチヤイチャメイン）の多い話です。短いですが撫子ちゃんの初登場になり、ヒロインが全員出揃う形になります。

そして、いよいよ『合わせ鏡』の概要が明らかになり、阿良々木家の過去が明らかになります。

一連の出来事が終わった今から思い返すと、下の妹である月火ちゃん
の友人である『千石撫子』ちゃんという少女と会ったことはほとん
ど無いし、この物語の最初から最後まで彼女とは殆ど接点が無かつ
た。というのも、『俺』という存在が『表』に出て来れるようになる
前に彼女は兄貴とよく遊んでおり、話したことが一度も無かつたから
だ。ただ、彼女が抱えていた問題に対し、自分なりに手を差し伸べる
ことはできたのだと思う。

「その辺どう思う？」

最近、古くなってきたソファの上でキスショットに膝枕をしても
らいながら、サラサラの感触をいつも伝えてくる金髪を手で弄ぶ。
最近、この体制がお気に入りだ。キスショットを下から見上げると、
その色々と壮観なのだ。兄貴なら大喜びしているだろう。

「ふむ、悪くは無い結果だったのではないか」

総合して、最終的にはそれ程悪い結果ではなかったという意見に
は概ね同意できる。少なくとも一方的な被害者であった彼女は無事
だったのだから。

「そういえば、あの頃からだっけ吸血鬼の能力使うトレーニング始
めたの？」

「そうじゃな」

母性に飢えているのかキスショットにこうして頭を撫でてもらうのが、好きだ。心地よい眠気と良い匂いに包まるこの感覚はもう、必要不可欠な栄養素といってもいい。

「ついでにこの膝枕を本格的に始めたのもあの頃じゃ」

「それは覚えてる」

「ほう。意外じゃな」

「人体改造し過ぎたお詫びだろ？ちゃんと覚えてるよ」

確か神原後輩にボコボコに殴られて、兄貴に美味しい所だけ持つて行かれた翌日のことだったと思う。兄貴が俺を勝手に改造したことについてキスショットに本気で説教をした話を聞いた直後のことだ。

「あの時は怖かった」

苦笑いしながらキスショットは目を細めた。兄貴とどんな話をしたのか知らないが、その場にいた羽川さんによれば、最後辺りは涙目だったらしい。見たかった。プルプルと震える涙目のキスショット。

「…お主今何を想像した？」

「涙目のキスショット」

「なら実物を見せてやろう」

潤んだ瞳で至近距離で覗き込まれた。理性という名の防波堤がガリガリと削られていく。性欲に任せて押し倒したい気分だが、そんなことをすれば自分が穴だらけのぼろ屑になるのは目に見えている。実際に一度酒の勢いでそれを実行しそうになった馬鹿兄貴は一晩中ベランダに吊るされていた。ざまあみろ。

「むっ、今男を想像したな」

「兄貴だよ」

「憎いのう」

「アレに嫉妬しても意味ないって。爛れ過ぎてるから」

女性関係が爛れ過ぎている。絶対に兄貴はそのうち後ろから刺されると思う。戦場ヶ原さんに。

「刺されたぐらいでは死なぬと思うが」

「さり気にも人の思考を読まないでくれ」

「読んでおらん。恋人ならではのテクニックじゃ」

「そろそろ理性が限界なんだけど、ちょっと噛んでいいか？」

「Come on. I'm ready」

「さすがに発音いいな」

「この前八九寺Pに『アニメ化物語』英語版の作成を頼まれたからのう。偶には母国語も悪くはない」

「とうとう海外進出か。さすが八九寺P」

そのうち日本文化を海外に伝える伝道師か何かになりそうだ。そんなことを想像しつつ、膝枕をしてもらったままの姿勢で下がってきたキスショットの首筋に噛みつく、温かい。熱くも温くもない調度人肌の温度。何故か落ち着く。

「ごちそうさま」

「うむ」

「少し寝ていい？」

「ああ、おやすみ。奏」

「ありがとう」

自分は本当に幸せだなと思いながら、ゆっくりと夢の中に落ちていく。意識が落ちる前に月火ちゃんとの懐かしい会話を思い出した。

「奏お兄ちゃんは目がダメなんだよ」

「どっという意味？」

「いやらしい」

風呂上りでまだホカホカと肩の付近から蒸気が漂っている月火ちやんは唐突にそう言った。

「そう?」

「プラチナム力つき過ぎて決りたくなるくらい」

「何を!？」

「眼球をだよ。奏お兄ちゃんはそのことも分からないの?」

「いや、分かるけどね!分かるけどさ!」

可愛い妹に何が楽しくて眼球抉りたいと言われなくてはいけないのかさすがに泣けてくる。

「目がいやらしいから火憐ちゃんも嫌がるんだよ」

「全然自覚なかった」

「自覚持つてよ」

「はい。すいませんでした」

土下座した。深々と土下座した。勘の良い火憐ちゃんのことだ俺が風呂上りの時等ガン見しているのに気が付いていたのだろう。道理で最近冷たいわけだ。でも、二人に絶対零度の視線で見られるというのもまたいいかもしれない。なんかゾクゾクする。

「死んじゃえ」

「ヒドッ！」

「…まあ、いいや。とにかく、そのいやらしい目をどうにかしてよ」

「はい。かしこまりました」

土下座したままの姿勢からグリグリと月火ちゃんに頭を踏まれている。結構痛いのだが慣れると段々と気持ちが悪くなってくるから不思議だ。

「駄目だ。このドM」

「ふっ、実は月火ちゃん限定でMで普段はSなのだ！」

「な、なんだってー！」

いつも通りノリの良い妹だった。まったくいつ話しても楽しい。

「ちょっと、山にでも行ってくる」

「ん、行ってらっしゃい」

色々と考えることができた。幸いまだ兄貴と分離していられる間に余裕があるので、ちょっと煩惱を払いに行くとしよう。あの懐かしいボロボロの神社に。

思い立ったら吉日と表現すべきか、存在自体あまり知られていないであろう獣道をせつせと上り、塗料が剥げた鳥居を潜った。もう、ずいぶん昔のことだが兄貴と入れ替わった俺はこの境内に色んな

物を隠しに来ていた。

「懐かしい感覚はあまり無いな」

あの頃は自分で行動することが少なかったからだろう。そんなことを思いつつ三日月を取出して軽く振る。若干離れた木の枝に向けて投擲、絡めて引き寄せる練習の繰り返し。

「あー、やっぱり駄目だわ」

やっぱり、先日の神原後輩の件以降三日月を握るたびに嫌な感覚に襲われる。しばらくはまともに扱えそうにない。なんとなく嫌になつて境内をブラブラと歩いていたら、誰かが鳥居付近を歩いているのが見えた。気になつて覗いてみて、言葉を失つた。

山吹色の帽子を被つた女の子が錆びた鉈で蛇の首を切り落としていた。

ホラー映画のワンシーンのように、その女の子は血が付かないように新聞紙で蛇を取り押さえてから錆びた鉈を振り下ろしていた。クチャリゴリゴリと音が響く、吐きそうだった。もし、女の子表情が泣きそうなものでなければ、即座にその場から逃げ出していただろう。

殺され散らばっている蛇以上に歪だったのは、怪異が見える様に改造された右目がはつきりと写す少女の体に巻きつくような大蛇。白い注連縄のような蛇が少女に巻き付いていた。足の先から首元まで。まるで止まり木に巻き付くように蛇が巻き付いていた。

「…まだ、消えないや」

少女に絡みつく、蛇が無機質な瞳でこっちを見ていた。不味い三日月を木に刺したままだったと思いだし、忍び足で取りに戻った頃には少女はいなくなっていた。

何はともあれ、それが『千石撫子』ちゃんとファーストコンタクトだった。

つきひシクル 001（後書き）

とうわけで、撫子ちゃんの初登場でした。

ひたぎシャークで一度だけ触れたキスショットのブログの内容が次回明らかになります

ちなみにタイトルの『シクル』とは英語の scythe（sick
le）『鎌』のことです

「神原駿河。得意技は二段ジャンプだ」

「残念。それは既に火憐ちゃんの得意技だ」

神社から離れ、あの少女と蛇について忍野さんに相談に行こうか
と思っていたら、自称弟子である神原後輩が突如現れた。独特なり
ズムの足音と共に、人の頭上を飛び越え、眼前に着地した。ダーク
シュートが打てるという話は本当なのかもしれない。

「ふむ、阿良々木先輩と比べると師匠のリアクションは薄いな。や
はり、私程度では師匠を満足させることはできないか。この神原駿
河。不肖の弟子で申し訳ない」

「兄貴と比べるなとか、色々言いたいことがあるが、俺は一度も弟
子だと認めたことが無い」

俺は兄貴の様な鬼畜野郎では断じてないし。変態でもない。恋人
とは一途で清楚な関係を築いているし、妹たちとは家族のスキンシ
ップで納まっている。ただ、月火ちゃん限定でMなだけだ。

「なるほど、師匠は下の妹さん限定でMなのか」

「人の心を読むな！」

「ふむふむ、湯上りの上の妹さんが好きなのか。さすがは師匠粋な趣味をしている」

「どこまで読む気だ！」

エスパーなのか、それとも実はそんな怪異まで持っていたのか、悪魔だけに左腕から思考を読み取るのか。後、戦場ヶ原さんとのマジバトル以降、火憐ちゃんが「神原先生に会いたい」とよく言っているが、兄貴と俺としては全面的に反対なので、今の所我慢してもらっている。さすがに妹が同性愛者になる可能性はできるだけ避けたい。

「師匠の上の妹さんは素晴らしい美脚をお持ちであると」

「いい加減に読むの止めろ」

「ジロジロ見過ぎて若干嫌われてしまったと」

「おい！」

「む、深く読み過ぎてしまったようだ。申し訳ない」

「どんな能力だよ！」

「それはともかく、私も実はMなのだ！」

「誤魔化すな！」

別に誰がMでも構わないが、これ以上自分プライバシーを侵害し

ないで欲しい。ただでさえ、自分の左目が中継カメラになっているのに思考まで読まれたらシャレにならない。それにしても、火憐ちゃんに若干嫌われてしまったというのがショックだ、鬱だ、正直もう駄目かもしれない。最近、ハグをしていないからそろそろ火憐ちゃん分が枯渇する。匂いだけで我慢するのも限界に近い。

「そう捨て鉢になるな、師匠。よく言うだろう。冬が来たら氷河期が来て、夜が来ると暗黒の世紀が来る」

そろそろ怒ってもいいかもしれない。よく考えてみれば目の前の人物には先日ぼろ雑巾になるまで殴られた。刃物を使っていた自分が言える立場ではないかもしれないが、この扱いはないだろう。

「一応聞いておくけど、どういう意味？」

「どんな苦境に思えても、結局は今が一番マシだという意味だ」

「最悪に後ろ向きだ！」

「洪水にならない雨はない」

「あるよ！洪水にならない雨だってあるよ！今は涙が洪水になりそうだけど！」

「ふふふ。ほら、前向きになった」

「はっ！嵌められたっ！」

さすがにバスケットボール部のスター選手だけあって人の心を掌握する術に長けている。素直に感心した。どうやら、ただの変態で

はないらしい。

「ところで師匠。先程、走ってきたから少し胸が凝った」

「よかったな」

「誰か揉んでくれる人はいないだろうか」

「キスショットの方が大きいから断る」

「巨乳でなければダメなのか。形には自信があるのだが」

別に巨乳フェチというわけではない。火憐ちゃんの胸は実際に形が整っていて素晴らしいと思う。将来が楽しみだ。

「兄貴にでも頼め。物凄く喜ぶぞ」

喜ぶだけで最終的には手を出さない気がするけど。基本的にチキンだから。騒ぐだけ騒いで最後に尻込みして終わりになるだろう。たぶん、兄貴が余程の節操なしでなければ。

「阿良々木先輩には既にこの欲望をぶつけさせてもらった！」

「…どんな反応だった？」

「残念ながら、私のこの進むパトスを慰めてもらうことはできなかった」

安心した。これで兄貴を殺さなくて済む。まあ、もし本当に手を出していたら戦場ヶ原さんに刺される方が早いだろうけど。

「体目当てならこれで戦場ヶ原先輩と別れさせることができたのだが」

「やっぱりか」

「勘違いしないでほしい。私の暴力的衝動を受け入れてくれた師匠と戦場ヶ原先輩の隣にてもいいと言ってくれた阿良々木先輩には本当に私は感謝しているのだ」

「へえ」

正直少し、意外だというのが本音だ。人を殺害してでも戦場ヶ原さんに最も好かれたという願望を抱いていた神原後輩からすれば、今でも兄貴は一番の邪魔者のはずだ。

「戦場ヶ原先輩は綺麗だ。以前よりも、阿良々木先輩という戦場ヶ原先輩が私は一番好きなのだ。あんなに心の底から嬉しそうな雰囲気は私の前ではなかった。妬ましいが、戦場ヶ原先輩の幸せが素直に嬉しいのだ」

「割と無表情だと思うけど」

「ふふ。兄弟でも気づかないことはあるのだな」

「アレと一緒にされるのは嫌だ」

尊敬はしてるけど、同じようになりたいかと言われれば迷う。自分分は兄貴程全てをありのままに受け入れることなどではしないのだから。

「アンダーブレードさんも同じく、師匠を話している時が一番楽しそうだ」

「それは嬉しいな」

「ただ何故か、阿良々木先輩と浮気しそうな気がする」

「止めるオ！それは本当に実現しそうで怖すぎる！」

実際にそれは本当に起こりそうで怖い。あの兄貴なら弟の恋人すら墮しそうだ。いくらでも盾になるからそれだけは勘弁してほしい。切実過ぎて泣けてきた。

「…別に泣かなくともよいのではないか」

「兄貴が今まで何人墮としてきたか知っていたら分かるよ」

無言で肩を叩かないで欲しい。よけい憂鬱な気分になる。

「よし！師匠！私が脱ごう！」

「今の会話の流れからどうしてどうなる！？」

「無論、脱がせてくれても構わないが」

「受動態か能動態かの話をしてるんじゃない！やっぱりただの変態だ！」

「ああ、もっと罵って欲しい」

「しまった！Mだつてこと忘れてた！」

無敵だ。俺みたいに月火ちゃん限定でMというわけではなく、真正のマゾヒストには精神的攻撃も物理的攻撃も効かない。吸血鬼以上の耐久力。兄貴並に厄介な相手は以外と近くにいたらしい。

「さあ、師匠。私により優れた変態というものを刻み込んでくれ！」

「帰れ」

本当に愉快すぎる弟子だった。

つきひシクル 002（後書き）

ちょっとした閑話のような感じになってしまいましたが、物語は進行しています。やっぱり、神原後輩は楽しい。

そろそろオリジナルや試作品の投稿を再開したいと思います。どれも拙い作品ばかりですがもし、興味がある方がいらっしゃいましたら、お気に入りユーザー登録をお願いします。

つきひシクル 003 (前書き)

約二か月の長期出張より、ようやく帰還しました。

執筆が遅れたことを心より読者の皆様にお詫び申し上げます。

紆余曲折あったものの、変態でエスパーでDMで自称弟子の神原後輩から逃れることができた。まさか、吸血鬼の脚力と並行して走ってくるとは思わなかった。あの猿の腕、本当に効果が左腕限定なのか確認しようと思う今日この頃。

閑話休題

かなり時間を無駄にしまったが、そろそろ忍野さんの所に言っ
て、あの蛇と女の子の話を聞きに行こう。あの蛇は放置しておく
のは危ない気がする。どうしようもなく、嫌な予感がする。こうい
う予感は大抵の場合、的中する。伊達に兄貴の女性関係で刺され続
けてきたわけではない。

「やあ、弟君。何かいいことでもあったのかい」

「お久しぶりです忍野さん。久々の出番だけに中々衝撃的な登場で
すね」

過去に埋められていたりしたが、今回のこれは中々ユニークとい
うか。一体、どうやって作ったとキスショットに本気で問いただし
たい。

廃ビルの前に巨大なプールが出来ていた。内部も見事にタイルで

補強されている。その調度中心あたりに忍野さんの首から上の部分が浮かんでいた。何故か両腕と両足がプールの底から伸びているロ―プで固定されているから、そこから動けないというのは分かる。これはお約束だ。ただ、一言言いたい。一体これを見てどうしろと

「ん、何か浮いてる？」

「ああ、それ氷だよ。この時期だからそれ程辛くはないんだけどね」

梅雨明けのジメジメとした季節に氷風呂、正確には氷が浮いたプールは確かに気持ちいいかもしれないが長時間は辛そうだ。

「それで、今日は聞きたいことがあつて来たんですけど」

「とりあえず、引き上げてくれるかい」

いつもならキスショットに怒られるからという理由で断るが、今は急いでいるので、そうもいかなかった。

「ああ、これ一着しかないのに」

「普段洗濯どうしてるんですか？」

確かに手荷物らしきものは一度も見えてないけど、まさか同じ下着を履き続けているなんてことはさすがにないだろう。

「ちゃんと洗ってるよ」

「ここに洗濯機ありましたっけ？」

キスシヨットの衣服はいつも勝手に綺麗になる機能がついてるから、必要ないし、そもそも干せる場所なんて近隣になかったはず。

「いや、近くに出かけてるけど？」

「あ、だったら別にいいんです」

さすがに自分の恋人と同じ建物で裸で洗濯物が乾くのを待っている人がいたら、嫌だったから確認しただけだ。

「ちなみに、なんでこんな状態に？」

「うーん、僕もよく分からないんだけどね」

昨日見たときはキスシヨットの機嫌が別段悪いということとはなかったのだが。

「なんか、君のお兄さんと抱き合っていると僕が乱入しちゃってね」

「…え？」

いやいやさすがに兄貴でも人の恋人に手を出したりはしないだろうん、大丈夫。さすがにそれはないから。

「ちょっと確認してきますね。話はその後で」

「いつてらっしゃい」

なんであの人は物凄くいい顔で手をふっているんだろうか。もし、

恩人じゃなかったら本気で殴り飛ばしていた。

「キスシヨット？」

最近、だいぶ生活環境が整ってきたビルの中で自分の声が無駄に反響する。この時間帯は寝ているからか、返事が無い。まあ、予想通りと言えば予想通り。

「人として、それは最低の行為です」

「うーむ、それは分かるんじやが、儂の嗜好としてはどうも、同じ相手ばかりというものう」

「でも、それ事実上の浮気ですよ」

「そうなるのかのう？」

「そういうことははっきりしないといつか取返しのつかないことになります」

「しかし、兄弟の味比べとついものの捨てがたい」

「駄目です」

なんか上の方からキスシヨットと羽川さんが明らかに兄貴とキスシヨットの浮気を匂わせる会話をしているのが聞こえた。ああ、あのマゾエスパーの直感は大当たりだったらしい。

「鬱だ。死のう」

吸血鬼もどきだから簡単には死ねないだろうが、試さないよりはマシだ。兄貴の女性関係で刺され続けて、今度は初めてできた彼女まで盗られた。そして、妹たちには完全に性犯罪者を見る眼で見られるようになった。最後だけ、興奮する。

「忍野さん。俺のこと殺してくれませんか？」

「おいおい、一体どうしだんだい？」

「兄貴に彼女を盗られまして、死のうかと」

どうせこれからも兄貴が生存している限り、これから先も寝取られる可能性が増え続けるわけだしさ。妹たちも兄貴ラブだしさ。もう生きてる希望無い。

「あのね、君何か誤解してないかい？」

「大丈夫です。所詮、俺は兄貴の影ですから」

所詮、兄貴の女性関係で刺され続けて、ボロボロになるだけの盾ですから。三日月でリストカットしますんで、死体の処理お願いします。

「一旦、落ち着こう」

忍野さんが顔が若干引きつってた。余程酷い顔をしているらしい。なんか呼吸するのも嫌になって、三日月でリストカットをしようとしたけど、即座に叩き落された。さすが忍野さん。動きが殆ど見えなかった。

「そうですね」

「まず、さっき何か聞こうとしていた話から」

「ああ、なんか女の子に蛇が巻き付いてたんですよ。怪異みたいな」

あの神社でみた奇妙な出来事を忍野さんに話と、珍しく忍野さんは深刻な表情になった。

「蛇切縄」

「危ないんですか、ソレ？」

「ああ、人を簡単に殺せる怪異、まあ、正確に言つと呪いかな」

吸血鬼といい、この前の化け猫といい、レイニーデビルといいどうして怪異は人の生死に直結するものが多いのか、迷宮入り事件のいくつかは怪異が原因のような気がする。

「その女の子を見た神社って、あの山の辺り？」

「ああ、そうですね。白蛇神社っていうんですよ。昔、よく兄貴が隠れるのに使ってた」

主にストーカーとか、キレた月火ちゃんから逃げる時とかね。

「それもあそこがエアポケットの吹き溜まりになった理由かな」

「はい？」

「よくないものがね。集まりやすいんだよ。あの場所はね。ボロボロの神社なんて本当は大した意味を持たないんだけどね。あの場所は例外で、たまによくないものが集まるんだよ。ハートアンダーブレードの件が終わっても僕がこの町に留まった理由の一つはあの場所なんだよ」

昔からよく知っている神社がそんな場所だと突然聞かされてもあまり実感が湧かないが、恐らく本当なんだろう。

「君が原因なんだけどね。あの場所が活性化したのは」

となると、今回の騒動は俺が根本的な原因ということになるのだろうか。

「伝説の吸血鬼がフラフラとこの町に惹かれてきたのも、あの場所があるからさ。君という怪異が出入りを繰り返したパワースポットはそれなりに力を持っているんだよ。一度、怪異を知れば、怪異に惹かれる。ただし、君の場合は元々怪異みたいな存在だから、なんとも言えないんだけどね」

だとしたら、キスショットに出遭えたのも、全てあの神社があったから。

「まあ、お兄さんが強すぎたのもあるかな。合わせ鏡はかなり強い怪異だけど、長持ちしないからね。本当ならここまで溜ることもなかった」

「…」

「別に君たちを責めてる訳じゃないさ。君のお兄さんがやったこと

は一人の人間としては立派だし、よく耐えたと思うよ。ただね、ちよつとばかり周囲に影響があり過ぎただけさ」

「なんとか普通の神社に戻せませんか？」

仮にこの町で怪異の犠牲者が出たとしたら、間違いなく、俺が原因だ。もし、未然に防げるならなんとかしたい。兄貴に彼女を寝取られた身だ。なんだってしてやる。思い出したら泣きそうになってきた。

「この御札を神社の建物に張り付けてくれればいいよ。戻りはしないけど、マシにはなるから」

「それだけですか？」

この紙切れ一枚にそんな効果があるとは到底思えない。

「これかなり高いんだぜ」

「…分かりました。貼ってきます」

「ああ、そうそう、その女の子の話だけど、蛇切縄はロクな怪異じゃない。本当にタチが悪い人間関係の拗れから生まれたりする。何しろ、相手を呪うくらいだからね。ただ、あの神社のこともあって今回は相当運の悪いケースだろうね」

「はい」

あの年頃の女の子を呪い殺していい理由なんて、あるはずがない。

「あの蛇、怪異殺しの武器で斬れますか？」

「切れるよ。所詮、縄で蛇だからね」

嫌に含みがある言い方だった。物凄く胡散臭い。

「ただね、人の情念つてのは物凄く厄介なんだ。それはよく覚えとくといい。君はお兄さんの爛れた女性関係でよく知ってると思うけど」

余計な御世話だと言いたかったが、黙って頭を下げた。この人から受けた恩はそう簡単に返しきれものではない。そのくらいの自覚はある。

とりあえず、この札を貼って、あの蛇を斬ったら、自殺を考える前に兄貴を去勢しよう

つきひシクル 003 (後書き)

なんとか今週中に後二話程投稿したいと思います。
仕事の都合上、執筆が遅れて大変申し訳ありません

自分の兄に恋人を寝取られた『四肢の無い吸血鬼に一目惚れしたネクロフィリアで、シスコンでマザコン』こと、阿良々木奏こと、俺は、戦場ヶ原さんに蹴られた野良犬の如く、錆びれた道路を徘徊していた。大体やることは決まっている。

1 ・あの女の子に憑りついていた蛇を斬る。うざばらしに

2 ・兄貴を去勢する。あえて、文房具で

3 ・キスショットにもう一回振り向いてもらう。監禁してでも

4 ・神社に御札を貼りに行く。恩返しに

「いやいや、男のヤンデレとか誰得ですか？」

「あ、八九寺ちゃん久しぶり」

ツインテールと背丈よりも大きなリックサックを背負った。小学生くらいの女の子、八九寺ちゃんこと、八九寺Pは今日も人に噛みつきそうな様子を醸し出しつつ、プロデューサーとしての責務を果たしているらしい。

『正しいヒロインの寝取り方とヤンデレの育成方法』と記された本を堂々と道端で読んでいくくらい仕事熱心だ。

「おい、ちょっと待て、コラ」

思わず小学生相手にそんなセリフを放ってしまった。君、明に今回の件に噛んでいるだろう。

「失礼。噛みました」

「何を？」

「ハートアンダーブレードさんが阿良々木さんを」

「マジで！？なんで吸血鬼化しないの！？」

兄貴。何時の間に噛まれていたんだ。さすがにやばいんじゃないのか、ソレ。

「なんか、太ももを噛まれるのが病みつきになってしまったそうですよ」

「知りたくなかったよ！実の兄のそんな性癖！」

あの飲み比べ云々は血液のことか。確かにある意味浮気だ。カニバリズム的な浮気だけど。リアル猟奇的な彼女。本当に笑えない。

「時々、噛まれないと欲求不満になるそうです」

「戦場ヶ原さん。頼むからうちの兄貴串刺しにしてくれないかな」

マゾというか、カニバリズム、この場合は被カニバリズムの趣味が自分の実の兄にあったなんか知りたくなかった。本当に知りたくなかった。アレ、でも俺もいつもキスショットに血を吸われてる時に半分寝てるくらい安心してるから、同じだと言えなくもないのかあの兄貴と同じレベル。鬱だ。

「そうそう、落下系ヒロインこと、戦場ヶ原さんと言えば」

「まあ、確かに初登場で落下したけどさ」

未だに思っただけど、うちの高校のあの螺旋階段、明らかに段数おかしい。

「先ほど、あちらの方で浴衣を着た中学生と黄色いジャージの阿良々木さんより身長が高い女の子とガチバトルしましたよ。いろんな方を相手に」

「オイイイイ！何やってんのオ！マイシスターズ！」

あの人は駄目。マジでヤバいから駄目。たぶん、羽川さんを除いてただ一人この世界で兄貴を簡単に殺害できる人だから。いくらうちのファイヤーシスターズでも勝てないだろう。

「ああ、後初めて見る方もいましたね。なんか、アナコンダみたいなのが肩に乗ってましたよ。他に無駄にいましたし」

「…はい？いや、なんで見えるの」

別にキスショットに人体改造されたわけじゃあるまいし。やっぱ

り、幽霊だと見えるものも違うのか。

「プロデューサー権限です！」

「スゲエ！なんかその胸張って無駄にエラそうなポーズもカッコイイ！」

現実逃避終了。

ところでそのアナコンダに関して物凄くいやな心当たりがあるんですけど。ねえ、八九寺P、今から脚本書き直せませんか。大体、俺がフルボッコにされて終わりという典型的な終わり方しか見えなんですけど。しかも、今までに無いスケールで。

「無理ですね」

「あ、やっぱり」

「ちなみに語り部さん（仮）がこの後どうなるのか知りたいですか？」

「なんで仮？」

「次の『つばさナイフ』の語り部が羽川さんの予定だからです」

「え、主人公の出番は？」

「只管、羽川さんが阿良々木さんとイチヤイチャする話なので、全くありません」

「ああ、初めて兄貴の女性関係で刺されなくて済みそう」

この物語始まって以来、初めて理不尽な暴力から解放されるかもしれない。そろそろ僅か数か月で三桁に突入しつつある死亡回数もある程度分散できるかもしれない。羽川さんが人を刺す可能性は少ないだろうし。猫化するかもしれないけど。

「ええ、代わりにハートアンダーブレードさんと心中するため旅行に行ってもらいます」

「心中するの確定なの!？」

「はい。どうぞ、『つばさナイフ』の次の『きすしよつとブーケ』で役割終わりですし」

「そうだけど！確かにそうだけどさ！頼むからそんないい笑顔で死刑宣告しないで！何故か、八九寺ちゃんが戦場ヶ原さんに見えてくるから！」

毒舌という意味では共通しているかもしれない。ただし、八九寺ちゃんの方がプロデューサーとしての権限持っているぶん怖い。

「まあ、シナリオの変更については考えておいてあげましょう」

「ぜひお願いします」

小学生に昼間から土下座する吸血鬼モドキがそこにいた。というか、俺だった。この光景をもし、知人が見たらこういっただろう。さすが兄弟と。

「では、私はこれから傷物語の映画制作チームとの打ち合わせがあるのでこれで失礼します」

「お疲れ様です」

「ああ、そうそう、映画化が来年になった理由知ってますか？」

「単純に制作時間の問題じゃ？」

「いいえ。今年是有名なアニメの映画化が多すぎて、あまり収益性が見込めないからですよ」

「聞きたくなかったそんな裏話！てか、どうしたの八九寺ちゃん！ たった2ページ分でメタ発言多過ぎ！」

「失礼。噛みました」

「噛んでないよ！全然、これっぽっちも噛んでないから！」

「神喰った。囃物語で」

「嘘だア！」

いくらなんでも、それは無理だ。相手が強すぎる。もしかしたら、プロデューサー権限でどうにかなるかもしれないけど。この物語で一番強いキャラクターって断トツで八九寺ちゃんだし、勝てるかもしれないけどさ、さすがにソレは無理だろう。

「とまあ、全部嘘ですけど」

「ですよー」

ああ、嘘でよかった。

「私の出番が最近、少なくなってきたのでちょっと巻き返しを」

「…何故、プロデューサーが出番持っているのかとか、その辺のツッコミは？」

「一応、ヒロインとして時給1200円で雇われていますので、両立が大変なんですよ」

「高いのか低いのか微妙！」

一体、どうやって時給換算しているんだろう。

「では、頑張っていつも通りミンチにされて来てください」

「…はい」

さて、いつも通り適当に殺されに行きますか。死なないから、嘘だけど。よく考えてみれば、シナリオ書き換えてもらえば済んだのでは。と思っているうちにもう到着。

「しかし、よくもまあ、ここまでやったもんだ」

こりゃあ、参ったとしか言いようがない。一体、どうやったら文房具がコンクリートブロックに突き刺さるんだ。千枚通しが木に刺さって釘バットみたいになってるし、なんか、地面が部分的に陥没しているし。いや、本当にここで何があった。いくらうちの妹でも

ここまではできないはず。たぶん、そう願いたい。

「…へ？」

追いかけないと本気でヤバいなあとはい、今日も無駄に青い晴天を見上げた瞬間に思わず、奇声を挙げてしまったのは無理もないことだと思いたい。分かりやすく脳内で箇条書きにすると次のようになる。

1・兄貴が空を飛んでいた。顎が仰け反っているところを見ると飛んでいるのではなく、跳ばされたのだろう。たぶん、火憐ちゃんと月火ちゃんに。追撃として千枚通しが飛んでいるのがいい証拠だ。

2・空から大量の蛇が降っている。何処の三流映画だと言いたい。

3・忍野さんが近隣の建物の屋上から御札を投げていた。お疲れ様です。

4・家ほどのサイズがあるアナコンダが全身から文房具を生やした状態で悶え苦しんでいた。この時ばかりは細部まで見えてしまう吸血鬼の視力が本気で嫌になった。犯人は戦場ヶ原さんだろうか。

その光景を見た自分がしたことは…

「よし、神社に御札を貼りに行こう」

全力でUターンをして逃げることだった。

つきひシクル 004 (後書き)

八九寺P無双の巻。

つきひシクル001で掲載したように撫子の出番は今回は少ないです。ただ、次回の『つばさナイフ』で大暴れしれもらいます。

つきひシクル 最終話

何かと昔から兄貴関連で思い出の残るボ口神社こと、『北白蛇神社』なのだが、ここに来るといつも奇妙な違和感に襲われる。別に頭痛がするとか、気分が悪くなるとかそんなことは無いのだが、ただ、なんとなく嫌な焦燥感に襲われる。それが何なのか今一つはつきりしないけど、あまり良いものではないのだろう。さつき敷地内に御札を貼ったが、この嫌な予感が消えない。

「やつほー。私の息子、元氣かね」

誰も居ないはずの錆びれた神社で後ろからそんな声を掛けられた。断じて母親の声ではなかったが、どこか響きが似ていた。強いて言えば、テンションが高そうな内容を話しているのに、淡々とした印象を与えるところだと思う。

「月火ちゃん？」

髪型と造形がそっくりだった。少したれ目な所と和服ではなく、膝が破けたジーンズとサイズが小さな無地のＴシャツを着ていることを除けば本当に月火ちゃんそっくりだった。身長は今の月火ちゃんより少し高いくらい。何故か、お腹がポツコリと膨らんでいた。

「あ、ごめんごめん。今戻すからちょっと待って。さすがにボテ腹はビジュアル的に不味いわー」

堂々とその人がゲップをすると腹部が凹んだ。ボコツという効果

音が聞こえてきそうな勢いで。

「はあ？」

「凄くね？ 今の凄くね？」

断じてこの人は月火ちゃんではない。若干、外見は似ているかもしれないけど、断じて月火ちゃんはこんなことを人前でしない。ラブリーエンジェル月火ちゃんのマナーはしっかりしている。偶に人を千枚通しで刺したり、バールで殴打するだけだ。

「どちら様ですか？」

「君のお母さんだぜい。お父さんはこーちゃんねー。ちなみに暦のことだよー」

人差し指をピンツと立てて、さも当然と言うようにその人は言い放った。ニマニマと笑うその表情は記憶のどこかに見た気がした。そう、確か兄貴が昔仲の良かった、友達以上恋人未満だった女の子と何故か特徴一致する。彼女だけが兄貴のことを『こーちゃん』と呼んでいたから。

「なーるほど、私のこーちゃんが若干記憶を弄ったのか。なかなか、エグイねえー」

記憶を懸命に手繰り寄せているといつの間にかその人に頭部を鷲掴みにされていた。吸血鬼モドキが全く反応できなかった。速いかそういう次元ではなく、本当に何もわからなかった。いつ、どうやって掴まれたのか全く分からない。慌てて後ろに跳んで逃げても笑ったまま。

「カレンダーの火憐ちゃん。月日の月火ちゃん。暦のこーちゃん。なーんで君だけ仲間外れか分かる？」

「この名前は兄貴に貰ったから」

「ざーんねん。違うんだなあー、これが」

嬉々と彼女は語る。兄貴が『奏』と付けたことに特に特別な理由は無かったと思う。ただ、兄貴が自分に適していると思う名を与えてくれただけだ。それでも、結構気に入っている。兄貴には言わないけど。

「まあ、その辺はこーちゃんに聞いてみ。嘘の記憶のことも含めて全部教えてくれるよー」

「嘘の記憶？」

「そー、嘘の記憶。こーちゃんが頑張って作った楽しいお話。でも、私とあって、だいぶわかったでしょ？ぜーんぶ、嘘でーす」

「少なくとも、あなたは兄貴の友人じゃなかった」

記憶の中にある彼女と今目の前にいる人が一致しない。勘違いかもしれないが、目の前の人物から感じるこの違和感は異常だ。怪異じゃないけど、人間とは思えない感じた。

「おうよ。だって、家族だしねー」

「…家族？」

「ただのブラコンだよー」

即座に血縁関係を否定したいとこだが、戯言と言うにはあまりにも顔や身体つきが妹たちに似ていた。

「どのくらいブラコンかというと、こーちゃんのことを大好きな女の子たちの嫉妬を全部集めて、あの戦場ヶ原とかいう奴に呪いにしつてぶつけるくらいかな。ヤバッ、こーちゃんを今すぐペロペロしたい」

「まさか、あのアナコンダ？」

「この神社にちょうどいい御神体があったから、一部使ってみたんだけど、まさか文房具で撃退されるとは思わなかったわ。いやー、マジで何アレ？鱗数枚分だけど、一応神様だよ？」

あの文房具でハリネズミになっていたアナコンダは目の前の人物が放ったものらしい。となると、怪異そのものか、その関係者という可能性が極めて高い。

「懐かしい子がここにきてさ。相変わらず笑えるくらい空っぽで自己中心的な子だったから、ちょーっと、煽ててみたんだよね。まあ、昔より全然マシだったから。呪い変化ちゃったんだよねー。ほら、カエルが空から降ってきたって、都市伝説あるじゃん？あれの蛇版になりましたっつと。ただし、お届けするのはたくさん乙女の嫉妬みたいな」

「関連性が全く分かりません」

「恋愛なんて、蛇の捕食と大差ないってこと。片方が、片方を飲み込んで、時間を掛けて消化する。ねー、同じことだよー」

どこが同じなのか全く理解できないし、したいとも思えない。ただ、相手は諭す様な好調でもなく、ただ本当にそう思っているから、言葉にしてるだけだと、根拠もなくそんな気がした。あやふやなことが多い一方で、確かなことはこの人があのアナコンダと空から降る蛇を引き起こした張本人だということだ。

「ま、火憐ちゃんはちょーつとだけ頭が緩かったから、心配だったけど、ちゃんと『お兄ちゃんの彼女』を守るくらい、いい子になったし、月火ちゃんは昔の私に似て、一途でいい感じだし、ま、文句なしだねー」

嫌な疑惑がズルズルと這い上がってくる。この人が本当のことを言っているとするならば、この人はうちの長女ということになる。だが、そんなことは有り得ない。少なくとも、うちに痕跡は一切無かった。

「まあ、予想通りと言えば、予想通りなんだけども。あの二人もなんだかんだ言つて、こーちゃんの幸せを守りたいだろうから。結局、殴り飛ばしてただけ」

八九寺Pが言っていたのは、妹たちが戦場ヶ原さんと一緒にマジバトルしているという意味だったらしい。さすがプロデューサー。展開を読ませないよう、日々の会話にも注意しているらしい。

「さてさて、ラスボス登場だけど、どうする？」

本当に無邪気にその人は手を広げて見せた。別に何か隠し持って

いる様子もないし、構えている様子も無い。本当にただ、両手を広げているだけ。怪しすぎる。

「なんか持ってます？」

「うん。持つてるよー。1、3、4、5体の怪異と7、6柱の神様を」

「どこの安心院さんだ！アンタは！」

初対面の人に本気で突っ込んでしまった。そして、この人自分から怪異関係者だと暴露しやがった。

『クチナワ』

愛用の鎖鎌である三日月に手を伸ばそうとしたら、何かザラザラとした手触りのあるモノを掴んでいた。視線を下に写すと、三日月の鎖の部分が白い蛇になっていた。

「こーんな、こともできるよー」

月火ちゃんを連想させる長い黒髪がいきなり伸びた。無数の毛糸玉を投擲したような放物線を描いて飛んでくるソレを、空に逃げることもできず、ただ巻かれる。

『縁髪』

不味いと思った調度、その直後に体が薄れて、消えた。兄貴が分離状態を解除したらしい。助かったと安堵の息を吐く間も無く、新しく視界に入ってきた光景に絶句した。

「ね、ねえ、暦お兄ちゃん。撫子ここから脱出できたらお嫁さんになりたいな」

「ああ、そうだな。僕ももし、ここから生きて出られたら結婚して、隠居したいな」

「な、撫子がお嫁さんになってあげまましゅ」

「噛んでるぞ」

「ごめんなさい」

「謝らなくていいって」

「撫子。死んじゃうのかな？」

「大丈夫だ。僕が便利な盾を使ってちゃんと守ってやるから」

「本当？」

「ああ、本当だ」

「じゃあ、撫子はちゃんと帰れるんだよね？」

「おっ」

「ちゃんと、曆お兄ちゃんのお嫁さんになれるんだよね？」

「ごめん。それは無理」

「……撫子、愛人で我慢する」

「それ、僕が殺されるから」

「大丈夫だよ。曆お兄ちゃん。撫子ちゃんと綺麗にしてあげるから」

「全然大丈夫じゃねえよ！」

山吹色の帽子を目深く被った女の子を庇うように兄貴が抱っこしている。あの蛇に全身を巻き付けられていた女の子だ。幸い、身体に別状はなさそうだ。今から死ぬかもしれないけど。

「あらら、ゴミ屑の分際で自分の所有者以外に婚約なんていい度胸じゃない」

両手に業務用の大きなホッチキスを構えた戦場ヶ原さんが仁王立ちしている。

「なあ、兄ちゃん。あたし、不純な野郎は正義に誓って許さないぜ」

右斜めに拳を突き出した姿勢の火憐ちゃん。

「妹の友達ほぼ全員に手を出すとか、もうプラチナ殺るしかないよ」

ね」

右手に鋏を、左手に三本の千枚通しを持った月火ちゃん。

「聞いてほしい！ 吸血鬼の弟と人間の兄の濃密なBLモノを投稿したら、なんと！受賞できたのだ！」

鼻息荒く、自分の受賞作品を朗読し、人を社会的に抹殺しようとしている神原後輩。

「ねえ、なんで、私の下着が阿良々木の部屋で祭られてるのかな？」

髪の色が黒いままなのに、怪異以上の恐怖を彷彿させる羽川さん。

「『阿良々木君』」
「『阿良々木さん』」

そして、『百人切りの童貞野郎』である兄貴が堕としてきた女性の方々、大勢（妹たちの友人含む）と床を這う大量の蛇たち。なんか、嫌な嫉妬オーラを放っている。

俺の心のオアシスのキスショットはどこへ！？

『傷物語の撮影に行ってきます』 B Y 忍野&ハートアンダーブ
リード

「八九寺Piiiiiiii!!!!!!」

よりによってこんな時に映画の撮影を実施しないでください。

ジリジリと狭まってくる包囲網に、八九寺Pが『頑張つてミンチになってください』と言っていた意味をようやく完璧に察することができた。

ああ、盾としてのお約束だよ。コンチクショウ。

圧倒的な暴力の前に、蛇切縄の呪いもラスボスの登場も関係なくて、俺が気を失っている間に千石撫子に纏わる事件が解決していた。

そして、この『蛇』事件から三日後、阿良々木暦は失踪した。

つきひシクル 最終話（後書き）

ようやく終わりました。

次回からいよいよこの作品のオリジナル設定とファイヤーシスターズ編です。

つばさナイフ 001（前書き）

今回から羽川さんが語り部です。

ここまで難しい執筆は初めてでした。

違和感があれば、ご指摘お願いします。

この部屋には窓が無いから、朝日が昇ったか確認できない。

吸血鬼に居候させてもらっているのだから、当然のことなのだろうけど、私の朝は、『羽川翼』という個の朝は、窓から差し込む光を見ることもなく、携帯電話のアラーム音から始める。換気扇から差し込む光を除いて、真っ暗で何も見えないから、ベッドの脇に置いてあるキャンプ用の大型ランプに手を伸ばす。頭が覚醒するまで2秒間だけ、この部屋に來た時の回想に入ることにする。

「これ使ってください」

「え、これ高そうだけど大丈夫？」

確か近所の用具店で13,525円で販売している結構高いランプだったはずだけど、私がもらっていいのかな。

「100くらいある兄貴の逃走用セットの一つだから全然問題ないです」

「あ、うん、ありがとう」

一体、いつも何から逃げているんだろう阿良々木君は。前に少しだけ気になって調べたけど、阿良々木君の中学生時代の話は本当に

信憑性が無い。コンビニ強盗にラリアットを喰らわせて肉まんの中に叩き込んだとか、薄着の少女と深夜の町を徘徊していたとか、愛人をたくさん抱えているとか、他にも色々。そんな灰色の噂が絶えない阿良々木君がくれたものは、この部屋。

窓は無いけど、私のベッドと机と筆筒と、バスルームまである私にとって初めての部屋で自由に帰れる場所。正確にはハートアンダーブレードさんと交渉して貸してもらった部屋。これは一人暮らしになるのかしら。

「ここが羽川の部屋…窓無理だったけど」

「しょうがないよ。ハートアンダーブレードさんが入るたびに火傷しちゃうし」

様々な物語や逸話に記されているようにハートアンダーブレードさんは直射日光を浴びると火傷してしまう。通常、火傷は肌が爛れた後に継続的な激痛を齎すし、長期的な治療も必要となるんだけど、吸血鬼にはそんなこと関係ない。一瞬で、まるで巻き戻しのように瞬間的に元通りになってしまう。人間を超越した存在、万能の吸血鬼。

「後、服ここに入れとくぞ」

「え！？どうしたのその服？」

その時、阿良々木君が持っていたのは臙脂色の綺麗な包。

「プレゼント」

「悪いし、ちゃんとお金払うよ」

そういう物はちゃんと彼女に買ってあげて欲しいと私は思う。きっと、阿良々木君は自分の彼女以外にプレゼントを渡すことに何の危機感も抱いていないのだろうけど、もし、私が戦場ヶ原さんだったら、それなりに嫉妬すると思うな。

「大丈夫！手作りだからな！」

本当に阿良々木君はなんでもできるね。前に火憐ちゃんが奏君は裁縫とか凄くうまいって言っていたけど、阿良々木君もできるんだとこの時知ったんだっけ。

「来てみてもいい？サイズあってるかな？」

「ミリ単位で調整したからぴったりのはず」

「…どうやってやったの？」

「羽川の下着からトレースした」

いつも阿良々木君は『羽川は何でも知ってるな』という私はそれに対して『何でもは知らないよ。知ってることだけ』と答える。私は何も知らないし、何もできない。特に阿良々木君の無駄に高いスペックが一番理解できない。本当に理解できない。どうして、阿良々木君があんなに人を信用して、優しくできるんだろう。私と同じ『大嘘吐き』なのに。

阿良々木君曰く、『なんでも知ってる私』

私からすれば、『なんでもできる阿良々木君』

そして、私と同じ『大嘔吐き』の阿良々木君

「猫耳向けシリーズもあるぞ！」

「それはいいらない」

物凄くいい笑顔でサムズアップしていた阿良々木君を私はただ、冷めた感覚で眺めていたことを凄くよく覚えている。こうやって、ふざけることで阿良々木君は精一杯私を安心させようとしてくれる不器用な優しさだということも分かる。

不器用で、頑なまでに優しい嘔吐きの男の子。それが私の知っている阿良々木君。

たぶん、また勝手に居なくなつて、誰かのために頑張っているんだと思う。

阿良々木君は『嘔吐き』だから、今回は一人で居なくなった。

半身の奏君すら置いて、支えてくれる戦場ヶ原さんにも告げずに、

大事な家族にも触れず、可愛い後輩も残して、クラスメートの私なんてもちろん忘れて。

阿良々木君はどこかに行ってしまった。

回想終了

「やあ、おはよう。委員長ちゃん」

「おはようございます。忍野さん。今、朝ご飯作りますね」

三階にある私の部屋からハートアンダーブレードさんが創ってくれたキッチンがある二階に移動する。ここは老朽化が激しく、外から明かりが注ぎ込んで若干明るい。暗い部屋から出てきたばかりの時に、眼を慣らすのにちょうどいい。

大体、私が起きてくると忍野さんが適当な学習机を集めて、腰かけている。今日も同じ。忍野メメさん怪異のエキスパート。いつもアロハシャツのこの人について、私が知っていることは何もない。ただ、阿良々木君たちにとって、恩人であるということだけ。

「あの奏君は？」

「んん、相変わらずだよ。ハートアンダーブレードもそのまま」

阿良々木君が音信不通になって、奏君ですら接触できなくなつてから、すぐに阿良々木君の家族は阿良々木君を探し始めた。心当たりがあると言つていた奏君は飛び出して行つて半日で、意識不明の重傷を負つて倒れている所をハートアンダーブレードさんに発見された。吸血鬼の再生能力でも全く傷が治らないほどの重症。

それ以降、ハートアンダーブレードさんは意識の無い奏君の手を握つたまま、一步もそこから動こうとしない。自分の力を分け与え続けている。一回、浮気未遂みたいなのがあつたけど、やっぱりあの二人はお似合いだと思う。

「アレは猛毒だからね、どうなるかな？」

「毒ですか？」

「そう、蛇の『牙』の猛毒だね」

私の実家、法律上の両親に該当する男女二名が生活している家には調理器具が三組ずつある。お互いの存在を拒むまでもなく、私はそこに存在しない。家から私に与えられた分をここに持ち込むことに躊躇いは無かつた。そんな空気に汚され続けたコーヒークップを私は忍野さんに差し出す。

「忍野さんは治す方法を知っていますか？」

「知らないよ。仮に知っていたらハートアンダーブレードが強引に聞き出しているさ。そんなに慌てることないよ。委員長ちゃん。弟君は別に死んだりしないさ。それにしても、委員長ちゃん。大分、料理に人間味が出る様になつたね」

机に肘を付きながらトーストを齧る忍野さんは随分と失礼なことを言う。始め、ドレッシングも何も用意せずに、生野菜を出した時に奏君にまで、怒られたつけ。食事は楽しむものだって、味は必要だって、阿良々木君と戦場ヶ原さんまで必死に教えてくれた。

「…ちよつと、ハートアンダーブレードさん見てきます」

忍野さんは何も言わなかったから、たぶん特に何か新しい進展はなかったのだと思う。結局、阿良々木君の行方を知る奏君は未だ意識不明のまま。

「ハートアンダーブレードさん。開けますよ」

返事はない。ただ、ランプの灯りに照らされて、動かない奏君をしつかりと抱きしめているハートアンダーブレードさんはどこかの宗教画よりもよほど、慈愛深く見える。二人だけの世界なんて言葉は私に似合わないのだろうけど、邪魔をするのも悪いから、お邪魔虫は撤退しましょう。

奏君

阿良々木奏君。阿良々木家の次男。『合わせ鏡』の怪異で吸血鬼のお兄さんである阿良々木君の盾で、ボディガード。阿良々木君の無茶に文句を言いつつも、キッチンとフォローができる辺り本当にしつかりしていると思う。ちよつと幸薄だけど、家族を守ろうという気概も強いし、阿良々木君が安心して喧嘩を任せられるくらいだから、本当に強いんだと思う。その奏君があそこまで怪我を負うなんて、たぶん、阿良々木君も想像してなかったんじゃないかな。

もし、予想してたなら、失踪した後あんなに慌てないはずだもんね

「やあ、どうだった？」

「そのままです。一緒に寝てました」

「若いねえ」

昔は僕もモテモテだったんだけどねと忍野さんは言う。たぶん、本当なんだろうな。きつと、阿良々木君みたいにモテモテだったんだと思う。本当に忍野さんは阿良々木君と似ていると思う。

「一つ、いいですか？」

「ん？」

「忍野さんはどこまで分かってるんですか？」

「どうしたんだい。そんなに真剣に。何かいいことでもあったのかい？」

忍野さんは変わらない。仮に何かをするとすれば、それは「私たちが勝手に助かるだけ」。合理的で、本人の意思を尊重するとても強い方法だと思う。少なくとも、阿良々木君みたいに強引に突っ込んでいく方法とは違う。忍野さんはもつと慣れている。

「どうして、阿良々木君たちに嘘をついたんですか？」

日本全国の伝承を図書館やインターネットで毎日調べたけど、どうしても納得できないことがあった。怪異と伝承は違うのかもしれないけど、阿良々木家の家系図と病院の公式記録をなんとか見せてもらって裏付けも取れた。

「仮に死産で双子の片方が亡くなったとしても、病院にその記録は残ります。でも、奏君に関する記録はどこにもありませんでした」

でも、確かに阿良々木君は四人兄弟だった。

「そして、鏡に関する伝承は、特に『合わせ鏡』の伝承は、ほとんど人為的な要素が必要です」

「ははっ、よく調べたね。さすが委員長ちゃん。元気だねえ」

忍野さんの態度は変わらない。黙って肯定してくれてる。

「阿良々木君は誰かに、かなり昔に、『合わせ鏡』の怪異を誰かに埋め込まれたんですね？」

「うん。そうだよ」

「やっぱり」

だけど、阿良々木君はそれを黙って、奏君に嘘を付き続けたんだ。そのままお兄ちゃんとして振る舞い、つい最近までずっと我慢してた。

「馬鹿言っちゃいけないよ。委員長ちゃん。君がやろうとしてることとは、ただの嫌がらせだ。それに、僕は嘘なんてついてないさ」

「嫌がらせですか？」

「そう、嫌味だよ。だって、君は家族愛なんて理解できないだろ？」

別段、面白そうでもなく、忍野さんは言う。確かに、私は家族愛を理解できない。知らないから、私は知ってることしか知らない。

「お兄さんが、頑張って維持してきた平和な家庭を壊そうとしているんだから、それは嫌がらせだよ。ただの悪意さ」

「このままだと、阿良々木君が…」

「死ぬかもしれないねえ。それが君に関係あるのかい？」

「私は阿良々木君に死んで欲しくありません」

「それは本人が決めることさ。家庭の問題に赤の他人が首をツッコムもんじゃないさ。特に君はなおさらね」

その通りだと思う。家族を知らない、家族を理解できない。家族に対して何かを感じることができない私が阿良々木君の家の問題に干渉する権利なんて無い。あるはずがない。あっちゃいけない。

「黙れ、小僧。死んでいいわけないじゃろうが！」

「もう、彼氏はいいのかい？」

日光が差し込むこの部屋には吸血鬼は昼間は立ち入らない。なの

に、ハートアンダーブレードさんは肩から煙を出して、痛みに顔を歪めながらも、ちゃんとそこに立っていた。

「その小娘。何か知っておるな」

疑問形じゃなくて、ただの確認事項。だから、私はゆっくり頷いた。ハートアンダーブレードさんは少し涙目で、吸血鬼にも涙腺があるんだなって、ちょっと驚いた。

「頼む。教えてくれ。俺の能力でできることなら、なんでもする。この通りじゃ。奏を、兄上を助けてくれ」

「へー、これはまた、専門家が見たら驚愕するだろうね」

「俺に誰かを救うなど、できんのじゃ！頼む！もう時間が無い」

一瞬で人を殺せて、どんなものでも創れて、不死身で、不老で、戦場ヶ原さんに憑いていた神様だって操れる人を超越した存在が…

「頼む！誰か、俺がどうしたら、奏の役に立てるか教えてくれ！なんだってする！両手足が欲しければくれてやる！今まで餌にしていた人間の遺族が俺の首を望むなら差し出す！だから！頼むから」

泣きながら、格下の人間に頭を下げて、深く土下座までして、超越種としてのプライドを捨てて、ただ、奏君のことが好きな一人のヒトとして、懇願していた。

「誰か、奏を助けて」

よかったね、奏君。ハートアンダーブレードさんは本当に奏君の

ことを愛してるよ。羨ましくなるくらいに、今のハートアンダーブ
リードさんは綺麗。だから、私は、たぶん、きっとこの後、阿良々
木君に本当に嫌われちゃうかもしれないけど、恨まれちゃうかもし
れないけど、応えたいな。

だって、阿良々木君だって、そうするでしょ？

つばさナイフ 001（後書き）

忍野さんの語りと吸血鬼としての矜持よりも奏君を優先したキスシ
ヨット

動き出した天才委員長。

次回、詐欺師 VS 天才

つばさナイフ 002 (前書き)

天才委員長無双です。

完結まで後四話です。

私は嘔吐きで、嫉妬深い。

阿良々木君の彼女になった戦場ヶ原さんが妬ましい。

歪ながらも幸せな家庭を持っている阿良々木君が妬ましい。

優すぎるお兄ちゃんたちを持っている火憐ちゃんと月火ちゃんが妬ましい。

大勢に慕われて、阿良々木君と競える立場にいる神原さんが妬ましい。

阿良々木君と本音で語り合える八九寺ちゃんが妬ましい。

万能に近い能力を持っているハートアンダーブレードさんが妬ましい。

圧倒的な力と知識を持つ、忍野さんが妬ましい。

これが『羽川翼』というとても醜い、醜悪な心の人間の本音。

「ぶつちやけたね。委員長ちゃん」

忍野さんが初めて見る胡散臭くも、嘲りでも、お叱りでもない表情で微笑んでくれた。

「お主、そのうち誰の背中を刃物でグサリとやりそうじゃの」

ハートアンダーブレードさんもだいたいぶ落ち着いたらしく、いつもの調子を取り戻してくれた。少し、残念。

もしかしたら、また猫になって暴れる日が来るかもしれない。その時、阿良々木君はまた私を止めてくれるかな。また、ハートアンダーブレードさんは私を追っかけてくれるかな。

「だから、ハートアンダーブレードさんが奏君を助けてって言ったくれた時。安心したんです」

輝かしくて、羨ましくて、妬まし過ぎる人たちの中で、阿良々木奏君だけは違う。奏君は、たぶん、私が初めて本当に応援したいと思えた人だから。

「奏君って、たぶん、私が初めて嫉妬しなかった人なんです」

「人の男をずいぶんと扱き下ろしてくれるのう。まあ、確かに毎回ミンチになっただけじゃしな」

「確かに前は酷かったね。アレはアニメじゃ放送できないよ。ほぼゲル状になってたし。傷物語でもあそこまでグロくはならないね」

確かに毎回暴力に晒されて、本人曰く、千回単位で阿良々木君の女性関係で刺されてたら、人生に絶望してもおかしくないと思う。というか、奏君、よく今まで阿良々木君のこと刺さなかったなとすらたまに思う。

「なんというか、こう頑張ってたって言いたくなるんですよ。阿良々木君と同じくらい頑張ってるのに、あの落差を見てるとつい」

「リアルギャルゲー主人公の弟だからね」

「…うむ。僕は攻略外ヒロインといったところか」

ごめんね、奏君。別に同情しているわけじゃないんだよ。ただね、奏君は見ているとつい、背中を押したくなるんだ。本当に悲しい位に不器用なのが見ていて分かるから。

あと、ハートアンダーブレードさんはなんでそんなこと知ってるのかな。

「だから、私は奏君を助けたいです。阿良々木君には後で散々叱られると思いますが、それでもできることをやります」

阿良々木君からの指示も尊重するし、私に頼ってくれたことを失敗にするつもりはない。ただ、私は卑怯で、嫌らしい方法でこの問題を解決する。

「まず、お願いがあります。ハートアンダーブレードさん。私の中

にいるあの子と話させてください」

「あの猫か」

「はい。奏君を助けるにはどうしてもあの子が必要なんです」

「結局、うぬはどこまで理解しておる？」

「阿良々木君から大方の事情は聴いてます」

たぶん、羽川が本気になって調べたら、すぐにバレるだろうからって、阿良々木君は自分が抱えていた事情を私に打ち明けてくれた。一番最初に私を選んでくれたことが、私にとって物凄く嬉しいことだったのはいうまでもないと思う。私は嫉妬深いんだ。

「そうか」

「はい。だから、あの子を起こしてください」

「やろうと思えばできるが、よいのか？」

あの子が私が無意識に抑えていた感情だってことはもう分かっている。たぶん、私の中にはまだまだいっぱいそんなモノが詰まっている。たぶん、そんなものしかない。だから、それを全部使う。もう、我慢するのを止める。私の中のあの子たちを受け入れて、私は私を確立させる。きつと、そうすれば、阿良々木君と同じ目線で世界が見える。

「はい。お願いします」

「そうか。なら、堕ちるがよい」

ハートアンダーブレードさんの紅い眼を覗き込んで、私は堕ちた。私の中の昏くて粘着質な私の底へ。

コンニチハ

『初めましてだにや。ご主人』

オソクナツテ、ゴメンネ

『それで、俺はにやーにをすればいいのかにや？またご主人のために暴れればいいのかにや？』

ウン、イッショニ

『ご主人は馬鹿だにや』

ソウダネ

『まあ、そんな馬鹿なご主人だからほっとけないんだけどにや』

アリガト

私の中のドロドロとした感情、可愛い妹達、私と混ざって、私を染めて、私を変えて、阿良々木君と同じ世界を私に見せて。トクントクンって胸が高鳴るような新しい世界を。阿良々木君が見ているのと同じ世界を私に見せて。

そして、私は受け入れて、底まで堕ちた。

「ハッ、一皮剥けたようじゃの」

還つてくると、そこには満足げなハートアンダーブレードさんの顔。絶対的な超越者に見えていたそれがとても身近に感じられる。

「はい。もう大丈夫です」

もう大丈夫。私は阿良々木君に縋らなくても大丈夫。もちろん、まだ助けてもらうし、たくさん叱ってもらうし、慰めてもらうけど、依存はしなくても大丈夫。私は、個として確立できる。肉体とか、物理的にあやふやな奏君でもちゃんと意思があつたみたいに、私は意思を持てるから。

「それで、僕はどうすればいい？」

「奏君の傍に居てあげてください。後で連絡しますから」

「ふむ。そうするかの」

さっきももう十分取乱したんだから、もう我慢しなくていいのに、ハートアンダーブレードさんは若干照れ臭そうに階段を昇って行った。可愛いなあ。超然とした美人というよりも少し天然なお姉さんの方があの人には似合ってる気がする。

「行ってきます」

「行つてらっしゃい」

私の行為について、忍野さんは特に何も言わない。ただ、いつものあの胡散臭い笑みを浮かべて、手をヒラヒラと振ってくれた。

「それじゃあ、行こうか。奏君を助けに」

私の中の妹たちに呼びかける。初めて、阿良々木君、ハートアンダーブレードさん、忍野さん、そして、奏君と同じ景色が見える。

一言で表現すれば『速い』

助走無しで、飛び乗ることができた電柱を次から次へと飛び回る。景色が流れるようにとまでは行かなくとも、まるで景色自体が自分を横切っているように感じられる。

今の私は怪異だ。『羽川翼』という怪異の集合体。私と私の中の妹達。でも、人間と何も変わらない。怪我を負えば痛みで泣き、言葉の暴力に晒されれば磨り減る。あの『合わせ鏡』の怪異を抱え続けた阿良々木君と同じ場所に私は立っている。それがたまらなく、嬉しい。そう、私は、阿良々木君に憧れ、恋焦がれ、崇拜し、阿良々木君になりたいと思ったんだ。

「やつほー、戦場ヶ原さん！」

あの無表情な戦場ヶ原さんの眼が点になるなんて光景を見ることができたのは結構役得だったと思う。阿良々木君の知らない戦場ヶ原さんゲットなーんてね。

「羽川さん？羽川翼さんよね？」

「うん。そうだよ」

電柱から一回転して飛び降りる。勝手に体が捻じれて、最小限の衝撃で足から着地、肉球なしでもできるんだって新しい発見。さて、それじゃあ、始めますか。私のエゴと八つ当たりと私にできる最善の方法を。

「今から、私はとつても、酷いことをします。人として最悪の行為を自主的に、自分の意思で進んで行います。私が行使できる全ての能力を使って、撤退的に、ある人の人生を台無しにします。日本だけじゃなくて、世界中からその人の居場所を跡形もなく消しに行きます」

「羽川さん？」

「今日は、その許可を戦場ヶ原さんに貰いに来たんだ」

戦場ヶ原さんの勘は物凄く鋭い。黙っていても、絶対にすぐに何かが起こっていることに気が付くと思う。だから、今のうちに全部説明しておかないとね。

「随分と雰囲気が違うようだけど、何かあったの？」

「うん。まあ、いろいろと」

「そう」

戦場ヶ原さんのこういうサバサバしたところは本当に好感が持てる。

「この前の蛇事件覚えてる？」

「ええ、もちろんよ」

それはそうだよ。戦場ヶ原さんが一番積極的に奏君のこと殴ってたもんね。なんか、顔が同じだからとか呟きながら。もしかなくとも、普段、奏君がハートアンダーブレードさんと付き合ってるの見て、阿良々木君に重ねてないかな。いや、さすがにそれはないか。

「あの中学生の間で流行った『おまじない』を売捌いていた犯人を、月火ちゃんと火憐ちゃんと探してて、昨日見つけたんだ」

「よかったわね」

表情がほんと、変わらないなあ。阿良々木君はよく感情が出てるって言うけどね。

「その人を捕まえるから、戦場ヶ原さんは拘わらないんで欲しいんだ」

「そう、別に関心ないわ」

ごめんね。戦場ヶ原さん。先に言質とらせてもらって。

『かいきでいしゅう
貝木泥舟』

その名前を口にした瞬間に、戦場ヶ原さんの瞳孔が完全に開いた。ヤバッ。これは不味い。もう少し時間を掛けて先に説明するべきだった。

「詳しく話してもらっわ」

戦場ヶ原さん、まだ、文房具持ち歩いてたんだ。その業務用の大型ホッチキスどこで購入したのかな。少なくとも、町内で販売しているようなものではないはずなだけだ。

「阿良々木君にはお姉さんが居たんだ。阿良々木君が中学生になる少し前に亡くなってる。ただし、ほとんど彼女のことを覚えてないし、存在した痕跡もほぼなし、写真も残ってない。家族以外で唯一、彼女のことを知ってたのは、この前の事件であつた千石撫子ちゃんくらいだったよ」

戦場ヶ原さんは何も言わない。黙って先を促している。

「その人の名前は『阿良々木 妖美^{ようび}』さん。曜日の妖美さん」

阿良々木君が奏君に月日や暦関連の名前を付けなかったのはもう、四人分埋まっていたから、暦の暦君。月日の月火ちゃん、カレンダーの火憐ちゃん、そして、曜日の妖美さん。

「その妖美さんが亡くなるきっかけを、作つたのが、貝木さん」

阿良々木君は私たち、皆に嘘をついていた。優しいけど、残酷な嘘だと思う。阿良々木君はそのどうしようもない想いをずっと自分の中にため込んでいたんだと思う。私みたいに猫に縋ることもなく、ただ、淡々と我慢してたんだ。

「阿良々木君はハートアンダーブレードさんと遭う前から怪異を知ってたんだよ。怪異って言葉は知らなかったみたいだけど」

『前から怪異という存在を知っていた』こと、それが阿良々木君が抱えていた嘘。怪異という単語は知らなかったけど、人外のナニカがたくさん蠢いて、身近にいることをずっと前から知っていた。だって、阿良々木君は『合わせ鏡』の怪異を自分に埋め込んだ犯人を誰よりもよく知っていたから。実のお姉さんに怪異を埋め込まれた。証拠は無いけど、たぶんこれが奏君が生まれた真相のはず。

「それで、『合わせ鏡』の怪異を妖美さんに渡したのは……」

「あの男ね」

「そう。阿良々木君はずっと貝木さんを探してたんだよ」

中学生になって、阿良々木君が町内では誰も知らない程のヒーローになったのは、貝木さんを探していたから、そうでなかったら、助けた人全員に貝木という人を知らないかって尋ねるわけないもんね。阿良々木君が一生懸命探していたからこそ、今回の『おまじない』の犯人はこんなに簡単に見つかった。

「あの男は、阿良々木君から姉を奪ったのね」

「うん」

無表情なままだけど、私が知っている限り、戦場ヶ原さんは今まで一番怒ってる。貝木さんに対しても、当然怒ってるだろうけど、それ以上に何も言わなかった阿良々木君に対して、怒ってる。

「羽川さんは私の両親とあの男の関係をもう知ってるのね」

「うん」

本当は詳しくは知らないんだけどね。昔、何かあった程度しか知らない。

「それを知ったうえで、私に手を引けと言っているのね」

「うん、そうだよ。だって、阿良々木君と約束したからね」

「へえ、あのゴミ。よりによって、自分の女以外を頼ったのね」

「一番大事だからじゃない？」

「ゴミの分際で余計なことを」

もう完全に顔が怒りで染まってるよ。うひゃあ、阿良々木君でもさすがにこれは危ないかも。

「私も本気で怒ってるんだけどね」

阿良々木君のお姉さんを奪って、戦場ヶ原さんの両親を苦しめた報いはちゃんとうけてもらわないと。私だって、絶対に許さない。

「だからね、戦場ヶ原さん。私は物凄く酷いことしたんだ。たぶん、意識があるときに、感情的に本気で他人に対して悪意をぶつけたのって初めてだと思う」

「邪魔よ。羽川翼」

本気で怒ってるね。ちょっと、恨むよ、阿良々木君。

「落ち着かないと、あのことバラすよ。あとのいいの戦場ヶ原さん。そんなこと言って」

「……っ!？」

さすがに今回の件では何もしないけどね。ちょっと落ち着いてもらわないと。

「本当にごめんね。償えることがあったらねんでもするから」

「…」

戦場ヶ原さんだって、当然、許せないって気持ちがあったんだと思う。家族が理解できない私にこういう資格は一切無いと思うけど、それでも、辛い思いをしていることくらい分かる。

「貝木さんはたぶん、もう二度と詐欺ができないと思うよ。だって、銀行口座は詐欺容疑で凍結されているし、携帯電話会社のブラックリスト入りしちゃったからもう電話も使えないし、今日の11時3

0分から正式に指名手配される予定だし、インターネットを使って、世界30ヶ国にこの人詐欺師ですって、公開したから。写真が手に貼ら要らなかったから、卒業した大学まで取りに行ったりしてて、時間が掛かっちゃったんだ」

「はい？」

たぶん、人生で一番苦労したんじゃないかな。月火ちゃんと火憐ちゃんに手伝ってもらって被害者の証言を集めて、証拠集めて、警察官の阿良々木君のご両親にまで手伝ってもらってようやくここまでこぎつけられた。

「あ、後、阿良々木君の提案で同性愛者として顔写真付きで複数の出会い系サイトに登録して、全国の地方自治体に痴漢と詐欺師として情報提供しておいたから」

こっちは完全に嫌がらせだけだね。

「私が阿良々木君に奴隷宣言する前に、今の羽川さんが居なくてよかったわ」

「え、私まだ諦めてないよ。こんど、ちゃんと、結婚を前提に付き合って欲しいって言うよ」

「それは無駄ね。私にメロメロなああの男が他に靡くなんてありえないもの」

ここで、ハートアンダーブレードさんと浮気してなかったって言うのは反則だよな。

「なるほど、携帯電話が使えないと思ったら、そういうことか」

私と戦場ヶ原さんが振り向いた先には、喪服のような色合いのスイツを纏った。どこか、不吉な印象を与える人が立っていた。

この人が全ての元凶、貝木泥舟。

阿良々木妖美さんに怪異を与えた人。

対抗策も考えてきた。妹たち協力してくれる。後は、私たちのヒーローが返ってくるまで頑張ろう。

『羽川。僕が戻るまで、戦場ヶ原と妹達を頼む』

初めて、私を頼ってくれた約束だもんね。阿良々木君。

つばさナイフ 002（後書き）

本気になった羽川さんによる完全な封じ込め作戦。

実際に、羽川さんならできるでしょう。

よく『にじファン』には万能主人公による原作蹂躞系統の作品が投稿されていますが、うちの奏君にはそんな能力はありません。頑張って、体張ってるだけです。最愛の恋人にすら、一回浮気されます。

そうであるが故に、つい背中を押したくなってしまふ。そんな人物です。

そんな奏君が残り四話でどう頑張るのか、最後までお付き合いください。

今回ほぼすべてが明らかになりました。

「いつの間にか羽川さんに主人公のポジション奪われてるんですけどお！？」

そんな奇声と共に意識が覚醒した。本気でブチ切れた羽川さんによる社会的抹殺が実行され、黒幕的な存在があつさりと追い詰められてしまった。そんな気がするというか、確信に近い。そう、強いて言えば、主人公がいつの間にかただのモブキャラと化していたそんな気がする。

「アレ、傷が無い？」

自称、兄貴の姉で僕の母親という人、『阿良々木妖美』に完封なまでに敗北したはず。手も足も出ないくらいに圧倒的な暴力で叩き潰された。そのま再生もできずに死んだのかと思ったが、どうやらまだ生きているらしい。真っ白で何もないただ、広い空間だが、少なくとも死後の世界では無い様だ。

「おはよう。奏お兄ちゃん」

「え、えーと、君は確かこの前の……千石撫子ちゃん」

「うん。そうだよ。撫子がお迎えの役だよ」

紅葉色のロングコートと帽子を深々と被った女の子、『蛇』の呪いに憑りつかれていた女の子。この前、兄貴に助け出されたばかりのはずの『千石撫子』ちゃんがそこに佇んでいた。

「お迎え？」

「うん。お迎えだよ」

ニコリと笑う彼女はとても可愛らしい。愛らしいという言葉を書いたような女の子だ。それなのに、この子はどこかとても投げやりに見えるのは何故だろうか。

「それと、お帰りなさいだよ。奏お兄ちゃん。ここは奏お兄ちゃんがいつも居た場所で、妖美お姉ちゃんと暦お兄ちゃんが創った場所」

いったん間を置いて、彼女は続ける。

「あと、ここは撫子のお家だよ」

ようやく稼働し始めた思考回路がこの場所がどこか教えてくれた。ココは『合わせ鏡』の中だ。体が無かった頃、俺は、『阿良々木奏』と呼ばれる存在はここに漂い、兄貴の視界を通して外を見ていた。確かな記憶があるわけではないが、自分は確かにココに居た。

「千石さんはどうして、ここにいるの？」

自分が正しく、ここが『合わせ鏡』の中だとしたら、俺と兄貴以外は誰も居ないはずだった。

「撫子はずっとここにいるよ?」

「ずっと前から?」

「そう。この前ちょっとお外に出たけど、撫子はずっとここにいるよ」

そして、突然、とても可愛い彼女の表情が若干歪む。まるで、とても嫌なことでも思い出したかのような。

「あの変な『蛇』に遭った時以外は」

となると、あの時に『蛇』の呪いに襲われて、困っていた時の『千石撫子』は本人だったらしい。もしも、アレが演技だとしたら、人間不信に陥りそうだ。

「じゃあ、奏お兄ちゃん。撫子と行こう」

「どこに?」

「妖美お姉ちゃんと暦お兄ちゃんのこと。後、今回は撫子がナレーシヨンなんだって」

「ちょっと、待って」

一旦手で彼女を制して、状況を整理することにした。ここは『合わせ鏡』の中。にもかかわらず、さも当然のように、ここに『千石撫子』がいる。そして、彼女はずっとここに居たという。

「どうして、君はここに…いや、どうやってここに入ったの？」

「妖美お姉ちゃんが連れてきてくれたよ」

また、あの人か。一体どれだけの怪異を持っているのだろう。

「ここから出たくないの？」

「なんで？」

さも不思議というように、彼女は首を傾げた。うん、月火ちゃんと火憐ちゃんの次に可愛い。訂正：月火ちゃんと火憐ちゃん、それとキスシヨットの次に可愛い。一瞬、自分の恋人（浮気疑惑有）を忘れてしまった自分は最悪だと思う。

「だって、ここならシンDOIこと何もなくていいんだよ」

「シンDOIこと？」

「うん。だって、学校とか、宿題とか、運動とか、皆シンDOIよ？」

「…それはそうかもしれないけど」

「妖美お姉ちゃんがメンドクサイこと、シンDOIことは全部代わってくれるって」

何か言うべきなのは分かるが、何も言えなかった。自分もこの住人であり、彼女の言いたいことも分からなくは無かった。説教は兄貴の様な主人公の特権であって、オレの様なキャラクターがいふべきことではないだろう。

「寂しくない？」

「うん。撫子は全然寂しくないよ」

「そう」

「撫子はここが好きだよ。ポカポカしてるから」

「かもね」

確かにここは温かい。それは前から気づいていたけど。それでもずっと居たいとは到底思えなかった。

「それじゃあ、普段はあの人や千石さんの代わりに学校に行ったりしてるの？」

「うん。撫子は寝てていいんだよ！」

「…ニートか？」

こんな可愛らしいニートがいるのだから、この国は腐っているとしかいいようがない。

「撫子はニートじゃないもん！ただ、シンドイことが嫌いなだけだもん」

「そっか」

どう声を掛けるべきか分からず、ただ先に向かって歩き始めた可

愛らしい少女の後に続いた。人拘わらないというのは一番楽な生き方だと思う。ただし、その分何も残らない。本人がそれを肯定すると言うなら、それは本人の自由だと思う。

ただ、感覚もなく、自覚も無く、自分の視界すら無かった頃とは違い、今は『合わせ鏡』の内部が視えた。合わせ鏡の虚像は無限に続いているように、白い空間に終わりは見えない。ただ、時折、何もない空中に大きな姿見が浮いている。

「あの鏡は記憶なんだよ」

「記憶？アレが？」

「妖美お姉ちゃんが教えてくれた。暦お兄ちゃんのことなら、なんでも知ってるんだって。撫子も見て面白かったよ」

「まあ、トラブルが多い人だからね」

「ここから見て、右が暦お兄ちゃんの記憶、左が奏お兄ちゃんの記憶だよ」

「なるほど」

そう、彼女は親切にも説明してくれているのであって、決して悪意は無いのだ。だから、別に左側に浮いている俺の記憶が『改訂済み』とか『改善済み』とか、『配信済み』とか書いてあることに突っ込んではいけないのだろう。一番最後の方に『神原予約済み』と書いてあるのは特に。

「あ、アレは二人がお風呂に一緒に入ってる時の記憶だよ」

「神原アアア！」

どうやって、予約した。まさか、あの後輩のBLに対する情熱は『合わせ鏡』の異空間まで侵食するともいうのか。普通にできそうで怖かった。

「そういえば、アイツ最近小説家デビューしたとか言っていたような」

まさかとは思うが、俺と兄貴が題材だったりしないだろうな。

「じゃあ、撫子はここまでだから、バイバイ」

神原後輩をどう抹殺するべきか本気で頭を悩ませていると、後ろから千石さんの可愛い声が掛けられ、無防備な背中にローリングソバットが叩き込まれた。

「はい？」

咂然とか、驚愕とか、そういう表現では表現しきれない恐ろしい何かの鱗片を味わった。

あの可愛い子に後ろから攻撃されるとは微塵も考えていなかった。

「痛っ」

そして、近くにあった鏡に頭から激突し、飛び込んできた映像に叫んだ。

「ヤベエ、月火ちゃんマジ天使」

小学生くらいの月火ちゃんが目の前に飛び込んできた。下がり気味だったテンションがマックスまで上昇した。

「ヤベエよ。うん、ヤベエよ。何がヤバいって、月火ちゃんの可愛らしさがヤバイよ」

今でも十分可愛いが、小さい月火ちゃんもまた最高だった。阿良々木奏という人物は歪みの無いシスコンなのだ。今更、否定はしない。

とまあ、興奮気味に暴走してしまったが、これはどうやら兄貴の記憶らしい。

「そして、兄貴はモゲロ！なんで、火憐ちゃんを膝に乗せている！？」

ソファで丸くなっている寝顔がラブリーな月火ちゃん。そして、兄貴の膝の上に座り気持ち良さそうに頭を預けているスマートな火憐ちゃん。嫉妬で犬歯を磨り潰してしまった。

「え？」

そのままその羨ましすぎる光景が続いていたら、俺は間違いなく兄貴を刺しに行っていただろう。テレビのチャンネルを切り替えたかのように、目の前の幸せな光景が消え、そこには地獄が広がって

いた。

『お姉ちゃん!?!』

泣き叫ぶ兄貴。必死で包丁を握りしめた妖美さんを取り押さえている。

『な、ナニコレ?』

抵抗する気力もなく、ただ抑えられている困惑気味の妖美さん。

そして、血だまりの中に倒れた月火ちゃん。

月火ちゃんの腹部にあった傷がまるで、ビデオのコマ回しのよう
な速度で戻っていく。

俺やキスショットと同じ、超人的な再生能力。吸血鬼染みた回復
力。

阿良々木月火は、大事な家族は、人外だった。

今の俺やキスショットと同じ、人外の回復力の持ち主。

阿良々木家の末っ子は『怪異』だった。

『…月火ちゃん』

意識の無い月火ちゃんの体を抱きかかえ、兄貴は泣いていた。鼻水と涙で顔をグチャグチャにして、兄貴は、俺からすれば完璧超人の兄貴が大泣きしていた。

『アッアハハハッハハハ！コレよ！コレ！これが有ればこーちゃんに元気な体をあげられる！』

狂ったように笑う阿良々木妖美が兄貴に注ぐ視線はどこまでも、慈愛に満ちていて

それに対する、兄貴の視線はどこまでも、深い憤りを潜めていた。

『お姉ちゃん！この馬鹿野郎！』

『いいよ！いいよお！こーちゃん！本気で怒って！私にぶつけて！』

その時、初めて兄貴が異常なまでに痩せていることに気が付いた。ガリガリという言葉が似合うくらいにやせ細っていた。病的な程に。

『私がこーちゃんを完璧にしてあげる！なーんでもしてあげるよ！』

ああ、なんて歪なんだろう。

また、シーンが切り替わる。

兄貴が土砂降りの雨の中立っている。どこかの林の中らしく、生い茂る葉っぱが雨に打たれ上下に揺れている。前回のシーンと違って兄貴はだいぶ今の兄貴に近い。

兄貴と相對するのは二人。和服を纏ったキツメの女性と民謡に登場しそうな童女。

「偽物であることが悪だと言っなら、その悪は僕が背負います。偽ることが悪いなら、僕は悪い奴でいいんです」

パーカーのポケットから、割れた鏡の破片を取出して、兄貴は身構えた

「影縫さん。お願いします。どうか、僕の家族を奪わないでください」

「なあ、おどれ。自分が何をしようとしているかわかっとなるんかい？」

『影縫』と呼ばれた女性は淡々と言葉を放つ。

「偽物であろうと、何であろうと、月火ちゃんは僕の妹です。コレを使ってでも、守ります！」

そこにいたのは、誰もが知っている兄貴、不敗の化物、阿良々木

曆。

「そうかい。ほな、一片の根性でも見せてみい。そうしたら、おどれのこと認めたるさかい」

そして、兄貴は何の躊躇いもなく、その鏡の欠片を自分の首に突き刺した。

こうやって、『合わせ鏡』の怪異を阿良々木曆は取り込んだ。他の誰でもなく、自分の意思で。

「これで、お姉ちゃんも止めるし、月火ちゃんも守れる。火憐ちゃんにだって何もさせるかつ！」

ボタボタと血に塗れ、泥の中で這いつくばる兄貴は、そこまでも俺が知ってる兄貴だった。

「うちの負けやな。こんなテンションじゃロクにバトルできへん」
シラケたと言わんばかりに、影縫さんはもう一人の女の子を引きづって、降り注ぐ雨の中を歩きだした。

「おどれの身内や」

「分かってます。僕が頑張りますから、僕が何とかしますから。だから、お姉ちゃんを許してください」

「うちからは何も言わへんよ」

ただ、無力なまま肩を落とす兄貴はあまりに弱々しかった。

「なあ、居るんだろう？お姉ちゃんが言っただもつ一人の『僕』」

泥と雨に濡れながら兄貴は一人ブツブツと呟いている。仰向けになつて、雨空に手を伸ばしていた。

「月火ちゃんも、火憐ちゃんも、お姉ちゃんも、父さんも、母さんも、なんとかしたいんだ」

それは懇願であり、とても尊い

「だから、頼むよ。手伝ってくれよ。誰か助けてくれよ。僕一人じや何もできないんだよ」

雨が、ザー、ザーと独特のリズムを刻んでいる。

「あーくそ、やっぱり、僕は雨が嫌いだ。なんかよく分からない音楽みたいで嫌いだ」

だから、お前の名前は『^{かなで}奏』にしてやる。

その兄貴の呟きを聞いて、自分は全部思い出した。

きすしよつとブーケ 001 (後書き)

完結まであと三話となりました。

次回、ようやく、最後の最後になって主人公無双です。

『阿良々木奏』と名付けられた存在がどのようなものだったか、簡単に語ろうと思う。今更なことであり、ただの愚痴と後悔にしかならないことを十分理解しているが、この物語を締めくくるのに必要な行為なので、許して欲しい。

これは個人的な独善であり、大した意味など無いのだが、こうやって過去を顧みなければこのくだらない兄弟喧嘩であり、姉弟喧嘩でもあるくだらない家族のいざこざは終わらないのだろう。

我が家の家族を簡単に、端的に、一言で説明するとするならば『変態』という表現が最も適していると思う。末っ子の月火ちゃんは『過激』、激情に流されて行動しつつも、冷静に行動する。手加減や後先を全く考えずに。

次女の火憐ちゃんは『純情』。信じる人の言葉をありのままに飲み込み昇華してしまう。

物理的な手段でその言葉を絶対的なものとして実現させようとする。

長男の暦は『正義』だった。自分のことを顧みることなく、誰に対しても優しい。傍にいて胸糞が悪くなるような善人だった。

そして、長女の妖美は『依存症』。他の誰よりも弟を重要視し、過剰なまでに保護し、異常ともとれる愛情を注ぐ、ストーキングから物理的な制裁までなれたものだった。そんな彼女は病弱だった弟

を如何なる形でも害されることが無いよう、怪異にまで手を伸ばした。その産物が『阿良々木奏』という『合わせ鏡』の怪異だった。

そんな家族が何よりも大っ嫌いだった

別に兄貴がどうなってもよかった。さっさと病死しろとすら思ったこともある。

別に自分はシスコンでもなんでもなかった。正直ウザかった。

別に姉に該当する人物が異常者でブラコンでもよかった。自分には関係無かった。

そう、阿良々木奏は家族が嫌いだった。

でも、そんな自分は誰にも求められていなかったから、兄貴は俺の記憶を弄った。

グチャグチャに弄った。ベタベタと有りもしない記憶を塗りこんだ。

クチャクチャと脳みそを掻きまわした。そうやって今の『阿良々

木奏』を産出した。

そうやって家族を守る手段を兄貴は手に入れた。

俺という人格を兄貴は殺して、大事な家族を守る盾を得ることに兄貴は成功した。

阿良々木奏はいつだって家族の盾だった。兄貴に創られた記憶を大事にして、馬鹿みたいに庇い続けた

『ただの創られた盾』

それが自分の正体だった。身勝手に捻じ曲げられ、作られた歪な盾、それが自分。

人格すら奪われ盾として作られた。

やっと、全部思い出した

混濁していた記憶が徐々に形を成すにつれて、本来の自分が形を取り戻し始めた。どれくらいの時間がたったのか、泣いていたのか、

笑っていたのか、茫然と立っていたのか分からない。ただ少なくとも前進していたらしい。這ったのか、歩いたのか、転がったのか、引き摺ったのか、前には進めていた。

「よお、クソ兄貴」

月火ちゃんと火憐ちゃんに膝枕をした姿勢で兄貴はソコに居た。額の部分から血が流れて左目が塞がっているらしい。右の頬が腫れ上がり、紫に変色している。本当に動けないらしく、緩慢な動作で兄貴は、阿良々木暦はこつちを見た。

「奏か？」

「ボロボロじゃねえか、馬鹿みたいだ」

「……あー、アレか、全部思い出したオチ？」

「そんな感じ」

別段怒鳴るわけでもなく、怒るわけでもなく、泣き叫ぶわけでもなく、食卓でくだらない悪戯の内容を暴露するような調子で兄貴と俺は言葉を交わした。ただし、穏やかな会話にしては物騒なことに兄貴は左手に怪異殺しの短刀を握りしめ、俺は鎖が無くなった三日月の鎌の部分握っている。

「あのさ、さっさと死んでくれないかな？ 戦場ヶ原さんにでも刺されて」

「その方がいいかもな」

「思い出したわ。確か俺が妖美とかいう、ビッグ月火ちゃんにフルボッコにされている途中で兄貴が横から不意打ちしてきたんだっ」

「せめて、バックアタックって呼んでくれよ」

あの北白蛇神社の境内で戦っている、正しく言えばなぶり殺しにされている最中に、ボロボロの兄貴が鏡の破片を投擲して、気が付いたらここに引き込まれていた。

「なんで、月火ちゃんと火憐ちゃんがいるのさ？」

「さっき連れてきた。正直お姉ちゃんがどっちを狙うか勘だったからな」

「どっち？」

「戦場ヶ原のお母さんか、月火ちゃんを狙うのか半々だった」

「結局どうなった？」

「ギリギリ間に合って、戦場ヶ原のお母さんは無事。ただし、僕が童貞卒業しそうになった」

「惜しい。爆発して死ねよ」

「惜しくねえ！」

インターネットでバラしたら兄貴を社会的に抹殺できること間違いないだが、さてどうしたものか。顔が同じというのは不便だ。

「いや、だってさ、兄貴はリアルギャルゲー主人公だし、もうさっさと刺されるか、モゲルかしてくれよ。というか、刺せよ。戦場ヶ原さんさっさとコイツ刺せよ」

「人の彼女を殺人犯にするな！」

「弟の彼女に手を出した奴が何をいうか」

「アレは違う！」

なんというかも俺が射しても何問題も無いような気がしてきた。なんか火憐ちゃんの耳が赤くなっているし、無駄に兄貴の股座に顔をうずめているし。

「お姉ちゃん対策に吸血鬼にしてもらおうと思ったら、嫌じゃボケと言われて太もも噛まれたんだよ」

「ほう、で本音は？」

「金髪美女が太もも舐めるって、スゲー興奮する」

問答無用で顔面に膝蹴りを叩き込んだ。それでも膝に妹二人を乗せたままの兄貴は大物だと思う。

「なんか奥歯が折れたんだけど」

「ついでに喉に詰まらせる」

そして、小骨が喉に刺さったような地味な痛みを味わうといい。ささやか過ぎる復讐だ。

「記憶の事だけど、何も言うことないから」

押し黙った兄貴に淡々と告げた。別に兄貴に今更謝罪されても何も変わらない。俺が記憶を弄られたことに関する怒りを忘れる訳でもなく、許すわけでもない。鎌の握りを再度確認し、兄貴の本体であるアホ毛を切り落とした。

「本体滅したり」

「だが、甘い。五秒で再生する」

「ハゲで悩んでるおっさんに売れそうだな」

そんな軽口を叩くことができるのに、溝は消えない。

「許さないから」

「まあ、そうだろうな」

特に何かをするわけでもなく、ただ佇んで、武器を構えて、睨みあふ。本当にそれだけの行為であり、別に敵意や危険があるわけでもないし、殺傷事件が発生するわけでもない。

「ぶっちゃけ、もうどうでもいいんだ」

記憶が弄られたことも、今まで騙されていたことも正直あまり気にしてはいないと思う。少なくともその程度で左右される気は全くない。

「兄貴の盾にされた。覚えてないくらい刺された」

戦場ヶ原さんと関わり始めてから、その数が急激に増した。

「殺された。何回も」

怪異絡みの事件では数えきれないほど殺された。

「そんなことがあったけど、感謝してる」

別に兄貴に感謝しているわけじゃない。

「もう、十分報われてるから」

キスショットが俺を好きになってくれた。500年間生きて、かつて愛してヒトに吸血鬼であることを拒絶されたキスショットが俺を好きだと言ってくれた。その言葉だけで俺には十分だった。

何度、兄貴の女性関係で刺されようとも

何度、妹たちが巻き起こした騒動で暴力に晒されようとも

何度、姉になぶり殺しにされようとも

何度、兄貴の恋人に串刺しにされようとも

何度、兄貴のクラスメートに引き裂かれようとも

何度、後輩に撲殺されようとも

金髪でスタイル抜群で、泣き虫で、依存癖があつて、どこか子供っぽい笑い方と、年上の魅力を兼ね備えたあの吸血鬼の寵愛を受けることができるだけで、それだけで、阿良々木奏が勝ち組になれる。

だから、阿良々木奏は阿良々木暦を恨んでいない。阿良々木暦がいなければ、阿良々木奏は吸血鬼を愛することができなかったから。別に自分は主人公じゃない。ただの脇役でいい。それでも、自分は勝ち組だ。たった一度だけ、報われた。それだけで、満足だ。

「キスショットが好きだと言ってくれた。それで、今までの苦労に余裕でツリが出る」

それが、阿良々木奏の本音。どれだけ、嬉しかったかプラトニック（笑）な関係の兄貴や戦場ヶ原さんには分からないだろう。

キスショットの肩に頭を乗せるとどんな匂いがするか

お互いを噛み、血を啜りあうとどんな味がするか

膝枕を交代で繰り返すとどんな感覚がするか

手を繋いでボンヤリしているとどんな気分になるか

こんなモノは兄貴は絶対に分からないだろう。どうだ主人公？
青春してるか？ 少なくとも、阿良々木奏は阿良々木暦より勝ち組
だぞ。そう言っちゃった。

「そっか」

「ああ、もう十分過ぎるくらいに貰ってる」

ただし、給料を支払ってくれたのは兄貴じゃないけど。

「だから、主人公はそこで這い蹲ってる」

これが今の自分が兄貴に対して言える精一杯の言葉だった。兄貴
はそこではいつくばってる。その間にさっさとくだらない問題を片
付けて、キスショットとのイチヤイチャライフに戻るから、兄貴は
大人しくそこで寝てる。そうすれば大体いつものように終わってる
から。

「任せた」

「へいへい」

本当に軽かった。今から過去最大級に危険な敵と戦うと言うのに、兄貴と俺の関係はやっぱりいつも通りのままで。ただ、左手を振った。

「奏！」

「何？」

「ありがとな」

「…別にいいよ」

本当にそれだけだった。別に兄貴が泣いているとこなんて見てない。主人公は最後までモテモテで、超人やっていればいい。後処理は地味な雑用が終わらせるだけ。

兄貴が放り投げた怪異殺しの短刀を左手で受け止めて適当にしまふ。ここは『合わせ鏡』の中、阿良々木奏の肉体なんて本来は無い。自分には肉体があるという固定観念が生み出しているだけの虚像に過ぎない。

この無限ともいえる広さの空間でも、目を閉じれば、一瞬で阿良々木妖美の近くに移動することができた。もちろん、相手も空気を呼んで待ってくれていたらしい。ビッグ月火ちゃんこと、阿良々木妖美。姉で母に当たるヒト。

「お話終わった？」

黙って頷いた。

「こーちゃんはさ、昔淒く体が弱かったんだ。だから、私が元気にしてあげるって約束したの」

阿良々木妖美の視線は誰も捉えていない。いつも阿良々木暦しか映ってない。

「私はさあー、こーちゃんのためなら何だってできるんだよ。だって、私はお姉ちゃんだから」

阿良々木妖美という人物はとても純粹で真直ぐな人間なのだと思う。病弱な弟を献身的に想い、愛し、惜しみなく努力を注いだのだから。ただ、少し間違ってしまっただけで。

「でもねー、こーちゃんはぜーんぶ、自分でやろうとするんだよね。反抗期かな？」

「思い出した。というか、俺も元々兄貴の一部だから経験した。兄貴はリハビリを乗り越えた」

それこそ、神原後輩ですら驚くであろう程血反吐を吐くような努力を継続して、あの馬鹿兄貴は乗り越えた。姉が怪異やら、怪しげな呪いを持ってきたても頑なにソレを拒んだ。

「私はこーちゃんにもっと甘えて欲しかったんだー」

「家族だから支え合うのはいいことだと思う。でも、家族関係はいつか形が変わって卒業するものだから」

両親に育ててもらって、やがて住み慣れた家から出ていく。その過程にはきつと様々なできごとがあるのだろうけど、家族関係ほど

時間の経過とともに移ろう人間関係は無いと思う。

「でもねー、私はずうっとこーちゃんと一緒に居たいなー」

「居れますよ。家族としてね」

他人が自分の思い通りに行動するなんてことはない。仮にそんな人間がいたとしたらそれはただの人形かロボットだ。思い通りに行かないから人間で、思い通りに行かなくて辛いから人は人間関係で不幸になる。後はとう折り合いをつけるか。それだけの話。

「こーちゃんは私と一緒にいるの!」

初めて見た阿良々木妖美の激情。やっぱり、月火ちゃんにそっくりだ。

「いい加減。大人になりましょう。お義母さんでお姉ちゃん」

あなたが欲しいのは『阿良々木暦』じゃなくて、自分の思い通りに行動してくれる『こーちゃん』だから。

「好きなんだもん! 私はこーちゃんが好き! なんでもしたい! なんでもする! 私はこーちゃんが好き! ねえ、知ってる? 戦場ヶ原さんのお母さんってオカルト宗教団体の幹部なんだよ。気持ち悪いよね。もし、こーちゃんがそんな人をお義母さんって呼んだら、お姉ちゃん壊れちゃう」

確かにそれは家族として望ましいことではないし、俺も断じてオカルト宗教団体なんかと関わりを持ちたくない。それは正しい意見だと思う。だが、それで殺人未遂が正当化されることはない。

「こーちゃんは綺麗なままじゃなきゃダメなの！」

「みんな汚いと思いますよ」

キスショットは人殺しだ。血を啜る生き物だ。それでも、彼女が好きだ。難しいことだと思うし、これからも悩むことだと思う。八九寺ちゃんが言っていたように、恋は動詞、つまりはD○ということ、続けなければ成されない。

阿良々木妖美が描いているのは、アイドルやアニメのキャラクターの横に自分の姿を投影しているのと変わらない。あまりに才能にあふれていたが故に、彼女はほぼそれを実現することができた。

「全て自分の思い通りに行動してくれる人間なんてどこにもいませんよ」

こんなに好きなのに、キスショットだって、浮気未遂をするぐらいだから。

「もういいよ！死んじゃえ！」

怪異の専門家ではない自分には、視界を埋める異形の塊がどんな怪異か分かる術など無いが、ただどれもが簡単に人を死に至らせる能力を持っていることぐらいは分かる。分かるが関係なかった。

肉が潰れようが、骨が砕けようが、血が渴こうが、臓器が螺子曲がろうが

阿良々木奏がやることはいつだって同じ。

阿良々木奏は盾なのだから。

ただ、立ってその攻撃を全部受け止めるだけ。

「なんで死なないの？吸血鬼とかもう関係ないレベルだよ？」

喉が潰れて声が出ないから答えることはできないが、応えは極めて簡単。ここが『合わせ鏡』の中だから。阿良々木奏には本来肉体なんて無い。ただの意識の塊だ。だから、死なない。だから、壊れない。しぶとく、粘着質にキスショットの想いに縋りついている限り、阿良々木奏は絶対に『合わせ鏡』の中では死なない。

「なんで？」

なんでも自分の思い通りに動くと思うな。

「なんで私が刺されてるの？」

阿良々木妖美の右肩には鎌があるマントを貫通して刺さっている。キスショットが初めてくれたプレゼントの一つ。空を飛んでいる時に下から姿が見えなくなるマント。

それを取り出して、三日月を包んで投擲した。俺にも下からは見えない。当たる確証もない。ただし、ここは『合わせ鏡』の中。阿良

々木奏のホームグラウンド。空間の広さと何かが落下する位置くらいは弄れる。

昔、兄貴がここで俺を弄ったみたいに。昔、阿良々木妖美が千石撫子ちゃんとここで入れ替わったように。

「別に熱血バトルも、説教も、決め台詞もありません」

だって、阿良々木奏は主人公じゃないただの美人の恋人がいる勝ち組の脇役だから。

「思い通りになんて行かないし、人生に王道もクソもない」

恋愛関係なら尚更と言おうとして、首が跳ね飛ばされた。怪異殺しの武器だけではだめらしい。ならば、自分よりも強いヒロインを召還する。そうすれば勝てる。

キスショットが駄目な彼氏を助けて、この物語は閉幕だ。

そう思った。そう思いたかった。ああ、なんでこんな時に出てくるんだお前は。

「うむ。神原駿河ここに参上！」

キスショットを召還した筈なのに、何故か神原後輩が召喚されてしまった。

「てか、なんでお前なの！いまここでキスショットが登場して華麗

に俺を助ける場面だよねここ！」

「何事も思い通りにはいかないのだ」

「そうだけどさ！確かにその通りなんだけどさ！」

何故このタイミングで出てくる。

「ふ、師匠ともあろう方が大切なことを忘れている」

「なんだ？」

阿良々木妖美を完全に無視して会話は続く。

「読者が最後に臨む展開を忘れている！」

「…なん…だと？」

馬鹿な駄作ではあるがこの作品が読者様のご要望を無視するなんてことはないはず。

「ずばり！B L 的な展開だ！」

「帰れ」

イロイロと台無しだった。

本当に世の中思うように行かない。

きすしよつとブーケ 002（後書き）

あと完結まで二話となりました。次回は羽川編の完結です。

人間関係ほど思うようにいかないモノは無いでしょう。そんな人間関係に振り回されつつも受け入れる奏君と理想の関係を望み続ける妖美さん。

そんな二人 + α が答えを出してこの作品は終わります。

最後に読者の皆様から感想を頂ければ、本当にうれしいです。

また、次回作である『かわいい子には東方と、異世界と、紅生姜を』もよろしく願います。

つばさナイフ 003 (前書き)

つばさナイフ編完結です。

次回がいよいよ最終話。長かったな！。

でも、偽物語のアニメ化と傷物語の映画化で化物語の人気はこれからも続くと信じたい作者です。

貝木泥舟という人の印象を的確に一言で表現するというなら『不吉』という言葉がとても適切だと私は思う。学生時代の写真では何度か見たことがあったけど、こうして直接目に下時に私が抱いた印象は鴉を見たとか、黒猫が横切るのを見たとかそう言った不吉とは違う別の感覚。

『真夜中に廊下の隅の暗闇を見て、何かがそこにいるような気がして、怖くなる』そんな感覚を抱いた。それはハートアンダーブレードさんのように敵対したモノに対して威圧感を与えるような感じじゃない。忍野さんみたいに底知れない印象を抱かせる感じでもない。ただ、気味が悪い。そういう人だった。

「ふむ」

貝木さんは手に持っていた缶コーヒーの缶を近くに会った自動販売機のゴミ箱に捨てるところに歩いてきた。意外とマナーのいい人らしい。少し驚いた。

「さて、お前とは仕事上特に会った記憶が無いが、身内の誰かが俺に騙されて意趣返しでもしに来たか。今時随分と珍しい、男気のある子供だ」

そして、貝木さんは戦場ヶ原さんに向き直って、

「しかし魅力がなくなっただな、戦場ヶ原。普通の女子になっている」

そう言い放った。別に表情が変わるわけでもなく、ただ重い口調で淡々と語る。抑揚のない声。忍野さんみたいに饒舌なタイプとは正反対な人。ただし、二人とも全ての情報を得たうえで、会話をするという確信犯的な意味では全く同じ。

「二度と会いたくなかったというのは嘘ね。会いたくなかったというのなら、一度として会いたくなかったのだから。だけれど、今はあえてこういうべきでしょう。会いたかったわよ、貝木さん。うちの男が随分とお世話になったみたいね」

今は暫定で戦場ヶ原さんの彼氏だけどね。そのうちね。そのうちだからね。後三か月以内に私と浮気するようにこれから頑張るから。

「俺は会いたくなかった。普通の女子になってしまったお前になど、決して。前に会ったときのお前は闇の様に輝いていたぞ。いや、悟っていたと言うべきなのか。実に騙しがいがあった」

「…よく言っわ」

文房具を構えた戦場ヶ原さんが本気で怒っていることは誰の眼にも明らか。まあ、当然と言えば当然だよな。私は別に両親が離婚しようが、家が無くなるうが、何も感じないけど、戦場ヶ原さんにとっては大事なことだったんだから。

「戦場ヶ原さん。ごめん、ちょっと話させてくれるかな」

無言で戦場ヶ原さんが引き下がってくれた。まあ、ここは一步私のために譲ってくれたんだから、できることはしないよね。

「阿良々木妖美さんについて。あなたの知っていることを教えてくれませんか？」

相変わらず微動しないまま、重々しく口を開いた。

「また、あの女絡みか。相変わらず、面倒事を持ってきてくれる」

「阿良々木妖美ね」

「ああ、全く面倒な女だ。俺を強襲して、大事な詐欺のネタを全て奪っていった」

そして、戦場ヶ原さんに視線を再度向け直し、貝木さんはこう続けた。

「おかげで、俺はお前の両親に手を出さなければいけなかった」

「嘘ね。どっちにしろ、ちょうどいい鴨がいれば手を出していたくせに」

「違うない。俺は詐欺師だからな」

誇るまでもなく、平然と語るこの人はきつと他人に対し、何かを思ふことなんて、ない。阿良々木君と遭う前の私と同じだ。この人は私と同じ天性の嘔吐き、何を感じるまでも無く、呼吸をするように嘔を吐く。

「…あんまり苛々させないでくれなしかしら。私はこれでも、とても、とても我慢しているのよ」

文房具を強く握りしめて、戦場ヶ原さんは言う。たぶん、眼を閉じて阿良々木の顔を思い出して、自分を抑えているんだと思う。

「あなたを殺すのを我慢することはとても難しい」

決意が揺らがない様にぐつと歯を食いしばって我慢している戦場ヶ原さんだけど、阿良々木が近くにいない今、いつまで持つか分からない。なるべく早く終わらせないと。

「妖美さんを普通のヒトに戻すにはどうすればいいですか？」

「無理だな。精神異常者を更生させる方法など存在しない」

即答だった。うん、そう簡単にはいかないよね。

「なら、あなたが妖美さんに奪われたものと、その特性を全部教えてください」

「無意味だな」

戦場ヶ原さんが今にも飛びかかろうとしているけど、そろそろ私も怒っていいかな。こっちは時間が無くてかなり余裕が無い。

「あの女にそんな常套手段は通用しない。五階建てのビルの窓になんの装備もなく張り付いているような相手だ」

一体、どんな光景だったんだろう。無表情の貝木さんが少しだけ嫌なことを思いだしたかのように目を細めた気がした。

「無駄よ。羽川さん。この詐欺師から何かを聞き出すなんて、無意

味よ。コイツは嘘しか吐かない。コイツと会話を続けて有益なことなんて何もないわ」

「そうだな。だが、仮に俺の言葉が全部嘘だったからと言って、それがどうしたというのだ。俺は詐欺師だ。戯言以外は口にしないのは、むしろ誠実というべきだろう」

「ああ言えば、こう言う」

「ふむ。ならば、一つだけ有益な情報を与えてやろう。かつてお前に乱暴をしてようとした男はもうとっくの昔に交通事故でなんのドラマも無く死んだがな。あの教団の上層部は壊滅したぞ。あの女に惨たらしく殺されたらしい」

阿良々木君がお姉さんが人を殺してしまったと知ったら、悲しむだろう。

「自分の弟の周りにカルト宗教団体の関係者が近づいて欲しくないと云っていたからな。もう、誰一人残っていないだろう」

常識的に考えれば誰だって自分の家族にオカルト宗教団体と関わりなんて持つて欲しくないと思う。その点においては阿良々木妖美さんという人は意外と常識的なのかもしれない。

「ただ、お前の母親は死ななかったそうだな。あの女によく似た学生服の男子に助け出されたらしい。惜しかったとあの女は本気で悔しがっていたな」

よかった、阿良々木君はちゃんと間に合ったんだ。でも、助けられただけで、別に戦場ヶ原さんのお母さんが戻ってくるわけじゃない

い。別に家庭が修復されるわけじゃない。完全に阿良々木君のエゴだ。

「…どうせそれも嘘でしょう」

戦場ヶ原さんがかろうじて小さな声で言い返した。若干震えている。そんな戦場ヶ原さんの手を私はそつと握りしめた。きっと、阿良々木君なら同じことをするだろうと思って。

「嘘だろうとどうだろうと、所詮この世に真実などない。心配するな、過去は所詮過去に過ぎん。超えることにも、追いつくことにも価値はない。ただ、あの女が起こした一連のできごとが今になってもまだ続いているというだけだ。ただ、それだけのことだ。精々、あの女の弟とやらと幸せに過ごせばいい。別に昔、俺に惚れていたこと別に浮気に値しない」

さらばだとそんな別れの言葉を残す様にして、貝木さんはその場から姿を消した。私が周到に張り巡らせた包囲網に異を唱える訳でもなく、特に気にすることも無く、ただ後味の悪い感覚だけ残して、不吉な男の人はいなくなった。

「今の話、阿良々木君に言っていていい？」

「嘘に決まってるでしょう」

「どうだかあ。戦場ヶ原さんは惚れっぱいから」

「どの口がソレを言うのよ」

このときつと私はとてもいい笑顔を浮かべていたんだと思う。

悪友みたいな笑いを浮かべることができて、お互いにとんでもない男の子を好きになっちゃったんだなって実感できたから。

「さーて、自分の女以外に度々デレているあのクソムシはどこに行ったのかしら？」

「うーん、それだね。結局、奏君を助けられそうな情報は何も手に入らなかったし、直接妖美さんを探して聞くしかないね」

たぶん、貝木さんは何か知っていたんだろうけど、とてもじゃないけど役に立つような情報はくれなかったと思う。

まず、阿良々木妖美さんと直接話をしないとイケない。

「んー、別にそんな必要ないけどね」

まるでそのタイミングを見透かしたかのように後ろからいきなり声を掛けられた。誰かと思って振り向くとハートアンダーブレードさんが近くの民家のブロック塀に寄りかかっていた。

アレ？　なんで吸血鬼が白昼堂々と歩いているんだろう？

こんなに太陽が明るく照らしているこの時間に、なんでハートアンダーブレードさんが出歩いているの。戦場ヶ原さんも同じ疑問を思ったらしい。不思議そうにハートアンダーブレードさんを見ている。

「初めまして、阿良々木妖美です」

実に楽しそうにハートアンダーブレードさんの顔をしてその人は優しげに微笑んだ。

「羽川翼さんと、戦場ヶ原ひたぎさんでいいのかな？うちのこーちやんがお世話になってるみたいで」

薄手の水色のワンピースに麦わら帽子と普段のハートアンダーブレードさんならあまり好まない様な清楚な格好で佇んでいるその人は一言でいうととても美人だった。

「あなた、ハートアンダーブレードさん？」

「違うよー。もう私の体なんだなー。これが、『合わせ鏡』の真骨頂なんてね」

左手の指でクルクルと麦わら帽子を回しながらハートアンダーブレードさんの顔をした妖美さんは微笑む。ハートアンダーブレードさんと同じなのに全然違う印象を受ける。子供っぽい感じがする。

「奏君たちはどうしたんですか？」

「んー、別に元気だよ。今頃、私の偽物と戦ってるんじゃないかな？」

だから、二人はここに来ないよと付け足す。

「いやー、大変だったよ。吸血鬼を日本まで誘き寄せて、体に乗っ

取るのって。こーちゃんをどっかに誘導するために事件起こしたり、撫子ちゃんに嘘ついたり、あの吸血鬼には私をずっと抱っこしててもらわないといけないしさー」

「え？だって、ハートアンダーブレードさんが抱きしめていたのは」

意識の無い奏君だったはず、少なくとも私はそう思ってた。だって、ハートアンダーブレードさんが休むことなくずっと奏君の介護をここ数日続けていたのを私はちゃんと見た。妖美さんは私の心が読めるかのようにニコニコと笑い続けてる。

「意識不明の吸血鬼モドキとか、オカルト教団強襲なんて、ゼーんぶ、囮でーす」

初めから私も、阿良々木君も、奏君もこの人に騙されていた。この人は別に戦場ヶ原さんのお母さんなんてどうでもよかったんだ。初めからハートアンダーブレードさんの体を狙っていた。今までの全部囮。

「びつくりしたでしょ？この体は不老不死で、金髪のスタイル抜群の年上。こーちゃんの好みにぴったり」

「確かにあの男の工口本は外人が多かったわね」

ねえ、戦場ヶ原さん。なんでそんなこと知ってるの。ああ、神原さん経由か。私も金髪に染めようかな。

「あとは、あの吸血鬼モドキの体をこーちゃんのにして、おーわり」と

なんで態々そんな遠回りの事をするんだろう。

「なんでだと思う？」

とても嬉しそうに妖美さんは言う。自分の成功を見せびらかしたい子供みたいに。

「この吸血鬼、ハートアンダーブレッドって実はとっても性格が悪いのです。恋人に毎日嘘ついてるんだよー」

ハートアンダーブレッドさんが聞いたら泣き出しそうなことを妖美さんは平然と告げた。

「吸血鬼のスキル『魅了』まあ、簡単にいうと異性をメロメロにしちゃう能力を毎日、自分の恋人に使って洗脳してるんだよー。それにね、眷属は親からの命令には逆らえない。それも利用して、絶対に揺るがない都合のいい愛情を創ってる。ヒドイよねー」

ハートアンダーブレッドさんが奏君に毎日送っている命令、きつとそれはたぶん

凄く単純『私を愛して』。なんとなく、分かる気がする。私だって阿良々木君の横にずっといられる手段があるならそれを使うかもしれない。それが嘘だって分かっても。

「ね、酷いでしょ？」

ねーと私たちに同意を求めてくる。確かにハートアンダーブレードさんがやってきたことは許されないことかもしれない。

「まあ、私がこれからこーちゃんに使うんだけど。凄くない？不老

不死で、強くて、私にメロメロで、何でもしてくれるこーちゃん！
吸血鬼なのに夏の海で泳げるんだよ！」

「それはもう完全に別人ね。誰よその完璧超人。気持ち悪い」

うわぁと言いたくなるくらい見事な切り替えしだった。戦場ヶ原さんにしかできない完璧な切り替えしだ。これにいつも耐えてる阿良々木君は凄いと思う。

「あなた、あの男の姉なのに、全然あの男のこと分かってないのね」

「へえ、言うね。ブチコロスよ」

ハートアンダーブレードさんの威圧感がそのまま肌に感じられて、私じゃ絶対に勝てないと本能が告げる。万一貝木さんと戦闘になった時のために準備してきた二人の妹たちでも吸血鬼には遠く及ばない。それでも淡々と戦場ヶ原さんは言う。

「いいかしら、まず阿良々木暦という男はヘタレよ。自分の女の手さえ口クに握れやしない。毎晩オカズに使ってる癖に、こっちが誘ってもこのナイスボディに手も出せない」

誘ってたんだ、戦場ヶ原さん。絶対に途中で毒舌入ってるから、阿良々木が警戒して手を出さないだけだと思う。あと、まだ一線超えてないんだね。よかった。

「格好のいいセリフばかり吐くけど、弟がいないと速攻で殺される雑魚キャラ」

普通の人間が怪異と対峙して勝てるなんてないと思うけど、確か

にどの事件でも奏君がいなかったから死んでるよね。

「シスコン。それも重度の」

確かに二人とも重度のシスコンだよね。

「性癖が完全に中二のまま」

眼球舐めたいとか、私の下着を盗るとか確かにそうだね。

「マゾヒストでロリコン疑惑がある」

うん、そうだね。

「優柔不断。薄くて弱い。手綱を握っていないと直ぐに他の女に靡く」

うん。その通り。

「だから、あの男は白馬の王子様でもなんでもないわ。ただ、強い弟に依存しているだけのパラサイト系ダメ男。それが阿良々木暦という男よ」

よくもまあ、そこまで自分の彼氏を平然と貶せるね。

「私以外の女は皆あの男に夢を見過ぎなのよ」

ああ、悔しいなと私は思う。私にとって、阿良々木君は私を救い出してくれた白馬の王子様。戦場ヶ原さんにとってもそのはずだし、他に助けられた人にとってもそう。なのに、戦場ヶ原さんはちゃん

と、阿良々木君の本質を見ていた。阿良々木君を神格化してしまうただの夢見る女の子じゃなくて、ダメ人間的な本質をちゃんと見ていた。

「そもそも、ハートアンダーブレードさんもハートアンダーブレードさんよ。自分の容姿と性格じゃあ、ロクに男も堕とせないからそんな手を使うんでしょう」

ソレ、本人が聞いたら本気で怒ると思うよ。

「あなただって、そうでしょう。自分の弟すら、怪異に頼らないと堕とせないんだから」

ブチッという音がした。

「ああ、怒っても無駄よ。あの男はダメ男好きなメルヘン処女にもうメロメロだから」

絶対的な自信を持って、戦場ヶ原さんは阿良々木君の所有宣言をした。嘔吐きな私にはできない断言的な恋人宣言。その姿があまりにも眩しくて、私は悔しかった。

「もう、いいよ。潰れる」

悔しいけど、私にできることはこれぐらいで、私は大事な妹に力を借りて、戦場ヶ原さんを抱えて、その場を逃げ出した。負けちゃったけど、それでも私が阿良々木君のことが好きで、戦場ヶ原さんを守るって約束をしたのは変わらないから。

「遅いよ」

心渡り。怪異殺しの妖刀が私の首に迫る。ああ、駄目だ。これは避けられない。脱出方法が何通りも思い浮かんでも、身体能力的にかかせない。

「ええ、本当に遅いわ。今まで何をやってたのかしら」

そう戦場ヶ原さんが言い、私の首は跳ね飛ばされていなくて、見覚えのある鎌がガツチリと妖刀を受け止めてた。

「どうも、スーパー阿良々木ブラザーズです。恋人取返しに来ました」

砕けた調子で、カレはそう言った。

つばさナイフ 003 (後書き)

次回完結です。

ここまで読んでくださった皆様に心から感謝を。

きすしよつとブーケ 最終話（前書き）

ついに完結です。

全ての読者様に感謝を

きすしよつとブーケ 最終話

兄貴が、干乾びたミイラのようになって倒れていた。どう見ても、完全に死んでいる。

何故か召還された神原を無理矢理押し戻してみたらいつの間にか、誰も居なくなっていた。まさか、兄貴の方に行ったのかと慌てて戻ったら、この結果だった。

「いつか兄貴は絶対に女絡みで死ぬかと思ったけど、まさか本当に女絡みで死ぬとは思わなかった」

何度も盾にされ、身代わりとして刺され続けた身だが、流石に自分の兄の死に何も感じないかと言えば、もちろん、感じる。ただ、あまりに唐突すぎてなんとも言えない複雑な気分で黙って、干乾びたミイラのようになってしまった阿良々木暦に手を合わせた。

「南無。頼むから八九寺ちゃんみたいに幽霊になって化けて出ないでくれよ。見えないことをいいことに覗きしかしないのは分かっているからな」

さすがにこのままでは忍びない。せめて、持って帰ってちゃんとした葬儀をしないと。

「安らかに眠れ、クソ兄貴」

「勝手に殺すな馬鹿弟」

「いや、だってもうアンタ完全に死んでるじゃん！社会的に！」

兄貴の右手に握られているのは歯ブラシ。ごく普通の市販の歯ブラシだ。他にも二つほど、足元に転がっている。なんか頬染めて、肌がツヤツヤのマイシスターズと千石撫子ちゃんが床で満足そうに横になっている。

干乾びた兄貴、肌がツヤツヤな妹二人とその友人。完全にアウトだ。

何故、兄貴が歯ブラシを握っているのかは知らないが、間違いく言える。

「完全にアウトだ。いつかヤルとは思っていたけど、まさか本当に性犯罪に走るとは」

「走っていない！」

「どう見ても事後だろ、コレ」

この光景を見れば、俺以外の誰が見てもそう言うだろうし、戦場ヶ原さんなら即座に兄貴を刺しているだろう。

「ただ歯を磨いただけだ！」

「はい？」

歯を磨いてこんな風になるわけないだろうがと言いつ返そうとして、火憐ちゃんが数日前に兄貴に歯を磨いてほしいと言っていたのを思い出した。まさか、アレか。

「いろんなことを黙ってた罰として、僕が月火ちゃんと、火憐ちゃんの歯を磨いただけだ！」

「……千石ちゃんは？」

「仲間外れが可愛そうだからって、月火ちゃんが一緒に磨いてもらうって」

確かに月火ちゃんならそう言うだろうな。友達想いというか、引っ張り回すのが得意な月火ちゃんなら。

「なんで、兄貴は干物みたいになってるんだ？」

「合わせ鏡を使いすぎて脱水状態になっただけだ」

視線が完全に泳いでいる。明らかに挙動不審。絶対に嘘だ。

「で、本音は？」

「なんか、うちの妹と撫子が世界一可愛く見えたから、地面に頭を叩きつけて、我慢した」

「うん。兄貴は正真正銘の変態でロリコンだよ」

「馬鹿な！僕は八九寺にしか欲情しないぞ！」

「ロリコンじゃねえか！」

本気で殴り飛ばした。面白いぐらいに兄貴が吹っ飛んだ。しかし、このままでは終わらない。ここで確実に去勢する。

「ま、待て奏！キスショットがヤバいんだ！ちゃんと、撫子から情報収集してたって」

「ほう、去勢してやるからさっさと吐け」

「お姉ちゃんがキスショットの体に乗っ取る気だ」

「いや、意味不明だ」

「だから、『合わせ鏡』を使ってキスショットに乗り移るつもりなんだよ！元々日本に、この町にキスショットが来たのも、全部お姉ちゃんの仕業だ！」

「なら、お礼言わないと」

お蔭でこうして出会えたわけだし、なんて呑気なこと言ってる場合じゃないな。詳しいことはどうでもいいから、まずはキスショットを助けに行くとしますか。でも、キスショットの体乗っ取ったって別にあまり意味が無い気がする。もうあれだけの怪異を持っていれば十分なはずだけど。なんて、ふざけた思考をしつつも兄貴は必要な情報を全部くれた。

阿良々木妖美の目的は、兄貴と恋人になれる不老不死の体。そして、二人揃って永遠を生きること。皮肉なことに、キスシヨットの願いと同じだった。

「とりあえず、ココ出よう」

この辺りはさすが兄貴、瞬時に北白蛇神社に戻っていた。

「ああ、兄貴。ついでだからちよつともらうぞ。後、寝てろ」

兄貴が何か反論する前に兄貴の首筋に噛みついて血を吸った。何回も死んだダメージが大きすぎるから兄貴で回復させてもらう。これくらいは許されるだろう。

「博識な師匠ならもちろんご存じだと思われるが、吸血鬼の吸血行為は一種の性行為らしい。キスと性行為を両方に一片に行える素晴らしいエロい行為だと私は思うのだが、師匠はどう思われるだろうか」

「吐き気がしてきた」

本当に飲んだ兄貴の血液を全部吐き出しそうだった。というか、一体どうやって、いつの間に現れたこの変態後輩。

「エロある所に、神原駿河在りだ」

「誇るな、変態」

「ああ、もっと罵って欲しい」

「駄目だ。コイツはやっぱ最強だ」

どんなラスボスよりも恐ろしい存在がここにいた。究極のマゾヒストこと、神原駿河だ。まあ、いいや。

「この四人任せていい？」

「うむ、私の命に代えても守って見せよう」

「頼もしいな。ここは任せる」

言いたいことは山ほどあるがこれ程頼りになる味方はそうそういないだろう。本当に素晴らしい後輩に恵まれたものだと思う。

「さて、師匠」

「ん？」

「別に私が美味しくいただいてしまっても構わないのだろう？」

「あるに決まってるだろうがこの馬鹿野郎！さっきの感動を返せ」

下心満載だった。もし、俺がこの場を離れたら、この変態が何をするか分かったものではない。

「ふむ、そうならば師匠が早く帰ってきたこの私のパトスを止めないと」

「…ありがとう、神原後輩」

要するに早く帰って来ないと我慢できなくなってしまう。だから、さっさと帰って来いという遠回しな優しい後輩なりの応援だった。若干緊張が薄れた。そのまま、兄貴に手を伸ばし、あることを実行した。神原後輩は真っ青になっていたが、最後までその行為を見ていた。

「神原後輩」

「し、師匠。さすがに今のは私でもちよつと」

「兄貴のことは好きにしていーぞ」

お互いに非常にいい笑顔でサムズアップを交わした。積年の恨み。ここで味わうがいい。神原後輩の手によってな。

俺はたぶん、その光景を見ることができないけど、神原ならいい感じでお仕置きしてくれろうだろう。そう思いながら、今までの最高速度で飛んだ。遠くに見えるのはキスショットの顔をした別の誰かが羽川さんと戦場ヶ原さんを襲っているシーン。

「どうも、スーパー阿良々木ブラザーズです。恋人取返しに来ました」

振るわれた心渡りを受け止めながら、なるべく軽めにそう宣言した。だって、キスショットを無事に取戻すことは確定しているから。

この『合わせ鏡』、兄貴の首から抜き取った、俺と兄貴の繋がりの証拠である『合わせ鏡』を使って、全部終わらせる。兄貴には見せられないワンマンライブだ。

「遅かったじゃない」

「どこぞのロリコンと付き合ってたもので」

「そう、後で私がパッチンしておくわ」

「私も手伝うよ。戦場ヶ原さん」

「よろしくお願いします」

二人が安全圏に離れるまで阿良々木妖美は黙って待っていてくれた。意外と律儀なのかと、思えば睨み殺さんばかりの勢いで、俺を睨んでいた。

「それ、こーちゃんの血？うん、そうだ、この匂いはこーちゃんだ。吸ったの？私のこーちゃんの首にキスしたの？ねえ？したの？」

「キスショットを勝手に弄んでくれたお返し」

受け止めたつもりが、左肩から左太ももまでばっさりと素手で引き裂かれた。力の差は圧倒的、伝説の吸血鬼のキスショットの能力を持つ相手に正面から戦って、下っ端吸血鬼が勝てるはずが無い。それは兄貴の話を聞いた時から理解してた。心渡りによる致命的な攻撃で体がドンドン削られていく。

「実を言うと気が付いてたんだ。キスショットが何かに怯えてたこと」

いつものように血を吸われて、意識が朦朧としていた時にキスシ

ヨットは俺にこう語り掛けていた。本人は独り言のつもりだったの
だろうけど、はつきりと聞こえていた。

「なあ、奏。うぬもいつか奴のように、化物にした儂を恨むのか？
儂を罵りながら死ぬのか？　なあ、奏、この心地よいぬるま湯が
終わりのはいつかのう」

いつかまた捨てられるという不安が、キスショットを弱くして、
簡単に体に乗っ取らせた。それは阿良々木妖美という一人の姉がい
つか、病弱な弟が自分の元から巣立ってしまうのを極端に恐れたの
とよく似ている。

「兄貴みたいにヒーローにはなれないから。ハッピーエンドにはで
きないけど」

怪異は人の想い、疑念、信仰、歴史をベースに生まれるなら、そ
のベースとなった対象が役割を終えた時、その怪異はどうなるのか。
一度忍野さんに聞いたことがある。

「消えるよ。また新たな目的が与えられるまで、その怪異は消滅す
る」

なら、『阿良々木妖美を止める』という役割を果たした自分はど
うなるのか。たぶん、消滅するんだろーなと薄々前から思っ
てはいた。だから、阿良々木妖美を止めなければずと、キス
ショットを支えられると思った。

でも、やっぱり思ったようには行かなくて、この物語の
終わりはやっぱり自分の終着点になりそうだった。阿良々木妖美を止めな
ければ、キスショットを救えない。

故に、阿良々木奏の物語はここで終わりだ。

「約束はちゃんと守ったぞ、クソ兄貴！」

無理矢理押し込んでおいた『合わせ鏡』の破片を口から至近距離で吐き出してやった。キスショットの端正な顔が苦痛で歪んで、痛みで床を転げまわる。

いくらキスショットの身体を手に入れたかといって、本物の吸血鬼のように痛み慣れているわけじゃない。兄貴相手に一度だけなら勝てる。前に忍野さんはそう言ってくれた。兄貴相手に一度勝てるなら、この偽物相手にも一度は勝てる。

「もう兄貴の一部じゃないんでね。手加減なんてしない」

自分の肉体を崩す、もう数えきれないほど、兄貴と同化する度に繰り返してきたこの行為はもう条件反射に近い。形が無くなった自分という概念は、キスショットの顔に突き刺さった『合わせ鏡』の破片の元へと瞬時に戻る。

兄貴と俺を一つの肉体に宿らせていた原因である『合わせ鏡』の破片を抜き出した今、ただの一人の吸血鬼モドキに過ぎない。元々肉体が無い、目的を達すれば消滅する『合わせ鏡』の怪異は長持ちなんてしない。だから、この捨身の作戦に出た。

「男のヤンデレとか誰得だよ」

「儂得じゃ」

だから、『合わせ鏡』の破片を乗っ取られたキスショットに突き

刺した。これでキスショットと肉体を、忍野さんが言う存在位置を、共有できる。キスショットと俺の二人で肉体の主導権を奪い返せる。

「久しぶりに声が聴けた」

「うむ」

それだけで十分報われた気がする。

「なあ、キスショット。ずっと一緒にいてくれるか？」

「のう、奏。儂を愛してくれるか？」

「ああ、ずっとよろしくな」

必死に逃れようとする阿良々木妖美をキスショットと二人で抑えながら、たまに枕にするキスショットの腹部に、怪異殺しの妖刀、心渡りを突き刺した。カニバリズムと心中。キスショットと俺の愛情はとことん歪んでいた。

「酷いよ。こんな終わり方ってないよ。誰もハッピーにならないじゃん。こーちゃんが悲しくなるだけじゃん」

阿良々木妖美は嘆く。彼女の言う通りだと思うが、圧倒的な力の差と自分が消滅することを考えれば、手段は限られていたと思う。

「助けて！こーちゃん！お姉ちゃんまだ死にたくないよー！」

何を今更と思ったが、俺も、キスショットも肝心なことを忘れてた。俺の兄貴は、阿良々木暦はどこまでも胸糞が悪くなるようなお

人好しだつてことを。

「分かったよ、お姉ちゃん」

いつの間にか、本当にいつそこに居たのか全く気が付かなかった。兄貴が、羽川さんが、戦場ヶ原さんが、神原後輩が、火憐ちゃんが、月火ちゃんが、千石ちゃんが、八九寺ちゃんがいつの間にか、すぐ近くまで来ていた。

「お姉ちゃんが今まで、色々と僕のためにやってきてのは、分かっている。許されることじゃないけど、僕は懸命に助けようと頑張ってくれた昔のお姉ちゃんが好きだったよ」

そして、兄貴はキスショットに正確には、阿良々木妖美の胸に何かを突き刺した。見覚えのある小さな鏡、忍野さんが怪異を写すとしてくれた、兄貴が戦場ヶ原さんが抱えている『蟹』を知る契機となった小さな、小さな『合わせ鏡』。それを突き刺した。

「大丈夫。お姉ちゃんは僕とずっといればいいよ。僕が背負っていくから」

阿良々木妖美が兄貴と同化することに対して、どう思ったのか言葉で聞くことはできなかったけど、制御を奪われたキスショットの顔は少なくとも、嬉しそうに笑ってた。彼女は兄貴の中で微睡みに包まれながら、これから過ごすのだろう。

「よお」

「おっ」

キスシヨットの視界を共有して、兄貴を見上げるといっなのは中々貴重な体験だった。そんな感覚のなか、ふとキスシヨットに尋ねてみた。

「なあ、キスシヨット。まだ死にたいか？」

「嫌にきまっとるじゃろうが馬鹿たれ。一人残されるのはもう嫌なだけじゃ」

それは自分も全く同じだったから、だからいつもようにヒーローになれない脇役の俺はこう言った。

「兄貴、助けてくれ」

「ああ、任せろ」

そして、兄貴はやっぱりハーレム野郎のリアルギャルゲー主人公で、何でもできるム力つく野郎で。平然と自分の腕を刃物で切って、血をキスシヨットに差し出してくれる。

「全くこの美肌に痕が残ったらどうするのよ」

戦場ヶ原さんは相変わらずツンデレで。

「これいいかな。私の血で足りるといいけど」

羽川さんはやっぱり根っからの委員長気質で。

「私はマゾだが、自傷癖は無いようだ」

この愛すべき後輩はやっぱり変態で。

「やっぱり、兄ちゃんはおたし達がいないと駄目だな」「だよー」
仲が良すぎる妹たちはいつも通りで。

「あ、私幽霊ですから血が出ませんので悪しからず」

八九寺ちゃんはまあ、マイペースで。

「……お姉ちゃんは優しくったから」

たぶん、この子は将来苦労すんだろうなとか、千石ちゃんを見ながら思っ

キスショットに埋め込まれてしまった『合わせ鏡』の破片が、まだ、自分という存在を繋ぎとめていることが直に感じられて。あー、これはもうキスショットから絶対に離れられないから結婚するしかないなと自覚しつつも、それが嬉しくて。

「なあ、兄貴」

「なんだ？」

「疲れないか？その生き方？」

これから、自分の姉の罪も背負って、戦場ヶ原さん以外にも助け続けながら、生きるその生き方は。

「疲れるさ。お前が手伝ってくれないと無理だっ

「そんなもんか？」

「そんなもんさ」

「ふーん、じゃあ、キスショットと一緒に手伝ってやるよ」

それがキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの『合わせ鏡』となった自分の新しい存在だから。

だから、やっぱり、まだ死にたくないなあとお互いに視線で交わしながら、寂しがり屋の吸血鬼の手を握って、ぼんやりと空を見上げた。

ああ、ムカつく程に晴天で、まっすぐに伸びた飛行機雲がちょうどこれから先の道標のようで、なんとなく、嬉しくなった。

きすしよつとブーケ 最終話（後書き）

全35話完結です。

賛否両論あると思いますが、このグダグダ感がこの作品の主人公である奏君らしさだと、作者は思っています。

兄の背中を追い続け、結局追い越せず、最終的にはまた頼ってしまふ。でも、その過程で少し成長する。そんな主人公を皆様に提供できたなら、作者にとってこれ以上うれしいことはありません。

東日本大震災の影響もあり、ずいぶん執筆に時間が掛かってしまいました。この作品が少しでも皆様にとって、モチベーションを保つ理由になればと思います。

実は奏君のこんな話が見たかった。

作者（Brandon）にこの作品で二次創作を書いて欲しい。

そんなご要望があれば、いつでもお待ちしております。現在投稿している他の作品や今後投稿予定の他の作品で皆様にお会いしたいと思います。

長い間、この物語にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0327h/>

化物語（双）

2011年10月3日09時17分発行